

LE VIN, LA VIGNE ET LA BIODYNAMIE

ワイン、葡萄、ビオディナミ

By *Nicolas Joly*

訳：藤田 和子

目次

1. ワインへの情熱と AOC -----	3
1-1. 葡萄の特殊性	
1-2. 物質の4つの様態	
1-3. 植物の一つひとつにその独自性を見出す	
1-4. 植物の語る秘められた言葉	
1-5. イラクサの観察	
1-6. 葡萄と農業教育	
2. 農業の犯してきた過ち -----	21
2-1. 除草剤	
2-2. 化学肥料	
2-3. 「浸透性」薬剤のもたらす悲劇	
2-4. クローン栽培：失われた種固有の特徴	
3. 土地固有のエネルギー -----	27
3-1. 変化に富む気候の持つ重要性	
3-2. 葡萄の自己表現法	
4. セラーでやるべき作業 -----	33
4-1. 発酵	
4-2. 浸透圧	
4-3. 酸素添加	
4-5. 認識することの重要性	

5. 命の源への回帰：有形の科学 -----	41
5-1. 引力	
5-2. 地電流	
5-3. 磁力	
5-4. 地球のエネルギー（地力）の質を高める：建設者の叡智	
5-5. 原型エネルギーとの絆を持つ	
5-6. 倍音の法則	
5-7. 使い方	
5-8. 水	
5-9. 扉の位置を選ぶ	
5-10. 形とその特殊なエネルギー	
6. 波動汚染 -----	70
6-1. 大気中におけるエネルギーの混乱	
7. 全体性 -----	77
8. 葡萄栽培におけるバイオダイナミ -----	81
8-1. プレパレーション	
8-2. 牝牛の角	
8-3. バイオダイナミのプレパレーションの使い方とその特性	
8-4. プレパレーションの特殊な働き	
8-5. 農業をもっとクリエイティブにするために	
8-6. 違った形で働きかけるために理解する	
9. 太陽と恒星が作る宇宙体系、それらが地球に及ぼす影響 -----	100
9-1. マクロ的宇宙観（巨視的宇宙観）	
9-2. 地球を構成する物質の背後に隠された活発なエネルギー	
9-3. 太陽の二つの側面	
9-4. 「情報を与える」システム	
9-5. 生きた体系	
9-6. 叡智を活かす	
9-7. 現場での実践	
10. 結論 -----	119

1. ワインへの情熱と AOC

ワインへの情熱は、人生に何か新たな意味を追い求めるものとして、そしてまるで熱にでも浮かされたように、今や地の果てに至る世界の隅々にまで広がりつつある。世界各地に植えられたセパージュの味わいを比較し、年々気候はおかしくなる一方だということにも拘わらず、その土地がもたらすとされる厳密厳正なブランドワインを味わおうとする。抜栓の翌日、或いは翌々日、「全く新しいもの」として味わってみたり、イメージを膨らませ、予想を立て、熱き想いに胸を膨らませ、様々な問いを投げかけてみたりもする……。そう、ワインとは、生まれや職業など一切関係なく、あらゆる人々の心を捉えて離さない熱き想いなのである。同時にこの情熱は、私たちの感覚を、印象を、そして感動を研ぎ澄ましてくれたりもする。

他方、この情熱に駆られるようにして、何の確証を掴むこともできないまま、智性は積み重ねられ、人は、今までとは違った新しい世界を極めるための力と、その想いの強さを試そうとする。即ち、手で触れることの出来ない、しかし間違いなく存在する世界。香りと味わい、そしてバランスとハーモニーに溢れた世界である。この脆く儂い世界は、常に控えめにしか自らを語ろうとしない。物質としてその姿を捉えることは難しく、芸術的な感覚を持ち合わせている人にだけ、僅かに郷愁を帯びた何かを感じさせてくれる。果たしてこの、時に余りにも危ういとさえ思えるバランスは、一体どのようにして保たれているのだろうか。葡萄という植物の持つ躍動する力、不満、そして喜びは、一体どのようにして味となり、香りとなり、そしてほとんど「楽の音」とすら言えるハーモニーへと変化していくのだろうか。私たちが知りたいと思うのは、正にこれなのである。

この様なことの根底に、本来、呼称統制という概念の真髓があるはずだった。1930年代にフランスが、ヨーロッパの他の国々に先駆けて—最初にこの制度を創設したのはポルトガルであったが—このAOCのシステムを創った頃、この国は、一体これによって何をなそうともくろんでいたのか？ 私たちはただ素直に、何世紀にもわたって蓄えられてきた先人達の知を、経験を、そして想いを守ろうとしていたに過ぎない。そして正にこれらの知が、経験が、想いが、葡萄を「良き」土地に植えるということを可能にしていたのである。では、知識というものに未だ多く目覚めていなかった時代に、良き土地とは一体何を意

味していたのだろうか？ 難しいことではない、「緑の貴婦人」である葡萄が、自ら居心地良いと感じ、その幸福を気持ち良く歌い上げることができるような土地のことである。しかし、彼女の歌う歌が、私たちが思うほど、必ずしも羨しさに溢れたものばかりでないことは、これから見ていくことになるだろう。ここでは、次のことを理解しておくにとどめたい。葡萄—かくも特別な、そしてかくも強い意志をもった植物—は、自らの持つ力を最大限発揮できる土地に植えられたとき、その土地に特有の味わいを自らの果実の中に閉じ込めることができるのである。何とも単純な原理ではないだろうか？

もっと砕いて言えば、葡萄は、自らの根を通してその土地の土壌と結びつき、しっかりと絡み合い、同時に、自らの葉を通してその土地特有の気候の恩恵を受け取るのである。気候の特徴といえば、その時々によって異なる温度条件、光の強さ、時に優しく、時に激しく吹き荒れる風、また時にしとしと、時に叩きつけるような雨、或いは朝霧、夜霧などなどが挙げられるだろう。これら全てがその土地の気候を左右する特徴であり、それがやがて転じて葉となり、そして果実として実っていくのである。ではもっと具体的には、この変化はどのようにして起こるのであろうか？

葡萄畑の一つに目を向けてみよう。まずは春、そして秋、と同じ場所で季節の移り変わりを見てみる。そうすると、秋に豊かに茂っている枝も、葉も、そしてたわわに実った果実も—1ヘクタール当り数トンもの重さになる—、6ヶ月前にはちっぽけな芽でしかなかったことが分かるだろう。そしてこれらの実りは、私達がしばしば考えるように、土壌の物質から作られたものではないことも理解できるはずだ。そうではなくて、成長した植物を構成する物質の多くは、光合成の働きによって作られるものなのである。「光合成」という言葉は、余りに無機質で何とも魅力に欠ける表現だが、しかし、科学の力では決して成し遂げることのできない、非常に神秘的な自然の働きなのである。光合成とは、熱、光、そして空気、つまり、手で触れたり、掴んだりすることのできないもの—先ほど触れた味や香りといったものも同様だが—を、二酸化炭素やデンプン、糖といった形ある物質に変換することに他ならない。もしもこれらの物質から水分を排除してしまうならば、—より科学的に言うならば、「固形乾燥成分」のみとする—ということだが—植物の92%が光合成によって作られたものなのであり、つまりほんの僅かな部分しか土壌からはもたらされていないということになる。

春から秋へと季節が移り変わる間、私たちはそれと知らずに、人間の感覚ではほとんど捉えることのできない世界のものが、植物の力によって物質へと生まれ変わっていくプロセスに立ち会っているのである。そしてここで重要な働きをするのが気候である。こうして作り上げられた物質の中にこそ、ワインを愛するもの、トリュフ、オリーブオイル、コーヒー、葉巻、紅茶などなどを愛するものを魅了してやまない豊かな味わい、色合い、そして香りの最初の兆しが宿るのである。植物はそれぞれ、「自らの」やり方でこの作業を粛々と進めていく。そして、それぞれが他にはない独自性に溢れ、私達を楽しませてくれる。このことをしっかりと理解し、「テクノロジー」という名の科学が、密かに私達の食べ物や飲み物に忍び込ませようとしている人工的な味と混同することのないようにしなければならない。

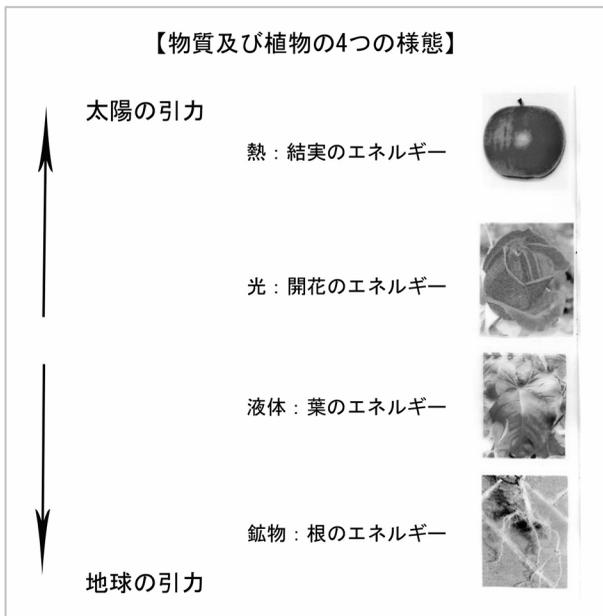
1-1. 葡萄の特殊性

葡萄は、その過剰とすら思われる鋭敏な感受性ゆえに、繊細な味わいを生み出す能力において他の植物に秀でている。という訳で、ワインとは何ぞやという問題に一步近づくためにも、親愛なる我らの友、葡萄の奥深い本質の世界を、或いはその秘められた数々の仕事ぶりを、より詳細に、大いなる関心と共に辿っていきたいと思う。葡萄は、植物界全体の中でどのようなものとして存在しているのだろうか？ その特徴は？ 性質は？ 他と異なる特性は？ 自動車のモーターのようにただがむしゃらに動くだけの機械と違って、他の全ての生きとし生けるものと同様、葡萄という植物に対してこのような疑問を持つことには、大変大きな意味がある。ではこれら疑問に答えるために、現在ではほとんど理解されることなくなってしまう中世植物学の知の世界に時代を遡ってみよう。

当時の人々は、植物というものに対して、私たちとは随分異なる捉え方をしていた。物質という、今日私たちをかくも夢中にさせているもの一恐ろしく微かな粒子に至るまで一は、彼らにとって、「型を満たすもの」でしかなかったのである。パン型に入れる生地の方とでも言ったら良いだろうか。ところが、彼らが最も関心を持っていたのは、型の方だったのである。当然のことながら、まだ彼らの知るところではなかった遺伝子などには関心が払われることはなかった。そうではなく、植物というものを毎回、独特の方法で彫りあげ、それぞれに異なった特質を刻み込んでいく力、「フォース」にこそ、彼らの興味は注がれていたのである。そのような人達に遺伝子の話をしたところで、恐らく

次のような返事が返ってくるのが関の山だった。「与えられた命令を実行するだけに過ぎない単なる労働者に、どうしてそれほどまでにこだわるのですか？その遺伝子とやらを、本来あるべき所に据えつけている大枠の建造物そのもの、もっと研究するべきではないのでしょうか？」こうして、今日、磁気共鳴などによって、ようやく物理学者がその理解を深め始めたエネルギーシステムの世界へと、私達は辿り着くことになった。このシステムにこそ、バイオダイナミはその多くを負っているのである。

1-2. 物質の4つの様態

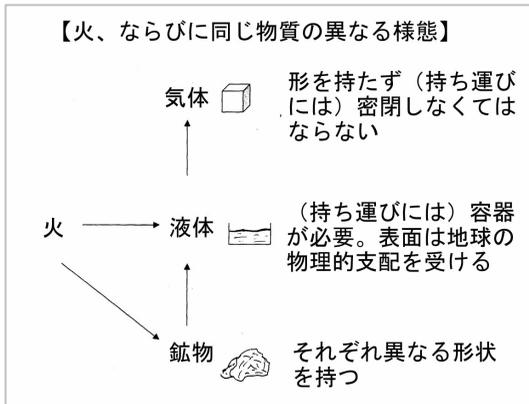


ハイデッガー・ド・ビンゲンやキュルペパーなど、現代の科学ではほとんど理解されていないながらも、一時その名を世に馳せた作家たちがいたが、彼らは皆、植物に対して、プラトンの時代から「物質の4つの状態」と呼ばれるものを通してアプローチを試みた。この素晴らしい先人たちの叡智のお陰で、私達は葡萄、

並びにワインについて、これまでとは全く異なる視点で理解を深めることができるのである。

もし、この古の科学を数行にまとめるとすると、非常に不完全ながらも次のように要約することができる。即ち、地球は、私達人類も含め、命あるもの全てに等しくかかってくる力によって支配されている。その力とは、重力である。この、地球上どこにいても逃れることのできない力こそ、持っていた手を離すと石が落下し、空からは雨を降らせ、重労働で一日を過した後には自分の体すら重たく感じる、そうした作用を引き起こす根源なのである。この力によって、

原子は互いに凝集し、物質は形を持つようになる。つまり、固体という状態をとることができるのである。この力なくして、物質界は存在することすらできない。



しかし幸いなことに、この重力とは正反対の方向に働く力、対極にある力もこの世には存在する。西洋ではこの力のことを、「太陽の引力」と呼び、東洋では揚力という言葉で表現する。言うなれば、物質を無重力の状態へと近づける力であり、重力とは逆の作用を及ぼすものである。同時にまた、物理的な性質を

持ち、特に熱と共に生み出される上昇する力でもある。気球を思い出してみると分かりやすいかもしれない。気球は、中で焚かれる炎を大きくすると、空中高くへと昇っていく。熱を加えることによって、物質は消失し、分散してしまう。重く、硬い金属も、高温に熱することによって液体となり、更に温度を上げていけば、自らの重さから解き放たれ、やがて気体と化してしまう。このようにして見ていくと、物質、そして物理的に支配された世界が、目に見える世界と見えない世界の間を絶え間なく行き来しながら成り立っていることが分かるはずである。この点については、また後でゆっくり検討することしよう。

人間もまた、この力の作用に支配されて生きている。この上昇の力があるからこそ—これはまた別の問題になってしまうが—、朝目覚めたとき、体が軽くなっているのを感じ、やる気に満ちて一日を始めることができるのである。またこの力のお陰で、良い知らせが届いたときなど、日々の苦悩にめげることなく、体が舞い上がるような喜びを感じることができるのである。私たちが情熱の只中にあるとき活発に働いているのは、実はこの力に他ならない。

ところで、古の偉大なる賢人たちによると、この相反する二つの力の間には、二つの中間的な状態が存在する。位相の高い方から言うと、先ずは空気と光の状態である。地球の重力の—或いは物質としての—影響を受け始める最初の状

態がここである。

空気と光、この二つは実は切っても切れない関係にある。光は、空気があつて初めて、私たちの感覚で捉えられる形でその姿を表すことができるのであり、空気なくして、空は青く見えることはない。大気圏の外に出てしまうと、ここでは空は、もはや薄暗い世界でしかない。空気は決して重くはないが、とはいえ、僅かながらも地球の重力の影響を受けており、そのお陰で、私たち生き物にとって幸いなことに、地球の周りを取り巻くようにして地表を覆っているのである。しかし、空気も圧縮されると一過剰な重力が掛かった場合など、硬さを持つことになる。

以上のような例えから、密度というものの影響を最初に受ける状態としての空気と光、この二つの性質がお分かり頂けたのではないかと思う。

さて、次に来るのが液体と呼ばれる状態である。この状態の最も基本的なものが、水に他ならないのだが、この液体の状態こそ、太陽によって引き起こされる上昇力と、地球がもたらす重力の、丁度中間に位置するものなのである。水は空気より遥かに強く重力の影響を受けている。つまり、水の方が空気より「地球的」なのであり、重いのである。水は、地球のもたらす重力体系と、太陽によってもたらされる上昇体系の、丁度中間に位置しているといえる。というのも、水は冷やされると、まるで石のように硬くなり、重力の影響を更に強く受ける鉱物とほぼ同じような状態になってしまう（氷を思い浮かべられたい）。ところが熱にさらされると、今度は形を失い、その姿を消してしまう。地球の重力体系から逃れ、霧や霞となって空高く立ち消えてしまうのである。

またアルキメデスがかつて語ったように、水は私たちを、一部ではあるが、その重さから解放してくれる。そのお陰で、水中を泳ぐとき、私たちの体は重力から一部解放されるという喜びを味わうことができるのだ！ 私たち自身、体の90%は水分で成り立っているといわれている。だからこそ、水中療法と呼ばれるものも効果を発揮するのであり、それは、まさしく、水が波動による情報に満ち溢れているからに他ならない。この点についても、後でじっくり見直したいと思うが、この波動こそが、実は私たちに生きることを可能にしているのである。

これまで説明してきたように、空気（気体）と液体は、地球を構成するもう一つの重要な成分である硬く混じりけのない鉱物へと至る、物質の中間的な状態である。地球上には、この液体の状態を経ずしては、いかなる生命体も存在し

えなかったし、もちろん、植物もそうである。更に忘れてならないのは、生命体は、この4つの様態の絶え間ない相互作用の中から生まれており、4つの内のどれか一つに、特に大きな影響を受けながら生存を続けているのである。ワインについて語るはずが、どうしてこのように長々と回りくどい話しを続けるのか、疑問に思われる方もおられるかと思う。それはとりもなおさず、植物が、どのようにして、地球を構成するこの4つの様態と関わっているのかを正しく理解してもらいたいからであり、言い換えれば、葡萄という植物の他にはない奥深い特質をこの本の中で見出して欲しいからである。一般的に言って、植物は、根によって地球の重力と結びつき、液体の様態とは樹液と葉、光とは花をつける力、熱とは結実の力によって、それぞれ、深い関わりを持っている。

1-4. 植物の一つひとつにその独自性を見出す

上述した問題は、更に深く掘り下げて説明することも可能であるし、実際、より具体的な形できちんと理解されるべきことでもある。しかし、もっと面白いのは、植物の中には、この4つの様態との結びつきを、非常に独特な方法で表現しているものがあるということである。

まず簡単な例から見てみよう。例えば、生まれながらの力によって光との相性が非常に強い植物があるとす。するとその植物は、その自らの特質を、目を見張るばかりの美しい花を咲かせるという形で、表現することになる。この特徴を持つのが、「ゆり」であり、その艶やかさ故に、国王は自国の旗のシンボルとしてこの花を選んだほどである。もし「ゆり」が、光との強い結びつきを持っていなかったならば、美しい花をつけるという能力は遥かに劣っていたに違いない。他の例も見てみよう。水との結びつきの強い植物、ルバーブなどは、非常に大きく立派な葉を持っているし、熱との結びつきの強い植物は、例えば穀物類がそうであるように、豊かな実りの力というものに秀でている。実際、一粒の種は、地に蒔かれると、翌年には百倍にもなってその子孫を増やすことができるのである。

しかし、この問題を更に進めると、話しは少しずつ複雑になってくる。「自然」が、その豊かな創造力により通常の図式から抜け出し、より巧妙にこの4つの様態との結びつきを操り始めると、果たしてどのような結果が生まれてくるのか。私たちには想像もつかないようなことが起こってくるのである。例えばその分かりやすい例の一つがニンジンである。この野菜は、本来、花として集約

すべき力を、根っこに鮮やかな色と香りをつけるために使っているのだ。結果として、花の方は、非常にみずぼらしく、美しさに欠けるものとなってしまった。一方、マツは、熱との強いつながりを持つが、その力を豊かな実をつけるという本来の形に使うのではなく、松脂という耐火性に優れた物質を作ることを使った。しかし、この成分のお陰で、マツは、他の植物がとても耐えることのできないような寒さにも耐えることができるのである。

またヤナギは、水だけでなく、光とも強い結びつきを持っており、そのために本来ならば（水と強い親和性を持つ植物ならば）大きくなるはずの葉がそうではなく、豊かな水分をその小ぶりな葉から蒸発させながら排出する。しかもその水分はというと、ハチたちを有頂天にさせる花々にも似て、蜜に溢れているのである。それだけではない、ヤナギの幹は（光との親和性を象徴するように）鮮やかな黄色味を帯びているのだ。イラクサは、熱との強い結びつきを持つが、しかしこの特質を本来の実、つまり種として発揮することがない。その代わりに、煎じ薬として葡萄に用いると、樹液の流れを良くする働きを持ち、その効果は激しい日照りのときでも持続する。シトロネラ（別名レモンソウ）は（同じく光との親和性が高い植物であるが）、やはり本来ならば果実へと結集すべき力を、味わいへと転化させている。実はつけず、その代わり、あの爽やかな味わいを葉の中に閉じ込めてしまったのである。同様にシナモンも、樹皮の中に力を集約し、豊かな味わいを持つようになった！ モクレンについて言えば、本来の木の硬さが葉に現れているように思われる……。

ここまで見てきて分かるように、この世には（私たちの知らない）隠されたもう一つの言語が存在する。しかもそれは非常に繊細で慎ましく、理解するのが容易ではない言葉である。しかし正にこの言語にこそ、古の先人達は賞賛を惜しまなかつたのであり、というのも、彼らは当時、この言葉を理解する力を持ち、更にこれを惑星や天体のもつ特別な力と結びつけることによって、その理解を深めていたのである。つまり、星々が我々の世界の物質に及ぼす様々な影響や性質もまた、彼らにとっては既に明らかだったのである。彼らはまた、この言葉を、詳細に定められた手順に則った上で、効能の高い治療法としても使っていた。このような形で生命と対峙するという姿勢は、現代でも、「原始的」と言われる部族の中に遺されており、彼らは自分達の身近に生きる動植物に備わった素晴らしい特質、生命力を正しく把握しているのである。

古代の人々は、今で言うところの知性というものは、決して持ち合わせてはい

なかったかもしれない。複雑な機器類も持っていなかった。しかし、現代人の生み出した道具は、常に部分的で、厳密に物理学に則った形でしか物事を分析することができず、そのために、しばしば誤った理解へと科学者を導いてしまう。古の人々は、私たちとは全く違った能力により、生命の意味に対する深遠なる答えを掴むことができたのである。私たちの身近なところにもその痕跡は残っており、例えば、植物や樹木をその特性に最も見合った時期一言い換えれば、生まれながらの力を最良の形で発揮できる時期—に剪定、伐採するやり方などがそうである。結果として最善の効果を引き出すことが可能となり、それは、音の調べの一つひとつが、周囲にあるものを利用してより良い音響効果を引き出そうとするのと同じである。かつて、惑星の動きを記したカレンダーなど存在しなかった頃、楡の木は水星が下降期（地平線より下りの時期）にある時に切らなくてはならないことを先人達は理解していたのである。

1-5. 植物の語る秘められた言葉

この先人達のやり方を踏襲するとなると、私たちは、難解な謎解きを迫る迷路のような存在として、植物と接しなくてはならないことになる。この点で、ゲーテの行った作業は大変興味深い。彼は、植物が見せてくれる数限りない多様な姿かたちと、その多様な性質の中から基本的な体系を発見し、原型となる植物を選び出したのである。植物の語る秘められた言葉を理解できるようになると、治療に用いられる薬草やビオディナミのプレパレーションに使う植物に対して、これまでとは違った見地から理解を深めることができるようになる。このビオディナミという新しい農法は、それが正しく応用されたとき、対応する植物のことが正しく理解されているとき、素晴らしい味わいを生み出す効果があることから、葡萄栽培家の中にあつという間に広まることとなった。

葡萄も含めて薬草として用いられる植物は、形態は様々ながら、他にはない特別な性質によって病や怪我を治癒させる。時に植物は、根や茎、花や実の中に、「本来ならば」別の部分で起こるべきプロセスを活性化することがあり、例えばテンサイがそうである。この植物は、葉で作られた大量の糖分を、本来ならば実として蓄えるべきところ、根っこに蓄えてしまうのである。一方カエデはというと、同じように作られた糖分を樹液の中に蓄える。薬草については、まさにその特殊な性質が病を治癒させるに他ならない……。ではどうして薬草に治癒力があるのか、これを理解するためには何より人間自身が各々の気質としてあの4つの様態と関わっているのだということを理解しなくてはならない。

更にまた、4つのうちのどれか一つが、特徴的な気質としてその人を支配しているのである。かくして、怒りっぽいと言われる人は、熱との結びつきが強い
ため、常に爆発寸前の状態にあるように見えるし（しかし実際は、周りの人間が
思い込んでいるほど頻繁には爆発していないのだが！）、多血質と呼ばれる
タイプは、少しもじっとしてられず、それはまるでこのタイプの人が強い結
びつきを持っている空気によって常に運ばれているかのようなのである。粘液質の
人というのは、水との強い結びつきを活かしてその無気力さを謳歌する一方で、
人生に訪れる様々な困難をニコニコと笑顔でめぐり抜けてみせたりもする。こ
のタイプの人が、自らのご機嫌な様子を「まるで水に浮かんでいるようだね！」
と表現するとき、正に云い得て妙、これ以上びったりの言葉は見当たらない。
最後にメランコリーなタイプの方は、土との過剰な結びつき故に、物質の重さ
からくる重量感の中で、自らを支配する悲哀の原因をどうしても根本的に解決
することができずにいる。面白いことに、このタイプの人を笑わせる最も良い
方法はというと、人生がどれほど悲しみに満ち溢れているかを気付かせてやる
ことなのである！

これまで述べてきたことは全て、ヒポクラテスの医術の中に記されている。病
というものは、体のある特定の部位で、この4つの様態の間に不調和が生じる
ことによって引き起こされる。そのため彼の医術では、その不調和が生じてい
る部位を十分に観察し、—それは極めて難しい作業であり、顕微鏡では決して
明らかにすることはできないし、ましてや抗生物質などでは決してその代役を
務めることはできない！ —その上で、植物、若しくは動物の器官を、それぞ
れが本来持っている特別な力を発揮できるような形で、処方し、治療に当てる
のである。

ここでは植物は、単に有効な成分や物質を含んでいるものとしてだけではなく、
もっと具体的な働き、「ポジティブな力を持つ結びつき」として捉えられている。
言い換えると、私たちの個性性、私たちの体質といったものが、無意識に
断ち切ってしまったある特定のプロセスとの間に、もう一度橋を架け直してや
るようなものなのである。このようにして、シュタイナーの唱えたアンソロポ
ゾフィー（人智学）は、そしてある意味ではビオダイナミも、理解していかな
くはならないのである。

1-6. イラクサの観察



今話したことを、イラクサを例にして、不完全ながら、敢えて単純化して解説してみることにしよう。そうすることで、アンソロポゾフィー、或いはバイオダイナミを用いた新しいアプローチというものをもっと具体的に理解することができるのではないかと思う。心配ご無用、決して本題から外れているわけではない。こうしたアプローチをすることによってこそ、ワインを、その薬用的な側面を、葡萄の木を、そして年々際立ってくる異常気象の中で、葡萄がこれまで通りその役目を完遂できるように手助けをしてくれる様々な植物を、より深く理解することができるのである。

このイラクサという植物は、一目見ただけで、老練な外交官といったイメージさながらに、本来ならば先端部に集中されるべき活動を茎という体の中心部で行っていることがわかる。根は地上近くに留まったまま、決して土中深く降りていこうとはしないし、花はというと、茎の先だけではなく全体に散らばってつき、お世辞にも美しいとは言えない、非常に慎ましい咲き方をする。そしてその実もまた、緑のまま、決して熟すことなく小さな小さな種をつけるに留まる。

つまりイラクサは、本来ならば他の部分で発揮すべきその能力を、葉に凝縮させているのである。実際その葉は、裏の部分も明るく艶やかで、花びらと見紛うほど美しく、それでいて触ると触れた部分が腫上がってしまう刺々しさを備えている。葉は、根と種という植物の体の両端を結ぶ中間に位置している。

つまりイラクサは、他の植物ならば先端部分で表現するものを、体の中間地点に集める性質を持っているのである。そしてイラクサのこうした特質が、つまり力を中心に集める能力、或いは両端のバランスを取るといった能力が、ヒトの心臓に非常に有効な働きをもたらすことになるのである。それというのも、ヒトの心臓もまた、プレッシャーに曝されることの多い神経系と、同じくストレスなどによってバランスを崩すことの多い代謝（消化）系との間で、日夜、

力の均衡を保とうと奮闘している体の中心器官だからである。ルドルフ・シュタイナーも、イラクサのことを、他の何ものによっても置き換えることのできない貴重な植物だと語った。そして葡萄の木も、特に乾燥の激しいときに煎じ液としてこのイラクサを与えると、とても喜ぶし、地面に直接、液肥として撒いても高い効果が得られる。ただしこの場合は、臭いがきつくないことが条件で、というのも良い土地は不快な臭いを決して好まないからである。

ここで、先人たちの持っていた植物への広い知識にさっと目を通してみよう。最初にこれに目をつけ、知識として発展させたのは、ゲーテだった。その後、ルドルフ・シュタイナーによって継承されたのだが、彼こそがビオディナミの理論を農業に応用したビオディナミ農法の創始者である。こうして植物に対する深い知識を獲得した後に、植物のある特定の形態的特徴だけでなく、その特別な性質—言うなれば、彼らの存在の在り方—、そしてそのエネルギー背景について、関心の的を移していくことにしよう。

植物に関する深い見識は、ペリカンの著した素晴らしい作品《Les Plantes medicinales》(薬草)と、グロマンの《La Plantes》(植物)の2作がその頂点を極めている。これらの作品によって、植物の持つ奥深く高い薬効が持つ実体を、私たちは極めて具体的に理解することができるのである。しかもそれは、決して分子レベルだけで云々されているのではない。言葉を変えて言えば、彼らの著作を読むことによって、私たちもようやく、一つひとつの植物が作り上げる「音の調べ」に辿り着くことができるのであり、メロディーを構成する音全てが、全体として一つの素晴らしいハーモニーを作りあげていること、しかも、それが毎回違ったハーモニーであることを理解するのである。この和声の「全体像」こそが、一つひとつのバラバラにされた音より遥かに大きな力で私たちの病を治してくれるのだが、現代の科学が延々と手をこまねいているのは、実は一つひとつの音符の方なのである。若い人達よ、この古く新しい知識をしっかり理解したまえ、そして自分達の力でそれを更に深めていって欲しい。あなた達の生きる全てに、多くのことをもたらしてくれるはずだ。

1-7. 葡萄と農業教育

私たちの親愛なる友、葡萄の奥深い性質を理解するには、まずは秘密の言葉を知っていなくてはならないのだが、それがどのようなものなのか、ここまでの説明で既に十分分かって頂けたのではないかと思う。地球に生育する植物とし

て、当然のことながら、この葡萄も、地球の中心に向かって引っ張る力、つまり重力と、太陽にむかって引っ張る力、つまり熱という二つの拮抗する力の作用を受けている。

ギリシア人はその昔、葡萄は、アポロ的な植物と対峙するディオニソス的な植物であると語っていた。何故彼らがこのようなことを言ったのか、今では簡単に理解できるはずだ。アポロン（つまり太陽神）型の植物は、何ものにも妨げられることなく、虚空に向かって真っ直ぐ上へ上へと伸びていく性質を持ち、その勢いは、まるで太陽のもとに辿りつこうとでもしているかのようである。糸杉の木は、細身で長身、時に 10 メートルから 20 メートルもの高さにまで大きくなることがあるが、この植物こそ正に、アポロン型の典型なのである。キリスト教では、麦がアポロン型植物の代表とみなされていた。麦の茎はあれ程細く華奢なのに、そのか細さからは想像もできないほど高くまで背を伸ばし、しかも強い風に耐えることができる。一体誰がその理由を説明できるだろうか？

今では、健全、健康な農業がシリカ（二酸化珪素、SiO₂）を使ったときにしか、こうした茎の長い麦を作ることはできない。私たちの知っている麦は決して丈の高い植物ではないが、それは、収穫作業がしやすいよう、60 センチほどまでしか伸びないように成長を抑制するといった、様々な科学的操作を行ったからに他ならない。ところがかつて麦といえば、1.5 メートルもの長身を誇る植物だったのである！ 現在のような状態では、麦は、地球の重力から十分に逃れることができないために、本来彼らに与えられるはずの熱エネルギーとの親和性を高めることができず、結果として、本来備わっているべき栄養や旨みといったクオリティーを私たち人間にもたすこともできないのである。更にひどいことには、小麦がアレルギーの原因になるといって非難したりもするが、実は、人間の方が、（植物本来の機能を歪めることで）アレルギー誘引物質にしまっているのである！

こうしたアポロン型と言われる植物とは対照的に、地球が引っ張る力と強い親和性を持ったディオニソス型の植物も存在する。このタイプの植物は、根の部分で強い力を受容し、これ以上ないほど固く、貧しい土地に根を張ると、そんな土壌ほど逆に居心地良いとばかりに、立派に育っていくのである！ 麦にはこんな芸当はできない。そして既に皆さんご存知の通り、このディオニソスタイプの原型ともいえる植物こそ、葡萄なのである。対照的な特徴を持つ植物を

見ることによって初めて、葡萄の特質もより良く理解することができるというものである。糸杉や麦が、地球の重力に抗うために、また飽くことなく太陽に向かって伸びていくために、「力」として枝に蓄えるものを、葡萄は、根に結集させ、もっと深く、もっと深くと下に伸び、報われることのない石ころだらけの土地で育っていく。このような貧しい環境で生き抜く力を持っているということは、葡萄が多く栄養分を必要としない植物だということでもある。葡萄の根は、時に30メートル、40メートル、場合によってはそれ以上の長さにも達することもある。例え岩だらけの土地に根を下ろすことになったとしても、僅かな隙間を見つけては根を張っていく。しかし逆に言うと、地球の引力との親和性が余りにも強いために、葡萄は自分の力だけでは太陽に向かって体を伸ばしていくことがほとんどできないということになる。このことは決して、良く言われるように、葡萄が蔓性の植物と同類だということの意味しているのではない。

この表現は不適切であり、葡萄は単なる蔓性植物より遥かに優れた植物である。とはいえ、枝が地面から僅かに伸びたと思う間もなく、支柱でもなければ、葡萄は地球の引力の虜になってしまう。こうなったらすぐに、ワイヤーや杭、或いはポルトガルで時々見かけるように枯れ枝を使って、枝を固定したり、支えたりして上に伸びていくための手助けをしてやらなくてはならない。葡萄にとっても、恐らく、太陽に向かって成長することは多いに必要なことなのに違いないのだから。春の終わり、空に向かって精一杯、枝を伸ばそうとする葡萄の様子を見ていると、その姿に「太陽へのノスタルジー」とでもいったものを感じずにはいられない。枝の一本一本が、少し上に伸びては垂れ下がり、それでも僅かな支えを見つけては、もう一度這い上がろうと頑張っている。葡萄は地球の引力の虜である、このことをしっかりと頭に入れておいてもらいたい。その特性は、地球の引力の支配から決して逃れることができない。

これを物語として描いたのが、あの有名なギリシア神話である。デメテールの娘、ペルセポネスが、引力と強い意志のシンボルでもある、「地底」の神、プルトンに連れ去られるという話。こうしてペルセポネスは、自分の息子と共に、地球の苛酷な引力の法則に囚われの身となったのである。息子のディオニソスは、その後タイタン族によって体を八つ裂きにされてしまった。因みにこのタイタン族もまた、大地のシンボルである。

引力とは、地球の重力圏に入ってくるもの全てを、虜にしてしまう力のことである。とはいえ、この力によって、物質は物質としての形をとることができる

のであり、個として他の物質とは異なるもの、つまり他のエネルギーから切り離された存在となることができるのである。引力があるからこそ、物質は一つひとつ、物理的に独立した存在になることができるのであり、私たち人間には、良きにしろ悪きにしろ、他人とは違う「私」「僕」という概念を持たせてくれるのである。こうしたグローバルなものの方角を、私たち人間はいつの間にか忘れてしまったが、今こそもう一度、改めて思い起こすべきだと思う。魂を救われ、それを全能の神、ゼウスに預けたお陰で、体を八つ裂きにされたディオニソスが復活したように。

繰り返されるが、葡萄は、大地との親和性の強い植物である。言うなれば、引力によってもたらされる様々な力を吸収しつつ、大地の奥深い、秘められた特質と上手く結びつくことができるのである。このことが具体的に何を意味するのか、まずは葡萄の花を見てみよう。自からその姿を隠すようにして咲く花は、しばしば地面に向かって垂れ下がるようにしてついている。大抵の植物は、体の外に向かって、葉より高い位置になるべく目立つように花をつける。ところが葡萄は、大地からの力を余りにも強く感じるために、このような形では花をもつことができない。ひっそりと隠れたようにして咲く花を見つけるためには、枝を払いのけ、葉をかき分けて捜すしかない。しかし侮るなかれ、小さいながらも、慎ましいながらも、葡萄の花は数メートル先からでもそれと分かるほどの香りを持っているのである。

つまり、大地の力に支配されながらも、他方では、太陽とも強い繋がりを持っているということである……。大地の力の虜になるということが、そのまま太陽系、つまり物質を作る力に満ちた世界との繋がり全てを失ってしまうということにはならない。実はその逆で、引き離された世界にこそ、ノスタルジーが強くなるのであり、葡萄も反作用として太陽の世界への憧れをいや増すのである。こうした他の植物にはみられない特殊性が、ワインという気高く、そしてかくも複雑なものを生み出す能力として、葡萄に与えられたのだった。

こうして理解を深めていくと、次のような疑問が湧いてくる。質的な研究について掘り下げることのない学校では、決して触れようとしない問題である。つまり、栽培家として、葡萄が地球という「牢獄」から解き放たれて、大地から離れようとするのを一新たな結びつきを求めようとするのを一手助けしてやるべきかどうか、という疑問である。もっと具体的に言うと、枝支えをしたり、剪定をしたり、或いはまた葉に直接、糸杉の煎じ液を噴霧したりして、葡萄が

上に伸びるのを、アポロンの性格を持つのを、手助けしてやる必要があるかどうかということである。それとも逆に、毎年剪定の際に丈を低くしてやり、地面近くに留まるように誘引することで、引力との強い絆を受け入れ、或いは更に強化させなくてはならないのか？

後者の方法を取った場合、偉大なる自然が、本来葡萄に与えた大地との結びつきを更に刺激することとなり、苛酷な条件の下で生き続けることを求めることになる。しかしこうすることで、葡萄はより生き生きとしたのびやかさを、ワインにもたらししてくれることにはならないだろうか？ 子供がこれと同じ良い例である。子供自身の本来の良さを伸ばしてやろうとするとき、どこまでわがままを聞いてやれば良いのか、どこまで叱れば良いのか？ 一体どこまで許されるのか？ 葡萄栽培家も、正にこれと同じように、収穫時の葡萄が最高の状態になるのか、粗さの残るものとなるのか、それとも他にはない独特の性格を持つようになるのか、こうした特質を左右する決断を行う前に、先ず何より、樹齢であるとか、土壌の状態、畑の地理的位置、斜面の向き、風の吹き具合、雨量などなどを十分に考慮しなくてはならないのである。もちろん、嘘で固められた化学的なテクノロジーを使っていないことは大前提とした上である！

こうした問いかけを繰り返す中で、栽培家は、自分の畑の葡萄がその本来の力を最高の形で発揮できるように、自らのクリエイティブな才能を活かしつつ、進むべき道を選んでいかななくてはならないのだ。一つだけつけ加えておくと、どの植物にも、自分の果たすべき役割を十分に遂行できるように、自然から与えられた力が備わっている。人間は、特にここ数十年間、農業の分野において、その本質を何も理解できないまま、貴重な植物生来の力を弱めてしまっている。これは大きな問題として私たちに課せられたままである。果たして、私たちが学校で教えられるべきことは、本来次のようなことではないだろうか？ 学生たちには、観念的なものの見方やそのメカニズムをくどくどと説教するのではなく、もっと幅広い知識を教えることで、創造力と自由を与えるようにする。知識に偏った教育は、逆に植物のことを正しく理解できなくし、引いては化学肥料や除草、殺虫剤といった巨大産業市場を発展させることへと繋がってしまうのである。

栽培される畑が、ある特定のセパージュ（品種）に最適の環境だった場合、健全な農業が行われている限り、葡萄は、自分に与えられた奥深い特質を最大限発揮することができる。更に葡萄栽培家は、一つひとつの作業を正しく選択し

て行うことによって、自らの足跡を葡萄の木の中に刻み込むことも可能なのであり、そしてもちろんこの足跡が、ワインの中に馥郁たる香りとして、或いは深い味わいとして、その姿を垣間見せることになるのである。

今日ではすっかり軽んじられてしまっているが、自然の摂理とその背景にあるものを深く理解し、それを農業に生かすことによって始めて、AOCが本来求めようとした多様な味わいを生み出すことが可能になる。特徴あるワインを作るのは酒蔵での作業に他ならないと考えているような人達は、まずこの点を正しく理解していないのであり、農作業の中で自分の犯した様々な過ちをカバーするために—しかも決してそれを完全にカバーすることはできないのだが—、酒蔵を化学工場に変えて人工的な香りや味わいを添加せざるを得なくなっているのである。

一般的に言って、葡萄は快適過ぎる環境—つまり、例えば堆肥を与え過ぎたり、他の植物との競争のないきれいな過ぎる（完全に除草された）土壌、1ヘクタール当りの植え込み率の少ない、言い換えれば土地の力の強過ぎる環境などに置かれると、葉の部分ばかりに栄養がいき過ぎてしまい、ワインの味わいも、張りのない、安易さに堕ちた、ダイナミズムに欠けるものとなってしまう。このような環境では、葡萄はもはや、独自の強い個性を刻み込んだ素晴らしい収穫をもたらしてくれるような、生来の強い生命力、そして荒々しい気性を発揮する必要がなくなってしまうのである。

このような説明の仕方は、愛好家の皆さんには少し専門的過ぎるかもしれないが、今になって何故、酒蔵での作業よりも畑での作業にこだわる醸造家が増え続けているのかという疑問に答えるためであり、とりもなおさず、これまでの大きな過ちに気付いてもらいたいからに他ならない。しかも残念ながら、このような過ちは現在もなお、どこかで繰り返され続けている。こうした認識の上に立って始めて人間は、実際に植物を育成しつつ、蓄積されたノウハウを活用しつつ、自らの求めるものを植物の中に見出していくことが可能になるのである。それは決して人間の必要としているものを植物に対して課すといったやり方ではない。もっと深淵な問題へと開かれたテーマなのである。人間と植物のシナジー（協力関係、相乗効果）があってこそ、最上のワインが生みだされるのであり、物質面だけしか見ない知性の集約からは何も生まれないのである。

農業学校関係者の方々、あなた方は、どれだけ深刻な知識偏重の不毛の世界に

学生達を放り込もうとしているのか、事態の深刻さを認識していらっしやるだろうか？ どこまで若者たちの創造性をもぎ取ってしまっているのか？ 若者達をその独自の創造性から、そして人としての質の高さからも遠ざけているのは、他ならぬあなた達ではないか？ 一体いつ、「命」というものをじっくり観察することの重要性を教えているのか？ 例えば、葡萄の葉は芽吹き

のときから、葉先を下に向けて伸びていくが、これは宙に引っ張られるようにして伸びていくローリエの葉とは全く逆である。この葉の伸び方を学ぶことによって始めて、葡萄の奥深い性質を理解することができるということをあなた達はご存知なのだろうか？

【植物の性質によって異なる葉の特質。太陽の引力/地球の引力】



(左) 葡萄：下へ引っ張る力の作用をより強く受ける。そのため葉は(ある程度伸びると)地面に向かって垂れてしまう。
(右) ローリエ(月桂樹)：上に向かって引っ張る力の作用をより強く受ける。そのため、葉も枝も空に向かって伸びる。

今まさに、一つひとつの植物の持つ個性というもの若い人達に教える時期がきているのではないだろうか？ 健全な農業を行えばその個性を最大限開花させ、生命力に溢れた食物を私たち人間のために生産することも可能になるのだから。ワイン愛好家の皆さんにとって重要なことは、まずは葡萄の持つディオニソス的な特徴を理解することであり、次いで葡萄の木が、微妙に変化する土地や気候としっかり結びついて成長していけるよう、言い換えれば、葡萄に与えられた生来の個性を根を生やした土地の特質と調和、融合させていけるよう、その特徴に十分な敬意を払うことである。

情熱と共に葡萄の栽培に携わっているものは、もっと別のもの、葡萄の木に生命を与え、その実にかくも美しき豊かさをもたらす生の営みの背後にある何かを求め、理解しようと、たゆまぬ努力を続けている。

第一のステップを越えたところで、次ぎの章ではもっと辛い話題、現在に至る数十年の間、私たちが葡萄をどのように扱ってきたか、について語ることしよう。

2. 農業の犯してきた過ち

50年代までは、全てのワインが美味しかったわけではない。それどころか、美味しくないワインの方が多かったといっても良いくらいである。しかし、どのワインも本物だった。今となつては、あの旨くないワインが惜しまれるばかりである！ 私が言いたいのは、今日、葡萄本来の旨みを引き出すことのできなかったワインが余りにも多く、テクノロジーが生み出した幾千もの人工的な添加物によって、絶えず美容整形を施さなくてはならないような、魂のない、ありきたりの所謂「美味しいワイン」ばかりが大量生産されているという現実である。私たちが目にするのは、美味しい偽物のワインなのか、さもなければ、つまるところ、AOCが意味を為すのはラベルの上だけでのことであり、ボトルの中身には何の効果ももたらさないということになる！ 地域ごとの呼称、即ちアペラシオン・コトローレが消費者に法的に保証していた独創的な味わいは、もはや存在しなくなっているのである！

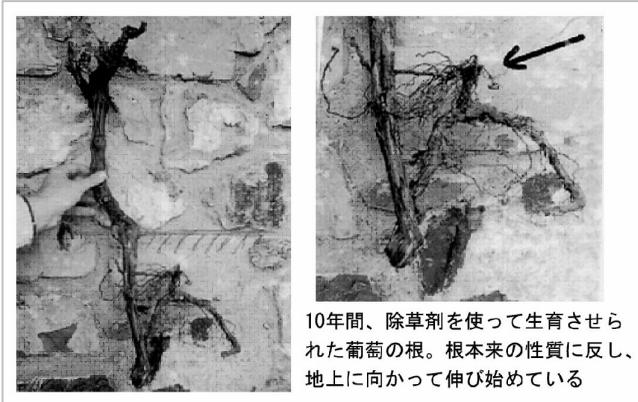
どうしてこのような事態に陥ってしまったのだろうか？ フランスワインに一体、何が起こったのだろうか？

2-1. 除草剤

全てがどれほど巧妙に仕組まれてきたか、また生産者自身がどのようにして罠に陥ってきたか、それらを慎重に検討してみると興味深い事実が見えてくる。最初に、葡萄栽培家は、除草剤という名の非常に魅力的な薬剤と出会う。葡萄の木にとっては、これが悲劇への最初の一步ということになるのだが……。栽培家にとって最も骨の折れる大変な仕事はといえば、春から夏にかけて、畑をきれいな状態に保つということである—後で見ることになるが、今ではこうした習慣も変わってきている—。これは完全な手作業であり、疲労を伴うし、しかもこの時期、休む間なく毎日毎日続けていかななくてはならない。という訳で、除草剤は栽培家にとって非常に魅惑的な薬だったのである。沢山の人が試してみた。執拗にこの薬剤を使うことを勧めた人間は、ワインの質に大きな影響を及ぼすあのミコリザ¹と呼ばれる生物が死滅してしまう現象については、決して触れることのないようにした。果たして、このミコリザとは一体何なのか？ その実体は極めて明快である。栄養を吸収していくには、根は土中に住

¹ 菌糸と高等植物の根とが結合して共生しているもの

む微小生物の力を借りる必要がある。私たちが食べ物を目の前にしても、手を使わなければそれを食べられないのと同じで、それぞれの微小生物は、根が、その土地に特有の物質を同化していきけるように手助けをしているのである。この微小生物がいなくなると、山盛りのご馳走を目の前にして、手を縛られてしまった人間同様、根は飢餓状態に陥ってしまうのである。



この除草剤の巧妙なところは、僅か数年で、土中に住んでいる微小生物のほとんど全てを殺してしまうという点である。使い始めた年は、その効果の高さに、栽培家は薬剤に対して大きな信頼を抱く。

というも、それまで競合していた微小植物が死んでしまうことによって、葡萄の木の生長が著しく高められるからである。ところが、5年から8年もすると、土中にはおよそ生き物と呼べるものがほとんど全く存在なくなってしまう。15年もの間除草剤を使い続けた土地を掘ってみると、土壤を構成しているはずの生き物が完全に死滅してしまっている有様に驚かされる。当然のことながら、土中から栄養を吸収することのできなくなった葡萄は、地面に向かって逆に根を伸ばすようになってしまう。

2-2. 化学肥料

今度は、この秘密の合成薬剤がどのような結果をもたらすかを見てみよう。除草剤で微小生物が死に絶え、土中から栄養を吸収できなくなった葡萄にとって、次に必要となるのは、大量の成長促進剤ということになった。これが二つ目の悲劇だが、AOCにとっては莫大な利益をもたらすことになる。こうして、化学肥料という新しいビジネスマーケットへの扉が開かれたわけである。もちろん、それまでも既に使われている薬剤ではあったが、今回はより大規模に、最初は土壤に、続いて葉に散布する商品として流通するようになる。

化学肥料についてはこれ以上詳細には踏み込まないが、言うなれば塩のようなものだと理解して頂ければ良い。塩を大量に摂取するとどうなるか、水を飲まずにはいても立ってはいられない、という状態になる。塩を匙一杯舐めたとしよう。すぐに猛烈な喉の乾きに襲われるはずだ。過剰に取りすぎた塩分を中和するために、大量の水を飲まずにはいられなくなるのである。これと同じ現象が植物にも起こってくる。丸々と太ったキャベツを見かけることがあるが、鍋に入れて煮てみると、無理矢理摂取させられていた大量の水が出てくるはずである。

化学肥料のもたらす作用には否定的な側面が否めない。先ずは、世界中の葡萄の木が、同じ薬で同じように成長させられるという問題。それに加えて副作用の問題もある。植物に水を無理矢理大量に摂取させるという行為に対して、常にバランスを取ろうとする自然の摂理は、病気の発生という形で思いもかけない副作用を引き起こすのである。細菌とか、ウイルスとか、或いは隠花性植物特有の病気などは、何らかのアンバランス、或いは植物本来の弱体化を知らせるものとして捉えなくてはならない。この事実は、いつの日か、農業学校の校門に金字で大きく書き込まれるべきだと思っているし、その時には、農業学校自からが化学薬剤産業の旗振りなどはしていないものと信じている。本当は、私たちが長い間信じ込まされていたように、細菌やウイルスが植物の病の原因なのではない。こうした生き物は、いわゆる死刑執行人、或いは掃除屋であり、海に住むカニなどと同様、生命力の弱ってしまったものの体を食べ尽くす任務を負っているに過ぎないのだ！

現実には、病気の本当の原因であるアンバランスの問題を正すことなく、ただ闇雲に病気を治そうとして、逆に植物の体を弱めてしまっている。というのも、一時的な回復をもたらそうとして、これ以上ないほど恐ろしい物質を植物に与えているからである。これによって植物は、本来の健康を取り戻すのに必要な「生命の流れ」から、益々遠ざけられてしまうことになるのだ！　ここまで来ると、この数年の間に、如何に私たちの土地が、より複雑でより収益性の高い（！）病気に侵されてしまっているか、お分かり頂けたのではないかと思う。

2-3. 「浸透性」薬剤のもたらす悲劇

ここでは単に、実はこの化学薬剤こそが、うどん粉病や、べと病といった隠花性植物に典型的な病気の大発生を生む原因なのであるということを説明した

と思う。勿論、こうした病気は、化学薬剤が登場する以前からも存在していたが、現在に比べると遥かに取るに足らない問題でしかなかった。雨が降る度に化学肥料という形で過剰に塩分を摂取させ、それによって水太り状態を引き起こし、更に本来ならば春、年に一度だけ成長するという自然の摂理を無視して、一年中成長促進剤を与え続ける……。こうした人工的な作業が、過剰な水分を調整しようとするカビなどの菌類を植物の葉に呼び込んでしまうのである。

まず起こることといえば、例えばボルドー液や亜硫酸といった、昔から受け継がれてきた対処法が十分な効果を発揮できなくなってしまうことである。こうした治療薬も適量を守って使う限り有効なのであって、度を過ぎると毒でしかない。それが毒性を帯びるほどの量を使っても、全く効かなくなってしまうのである。そうこうして3つめの悲劇への扉が開かれていく。今度は私たちの愛するワインに直接影響を与える重大な問題である。3つ目の薬剤は、「浸透性」薬剤という名前で呼ばれている。まず病気の発生を防ぐのに恐ろしいばかりの効果を持つ新しい物質が発見され、続いてその物質を葡萄の木の樹液の中に取り込ませる方法が開発された。技術的には正に革新的で、これを使えば病気は完璧に予防することができるのだ！ しかし質的には重篤な影響をもたらす。具体的に、一体どのようなことが起こるのだろうか。

1970年代までは、浸透性のこのような危険な物質は、葉や実の表面に残るものだった。雨が降れば流れてしまったし、家庭でも簡単に洗い流すことができた。川を汚染することはあったかもしれないが、私たちの口に直接入る食べ物を汚染するという事は、この段階ではまだなかったのである。しかし、新しいやり方では、1時間もしないうちに、毒性の高い物質が樹液の中に浸透してしまう。余りにも便利な薬剤であるが、しかし毒であることに変わりない。そんな物質が、新しいテクノロジーによって植物の体内に入り込んでいくのである。余りにも毒性が高いが故に、これを散布する栽培家は、防御用のつなぎとマスクを着用することが義務付けられているほどなのだ。ここまで話せばお分かりだと思うが、浸透性薬剤は、葡萄の木の樹液の中に入り込む。つまり実や野菜の基になる養分の中に取り込まれるのである！

こうして毒を盛られた葡萄は、上手くいけば2ヶ月でその全てを排出することになっている。しかし、1ヘクタール当たり数リットルの割合で使われると言われる薬剤の毒性は極めて高く、たまごの中に僅か3立方センチメートルを入れ

ただで、それを食べたテンが死んでしまうと言われている。動物の吸収力は非常に高く、その場で体内に取り込まれてしまうのである！ もう一度言うが、葡萄栽培で使われる浸透性薬剤の量は、1ヘクタール当たり数リットルにも上るのである。

更に、しばしば語るのを「忘れられてしまっている」ことだが、樹液は、葡萄と太陽とを結び付ける最も基本的な絆なのである。そしてこの太陽こそが、ワインに味わいや生命力、時間をかけてゆっくりと熟成していく力をもたらしてくれるのである！ 毒されてしまった樹液—これは決して誇張ではない—が、そうでないものと代わらぬ効果をもたらしてくれるなど、考えられないではないか。

一般には「進歩」という名で呼ばれているこうした悲劇の数々は、確かに豊かな収穫をもたらしてくれた。しかし、既に生命力を失ってしまった土壌も、特有の気候の恩恵を十分に吸収することのできなくなった樹液も、もはや、自らの個性を表現することができなくなってしまった。つまり、AOCの求めるテロワールの特徴をワインの中にみとめることが、できなくなってしまったのである。

2-4. クローン栽培：失われた種固有の特徴

この重要な問題について、残念ながら、ここでは余り深く立ち入ることができない。しかし、少なくとも、クローン栽培がもたらす質の悪化については理解しておく必要があるだろう。葡萄には幾つかの種類があって、例えば、シュナン、シャルドネ、カベルネ……などが良く知られているが、この一つひとつのセパージュ（株）が、他にはない非常に豊かな個性を持っている。それだからこそ、かつてはセレクション・マッサルと呼ばれる方法で若木を選別しながら植え替えを行っていたのである。

異なる長所を持つ100株近い葡萄の中から、最も適した元気の良い株を選ぶ方法、これがセレクション・マッサルである。これらの若く元気な株を使って、数を増やしつつ若返りを図っていた。ところがクローン技術では、一つだけ、一般的には最も生産性が高く、また特に目立った特徴ある香りを持つ一つ二つ持った株を選び出し、それだけを増やそうとする。実際には、美しさというのは、複数の特徴が互いにバランスを取り合い、またある特徴がもう一つの特徴を引き出したりという作用を繰り返して生まれるものなのだが……。そしてその選

んだ株を、何十万、何百万にして増やすのである。最近では、セパージュごとに複数のクローンを作っているようだが、それにしても、根本的な問題は解決されないままである。加えて、収穫高が大きく増えてしまったために、青実摘み、即ち、熟し始める前に余分な実を摘み取る作業を行わなくてはならなくなった。

この作業は、現在ではごく当たり前のように広く行われており、優良株の選抜方法の間違いを明らかにするどころか、葡萄栽培にとって必要な作業とさえ考えられている。科学産業の観点からすれば、このクローン技術は偉大な進歩の一つであるに違いない。たった一つの株を母体として、全く同じ株が幾つも幾つも作り出され、同じ時期に花をつけ、同じ時期に実をつける……収穫時期も全く同じで、機械の使用も可能となる。しかし立ち位置を変え、一つひとつのセパージュが、その種に固有の特徴を精一杯表現しながら生きているという複雑極まりない自然の摂理に視点を置くと、この技術はある意味、貧困化でしかない。別の言い方をしてみよう。あるテーマについて議論をするとしよう。二人だけで話すのか、或いは、考え方の違う 30 人で討議するのか、この違いによって議論の深まり具合にも大きな差が出てくるはずである。30 年にも渡ってこの世界を支配してきたクローン技術だが、それによって、セパージュが種として本来持つべき素晴らしさ、味の豊かさがすっかり損なわれてしまったのである。

この章の締めくくりとして最後に一つだけ付け加えておこう。自らの体に刻まれたルーツをしっかりと表現できていないようなワインは、「化粧」でも施さない限り、市場で売りさばくことは難しい。つまり、4 つ目の、そして最後の悲劇への扉がこうして開かれるわけである。化学薬剤の囚われ人となってしまった栽培家は、1 ヘクタール当り、年間、1,000~1,500 ユーロもの費用をこれに費やすと言われているが、こうした薬漬け人間にとっては、この 4 つ目の薬剤こそが、まさに「救いの手」となるわけだ。かくしてテクノロジーは、AOC で保証されたワインの中にもずけずけと土足で踏み込み、創設された当初のその深い意味合いを根こそぎにしようとするのである。フランスは元より、豊かなテロワールと、マイクロクリマと呼ばれる、その土地ごとの表情に富んだ気候に恵まれていた。この世界に名立たるフランスワインの最も強力な武器を、私たちは知らない間に失いつつある。そして今や、他国の競合ワインに瀬戸際ぎりぎりまで追い詰められている……。

3. 土地固有のエネルギー

カーヴ（酒蔵）についてはこれまで非常に多くのことが語られてきた。ここでは逆に余り語られてこなかったこと、特にセラーで用いられるものの形、或いはセラーそのものの形、それがどのような意味を持つのか、そしてそのことをしっかりと理解するために必要となる知識などについて話していきたいと思う。というのも、それらを理解することによって、生命というものをこれまでとは全く違った形で捉えることができるようになるからである。

まずそれに先んじて、セラーの役割について考えてみよう。基本となる規則は極めて単純である。葡萄の実は春から秋にかけて成長していく。この実が純粋に自然の産物である場合—即ち、そのセパージュ本来の個性を大事にしている葡萄の木が、自らの力で、毒性の強い化学合成物質や人工的な成長促進剤などの影響を受けることなく、植えられた土地の気候を、真っ直ぐにセルロースやデンプン、糖分などの栄養分へと転換する作業を行った場合—、その果汁には、酒蔵で少しずつ醸し出されてくる豊かなハーモニーや調和の取れたバランスといったものが詰まっている。

健全な農業を営んでいるものは皆、このことを認めるはずである。勿論、最も基本的な作業である搾入れや、澱抜きの作業は行われるべきである。しかし、もし、本来葡萄の木が畑で自ら行う作業を栽培家が邪魔することなく、或いは逆に、その作業を上手く成し遂げられるように手助けしてやるならば—そのためには、生命に対するマクロ宇宙的な理解が必要になるが—、そして更に、畑の位置や向きが良く、セパージュが条件に合ったものであれば、セラーはゆりかごのようなものと考えてもらえば充分である。全てが順調に行くよう、醸造家はただ静かに見守るだけで良いのである。

確かに、压榨に費やす時間や、キュヴェゾン²、澱と共に寝かせる時間などについて、ちょっとした秘密の技がある。また確かに、そうした技によって、場合によっては大きな違いが出たりもする。とはいえ、一般的に言って、セラーの中でやることは非常に限られており、ただそこで起こることを感嘆の眼差しを持って眺めていけば良いのである。全てが粛々と進んでいくはずである。つ

² 発酵槽内でのアルコール発酵と醸し

まり、幾百年の昔から 1940 年代、50 年代まで普通に行われていた醸造法に帰ろう、というだけのことなのだ。この当時はまだ、良識ある農業によって、100 年経ってもその壮大な味わいを失うことのない見事なワインが、良きテロワールのもとで作られていたのである。

しかし逆に、その本質を十分に理解しないまま、偉大なる自然に取って代わろうとしたり、ほんの数年前まで有数のワインの産地として知られる地域で実際に教えられていたように、土地は命のない単なる土台であり、大した重要性などないと考えたりすると、「自然の摂理を無視して育てられた」葡萄の木から作られるワインは、酒蔵に入った段階で更に絶え間なく、高価な化学薬剤を使わざるを得ないような、極めて危ういものになってしまうのである。セラーに持ち込んだ果汁の状態が余りにもひどいと言って驚く醸造家がいるが、彼らは、自分達の実践している農業が如何に恐ろしいものか、気付こうとはしない。葡萄の木を瀕死の状態に追い込むようなことをやっているのは、彼ら自身ではないか？ こうしたやり方でワインを造っているものに限って、酒蔵で様々なテクニックを用いないと美味しいワインはできない、などと平気で主張するのである。

少し皮肉に、しかも大まかに言えば、ワイン醸造には二通りのやり方がある。一つ目は、自然の摂理に、即ち AOC に人間のテクノロジーがとって代われるものと信じ、セラーの中で様々に手を加えながら、味は悪くないが、ルーツのない、即ち個性を持たないワインを造る方法。もう一つは、葡萄の木がその土地に息づく命の声を十分に聞き取れるようにしてやり、自らその最も甘美な味わいを生み出せるよう手助けしてやる方法である。具体的に言えば、土地の風景が、そこに住む動物達が、そしてビオディナミに象徴される正しい農法が生み出す独創性を、葡萄の木がしっかりと掴み取ることができるようにしてやるということである。「ワインメーカー」（人為優先のワイン醸造家）となるか、「ネイチャーアシスタント」（自然の力優先のワイン醸造家）となるのか、栽培家自身が自ら選択することができるのである。

3-1. 変化に富む気候の持つ重要性

では、セラーの中ではどのようにして醸造と向き合うべきなのか？ これを十分に理解するためには、醸造の前の段階に戻って、一つひとつの農作業をもう一度細かく見直す必要がある。非一物質（物質ではないもの）、即ち、私たち

の五感では容易に捉えることのできないものが、光合成の力を借りることで、如何にして葡萄の中に、かくも高貴な飲み物として集約されていくか、このことは既に皆さん、良くご存知のことと思う。しかし、先ずはこの現象からもう少し深く掘り下げていくことにしよう。酒蔵での作業を最小限にとどめるためには、この点をしっかりと理解することが何より肝心なのである。

最初に目を向けたいのは気候である。これには、年によって変化する3つの要素がある。最初に、雨。その年、その年によって早く降り出したり、遅く来たり、或いは多かったり、少なかったりする。二つ目が気温。これもまた一年を通して、また年によって大きな変動が見られる。そして3つ目が風。空気の動きともいえるこの現象は、光と密接に結びついており、そのため地形による影響を受けやすい。特に光を反射する湖や河がある場合は、その動きも複雑になる。しかもこれら3つの要素は、常に干渉し合いながら作用する。

例えば、気温が高いか低いかによって、地上の湿気を一時の朝霧として速やかに蒸発させるか、長くじめじめととどまらせるか、状況は大きく変わってくるし、風は風で、また別の側面から同じ問題に関わってくる。ギリシア神話には風の神が7人も登場することはご存知の通り！ その中で最も穏やかなのが、ゼフィール（ゼフィロス）、西風の神である。ここでもまた、古の人々の語りには多いに興味を惹かれるところだが、彼らは風という要素の中に見られる強さや質の違いを、性格の異なる神々へと神格化したのである。ローヌ地方でも、ギリシア人に似て、冷たく強い吹き降ろしの北風のことを「ドクター・ミストラル³」と呼んでいるではないか？

土壌に息づく生命や、ミコリザ、光合成に影響を与えているのは、実はこうした複雑に絡み合った自然条件なのである。結果として、葡萄の木が毎年、そのつるや、葉、実の中に創り出すものは、これらの数知れない微妙な要素によって様々な影響を受けながら出来上がっていくのであり、それだからこそ、年によって一つとして同じものは生まれ得ないのである。そしてこれらの要素が全て、まるで化学の合成反応のように、皮を通して種の中へと集約、収斂していく。というのも、およそ植物というものは全て、自分の種の生き残りを賭けて子孫を残すために仕事をしているのだから！ 種が作り出される様は、まさに見事としか言いようがない。ゲーテはそれを詩に託して表現しようとした。

³ ローヌ渓谷から地中海沿岸に向けて吹き抜ける強い北風のこと。冬から春に多く、冷たく乾燥している

かくして、非一物資の世界から物質の世界へと身を投じた植物は、毎年、自らの体の全て、或いは一部を作り直しながら、極限までエネルギーを収斂させつつ、種子の中にそのエッセンス、知識、経験の全てを閉じ込めると、翌年の春まで姿を消してしまうのである。この物質の収斂作用は、開花が終了して初めて開始される。四季の移り変わりとは密接に結びついた生き物である葡萄にとって、夏至が過ぎてから実の成長が始まるのが最も理想的なのである。何故なら、夏至の日を境にして、昼の長さが少しずつ短くなり、従って宇宙の力は求心的、つまり、中心に向かって働くようになるからである。

3-2. 葡萄の自己表現法

開花が早過ぎると、葡萄の木と季節の移り変わりとは結び付けている絆は変調をきたしてしまふ。夏至の日までは、昼の長さは長くなり続け、従って、宇宙の力は遠心的、即ち外へ外へと向かっている。葡萄の木について言えば、この力は、体、つまり幹や葉、茎を作るのを助けてくれる。逆に言えば、昼が短くなるようになって始めて、つまり宇宙の力が求心的になって始めて、葡萄もまたエネルギーの収斂作業を始めることができるのであり、実や種を作ることができるようになるといえる。

つまり、開花時期が早過ぎるということは、実や種を作るエネルギーの収斂作業を、宇宙の力が全て遠心的に外に向かっている春に、開始しなくてはならなくなるということの意味するのである。こうした「自然のリズムに反する」作業からも、一口飲んでみると大変期待を持てるワインが生まれることがある。ただし、二口目を含むと、その期待はあっという間に崩れ去るはずだ。

確かに、例え開花時期を早めたとしても、葡萄は実をつけるし、種もできる。しかしそこには、本来季節の移り変わりによってもたらされるはずのものが、上手く取り込まれていないのである。この問題をテーマにして試飲を行ってみるのも面白いかもしれない。勿論その時は、テクノロジーのもたらす要因を全て排除した健全な農業が行われた葡萄で、という条件を付けなくてはならないが。果肉は種を育てるゆりかごであり、一つひとつがニュアンスに富んだ表情を見せてくれる。シュタイナーによると、本来、種を作るために向けられるべきエネルギーの一部が、葡萄の場合は、果肉に残っているということだ。だからこそ、果肉を発酵させるとあのようにダイナミックな反応が起こるのであり、

一方で種の方はというと、苗木になるには余りにも未熟な力しかないというわけである！

こうして説明してくると、葡萄がその年、その年によって気まぐれだったり、滅茶苦茶だったりする気候の影響をどれほど色濃く受けているか、お判り頂けることと思う。画家が同じ風景を描く場合でも、毎回毎回、異なる絵の具を使って異なるニュアンスのある絵を生み出すのと同じである。

葡萄という芸術家が作り上げるのは、その年の気候がもたらしてくれる様々な要素と、土壤に住む多種多様な生命の生み出すニュアンスを融合させ、集大成した一つの大きな絵画なのである。地球が生んだ芸術家の一人として、葡萄は、自らの生み出す作品の中に、例え全ての要素が揃っていなかったり、或いは適当なものでなかったとしても、それでも、そこにある種の一貫性や、調和といったものを追求しようとする。しかしそのためには、葡萄という種に本来与えられた力が、これを阻害する無責任な行為によって妨げられたり、歪められたりすることのないようにしてやらなくてはならない。実を言うと、ミレジムの良し悪しは、正にこの点にかかっているのである。またそれだからこそ、収量を少なく抑えている畑では、ほぼ毎年上質なワインが出来上がることになる。

かくして、例えば酸味やアルコールの度合いにしても、分析に回せば多過ぎるとか少な過ぎるとか具体的な数値で示してくれるが、試飲する限りでは、それを全く感じさせないということもあるし、また例えば、シュナンの場合のように、実が完熟まで進むのを待つことで一ボトリティス⁴がついたためであるが、また別の味わいのワインが出来上がるということにもなるわけである。果汁が濃縮されることによって、ミネラル分がより強調されるためである。言うなれば、独創性に溢れた特質が、葡萄という植物によって、一つの大きな「全体像」の中に「閉じ込められる」というわけである。もう一度絵画の例を持ち出すならば、多少強すぎると思われる色があっても、キャンバス全体を見ると、上手く調和が取れているということもある（印象派の画家たちが手本を示してくれている通り）。それと同じように、ワインの場合も、ほとんど全てのミレジムがその年を特徴づける「個性」というものを持っている。とはいえ、このようなワインを作るためには、一つ重要な条件を満たしていなくてはならない。生きとし生けるものへの尊重、即ちこの地球に生命をもたらした自然への畏敬

⁴ 糸状菌でカビの一種

の念である。

この欠かすことのできない大原則を理解していないと、お楽しみの試飲もまるで意味のないものになってしまう。誰もが知っての通り、毎年生産されるワインにアペラシオン（呼称）のラベルをつける「権利」を獲得するためには、試飲で味の確認をすることが義務づけられている。ワインを認めるか否か、その決定を下す委員会のメンバーは、他ならぬ葡萄栽培家である。にもかかわらず、今日、AOCのラベルを得るために必要とされるのは、葡萄の木によるオリジナリティーに溢れた精一杯の自己表現ではなく、ストレートですっきりした味わい、欠点のない、土地の個性を持たないワインなのである！

アペラシオンの中には、個性のない味わいを求めたり、テクノロジーに依存する栽培家によって作られるものがあり、自分達の無理解を周囲に押し付けては、私たちがユーモラスを交えて「化粧を施されたAOC」⁵と揶揄するような代物を生み出している。AOCが本来求めていた「本物の」味わいに立ち帰ろうとする醸造家たちは、仲間はずれにされてしまうことが多い。こうした状況が存在するからこそ、「通」と呼ばれるカヴィスト（酒庫係）の手元に、「テーブルワイン」としてしか売れないようなグラン・ヴァン（特上銘柄のワイン）が存在するという事態になってしまうのだ。時流に流されることなく、自らの信念を貫いている醸造家たちの勇氣は、褒め称えられて然るべきである。更に加えて言わせてもらえば、正当な認可や、各人の哲学を尊重し合おうという雰囲気、試飲委員会を認めようとしないうる現状も、依然存在しているのである。

しかし幸いなことに、様々な限界を露呈しているこの試飲システムは、2008年中に見直される予定である。

というわけで、先ず何より私たち栽培・醸造家がやらなくてはならないのは、葡萄が自らの個性を最大限発揮することができるように手助けしてやることである。そしてそのためには、葡萄という生き物に秘められた限りない可能性を理解し、逆にセラーでの作業を最小限にとどめるようにしなくてはならない。その第一歩として実践すべきが、有機農法である。ビオディナミ農法は、これからじっくり説明したいと思うが、そこから更に先に進むことを可能にしてくれるはずだ。

⁵ 原文ではフランスの化粧品メーカーの名前が出されていたが、本人の了承を得た上で、真意がより伝わりやすいこのような訳にした

4. セラーでやるべき作業

この章で皆さんに伝えたいと思っているのは、春から夏にかけて葡萄の木が自分の力でやることのできる作業を人間が邪魔したりしなければ、また、葉や花、根が、地球に生命を育んできたエネルギーシステムを経ることによって、年を追って異常さを増していく状況にも上手に対応することができるならば、そして勿論、収量をリーズナブルなものに止めるならば、更にまた、更にまた、更にまた……、テクノロジーの力など一切借りなくても、その名に値するミレジムができあがるはずだということである！

ところが現実には、既にすっかりお馴染みになってしまったとはいえ、葡萄栽培を取り巻く余りにも苛酷な状況が存在している。葉面散布によって施される肥料や根から吸収させる化学肥料のせいで、もはや土壌は、葡萄の木を正しく生育させることができなくなっており、その結果、本来ならば成長するはずのない時期にでも、無理矢理栄養を摂らせ、肥え太らせなければならぬ状況になっている。樹液の中に浸透する毒と言っても良いような薬剤が出回っているかと思えば—こればかりは一刻も早く、体外に排出させてやらなくてはならない—、一方で、「実の熟成を進めるために」という理由で、収穫の6週間ほど前に葉を人工的に摘み取ったりもする。ではそうしてできる実はというと、生命力が不足してしまっているがゆえに、熟成する前に落ちてしまうし、それを防ぐために、今度は防腐剤が使われるといった有様なのである！ 私たちが理解すべきことは、何より「(自然の造る) 芸術作品」は、整然とした一貫性の中でしか生まれえないということ。そして、酒蔵の中で葡萄の果汁がどのような特徴を持つかは、自然に最大の敬意を払う限り無償でもたらしめてくれる高貴で、力強いエネルギーによってのみ、決定されるということである。さもないければ、セラーは工場と化し、醸造家は単なるワインメーカーになってしまう！

まさにこのような視点に基づいて、私たちは一時一時を葡萄と向き合っていく行かなくてはならない。まずは、もう一度、天然の酵母を根付かせること。というのも、季節の移り変わりに完璧にマッチした酵母菌を、私たちは殺してしまったからである。しかし、醸造を始めるとき、その微妙なニュアンスを余すことなく表現できるのは、この酵母菌だけなのである。ここでルカ・ガルガーノ氏が長年行ってきた戦いに、敬意を表すことにしよう。イタリアのジェノバでヴェリエという会社を経営する氏は、ヨーロッパ中を探し歩いて見つけた本物

のワインに対してのみ、「トリプル A」という名称（商標登録済み）を与えることにしたのである。その全てが、健全な農業で作られたものであり、一つひとつに如何なく発揮されている個性の豊かさが、自然に住みつく酵母菌の重要性を物語っている。

このことを正しく理解していないと、葡萄栽培家の中には、やがて遺伝子操作に近い形で人工的に造られた酵母菌を、わざわざ買いに行かなくてはならないといったものも出てくることになる。この人口酵母の素性がどういったものなのか、場合によっては製薬会社が、その巧妙なやり方によって闇の中に隠してしまうこともある。というのも、含まれる遺伝子が、既に存在する酵母菌と同じ種類のものならば、それを明記する義務がないからである。こうした人工的な「遺伝子の親子関係」を可能にするために、産業界がどれほどの圧力をかけたか、想像に難くない！ この業界を支配する無知、無理解が如何ほどのものか……、今でも、「拙い味」の基である自然の酵母を排除するためにワインに人口酵母を入れることこそ、賢いワインづくりだと信じて疑わない醸造家が沢山存在するのである！ 常軌を逸したやり方で音の調和を乱してしまえば、そこから生まれるのは不協和音だけである。これと全く同じなのが人口酵母である。

しかしながら、300を越えるとさえ言われる人口酵母には、香りづけの効果があり、醸造家にとって魅力的な商品であることには間違いない。その作用については経済面からの研究が綿密に行われ、どの酵母が（その人工的なアロマによって）、どの階層、どの価格帯で、どこの国の消費者により大きな購買意欲をかきたてるのか、全て明らかにされているのである！ 例えば、「これまで、バナナの香りを出してくれる酵母を使えば、5ユーロくらいの値段で、日本の消費者にとっても良く売れました。でもこれからの流行としては、カシスの香りを選ばれた方が良いでしょう……」などといったアドヴァイスもできるわけだ。そう、これはテーブルワインの話ではなく、AOCの折り紙つきのワインで実際に起きていることなのである。だからこそ、事態はより深刻である。人工的な味を出す化学物質が勢揃いし、合法的に醸造家の手に入るように準備されている。そして場合によってはコンピューター管理までされているのである。こうした現状について、正しく伝えている記事はまだ非常に稀である。しかし、もし、フランスの誇るAOCがこれからも長く愛されるようにと考えれば、今こそ行動を起こさなくてはならない。

無知、無理解を続けていけば、醸造家の中には仕事に行き詰るものも出てくるだろうし、化学薬剤に頼れば頼るほど、(醸造の過程で) 更に人為的な介入を行わなければならない。人口酵母、酵素の使用、浸透圧、温度調整などなど。かくして醸造家は、常に、自然の生き物たち(バクテリアなど)の進行を食い止めるために戦わなくてはならなくなる。微生物たちはあくまでも、「誤った方法で作られた」ワインの中に自分たちの餌になるものを見つけ、賢明なる自然が彼らに課した「掃除屋」としての役割を果たしているに過ぎないのだが。一度、生命のもたらすバランスが破壊されると、或いはそこまで行かなくとも脆弱化されるかすると、そこから生み出されるものもひ弱で、後から「化粧」でも施すか、テクノロジーに頼るかしなくてはならなくなる。しかし逆に、生命力が葡萄の木に取り込まれ、同化されるのを手助けしてやれば—そして、まさにこの点でビオディナミは特に優れているのだが—、エネルギーをたっぷり取り込んだ葡萄の実は、例え醸造家がどんなに突飛なことをしようとも、決してそれに屈することがない。ここまで説明すると、どうしてセラールでやるべき仕事について、これほど意見が分かれるのかお分かり頂けると思う。

4-1. 発酵

もう一つ、ワイン醸造にとって極めて重要なプロセスである発酵を例にとって話を進めよう。熱の発生を伴うこのプロセスは、26度から30度の温度を保ちながら数日間続く。このプロセスは、将来への可能性を秘めたワインの(一時的な)劣化と捉えることもできるし、同時にまた、その旨みを最大限発揮させるために必要不可欠な過程と捉えることもできる。発酵は、人間が熱を出すのと似ている。過度に熱を発生させながら、これまでとは異なるバランスを求めようとしているのである。

ほんの少し前までは、発熱も私たち人間の体にとって、病気を治すために必要なプロセスと考えられていた。熱が出るのは、本来自然の治癒力に伴うものだが、それが現在では、良くないこと、危険なこととみなされるようになった。そして、発酵に対する考え方も、私たちの発熱に対する捉え方と同じ道筋を辿ることになったのである。本来、その年、その年の葡萄の実のでき方によって、熱の発生の仕方も異なるはずなのであるが、私たちはそれを同じ一定の状態にしようとする無理な管理を行っている。醸造家たちは、熱が上がり過ぎることによって起こる質の劣化というリスクを最小限に留めようと努力しているわけだが、畑での作業が健全に行われていれば、葡萄の実に濃縮される様々な要素も

リーズナブルなものとなり、発酵過程で起こる発熱も、ワインにプラスアルファの旨みをもたらすプロセスとなるのである。

4-2. 浸透圧

浸透圧についても、実際にこのテクニックが広く使われている以上、話さないわけにはいかないだろう。浸透圧をかけるとは、水分を取り除きながら果汁を濃縮することを意味する。葡萄の木に自分の個性ある味わいを表現する力が十分になかったようなとき、より効率良くその旨みを引き出すために行われる技術である。しかし実際にはこの仕組みを正しく理解しているものは少なく、醸造家の中には、収穫直前に降った「好ましくない」水分を取り除くための作業だと言うものもいるくらいである。

真実はというと、植物を脱水状態に陥れるあの化学薬剤を土壌に散布したりしなければ、或いは、土中に息づく微細生物の力を借りて正しく雨水の排出が行われているならば、更にまた、あの恐ろしい化学肥料などによって阻害されることなく、根が真っ直ぐ地中に伸びていれば、雨が収穫の質に影響を及ぼすことはほとんどないのである。実際、僅か数日の間に100ミリの雨が降ったとしても、バイオダイナミで501番と呼ばれるクオーツ（水晶）をベースにしたプレパレーションを使えば、葡萄の木に余分な水分を排出させ、美味しいワインを作ることが可能である。

葡萄の木も、そしてその実も、正しく健全な農業が行われている限り、水分を取り過ぎることは決してない。必要な分だけを吸収する。AOCで認定されたワインが浸透圧法を使って造られているなど、私にはとてもまともなこととは思えない。もし万が一、そんなことがあるとして、その事実はラベルに記載されるべきである。スーパーで売っている安物のオレンジジュースに、「濃縮果汁還元ジュース」と書いてあるように、ワインにも「濃縮果汁還元ワイン」と明記するべきなのである。雨が少なく、好天続きの良い気候条件に恵まれた年、飲み手にとって類稀と言っても良いほど美味しいワインができることがあるが、実はその中でも、逆浸透圧法を用いて味を調整されたものが存在する。このテクニックは、ワインの極性を変える、つまりプラスとマイナスを入れ替えるという作用をもたらしてワインの熟成に一体どんな影響を与えることになるのだろうか？一、収量を非常に増やすことができるのである。

しかし、この章での目的は、葡萄栽培についてその詳細を一つひとつ徹底的に見直していこうというのではない。問題点の現状と概要を、皆さんにしっかり理解して頂くことである。人の手を加えることでしか美味しいワインはできないといった風潮は、それ以前の段階として、栽培家の無知、無理解と大きく関わっているということを知って頂くことなのである。現在の状況はと言えば、非常に高価なワインの中にも、産業化された、即ちテクノロジーに頼った農法で生産されたものがあり、しかも INAO の一部の狡猾な人々によって、ワインよりも自分のキャリアを大事にするような人達によって、その数は日々増大しているのである。

4-3. 酸素添加

ここで酸素添加についてお話することにしよう。このテクノロジーも、一部の醸造家にとって非常に便利な道具となっているようだが、実を言うと、畑での作業が正しく行われてさえいれば、本来ならば葡萄の葉が全てやってくれるはずのことを、そうでないがために、後から人為的にやらざるを得なくなったというに過ぎない。

そしてその場合、決して考えられているように大きな効果を期待することはできない。これは全てのことについて言えることだが、川上で何か過ちをしでかした場合、その影響は必ず川下に現れる。つまり農作業のやり方に間違いがあると、セラーでの結果に影響が出るということである。具体的には、樹液の中に無理矢理取り込ませた化学薬剤を、遠心分離機を用いて、折角できたワインを完全に壊してしまいつつながら、取り除かなくてはならなくなるわけであり、一年中、酵素の力を借りて、弱ったり、不適切な使われ方をしている酵母を活性化させなくてはならなくなるわけである。私はここで、実際にこの技術を使っている醸造家を非難しようとしているわけではない。ただそうした人達に対して、テクノロジーを駆使して作られたようなワインに、フランスから輸出できるものは何もないと、伝えたいだけなのである。

実際、同じ技術を使えば、フランスより遥かに人件費の安い国で、全く同じ味のワインを造ることができるし、その場合、ワインの価格は4分の1から5分の1になるはずである。もし、速やかにこの事実を理解できなければ、私達に待っているのは大きな失敗と挫折のみである。しかも、事情はフランスのどの地域についても同じなのだ！ 忘れてならないのは、フランスは、2005

年だけで150万ヘクタリも売れ残ったワインを、蒸留に回さなければならなかったということである。しかもこれらの事実が、日々、少しずつフランスと、フランスワインのイメージを貶めている。フランスという国の多様性に溢れた気候と地形が、それに最も適した、そして何千年もの古の時から根づいているセパージュと出合えば、世界の競合国を相手に充分、優位に立つことも十分に可能のはずなのである……。もちろん、フランスワインが全てと言っているわけではない。そうではなくて、フランスという国には、他国が羨む優れた葡萄栽培、そしてワイン醸造の大いなる可能性が存在するということを強調したいのである。

4-5. 認識することの重要性

幸いなことに、まだ非常に散逸的な状況とはいえ、私たちを陥れようとする罠の存在について、少しずつ理解を深めつつある醸造家たちも増えてきている。彼らは、「本物のワイン」に立ち返ろうとしており、今日、余りにも乱用されるようになった「テロワール」といった言葉についても、その本来の意味を回復させようとしている。ある意味で、これは作用と反作用の法則の「反作用」なのである。化学的な薬剤の使用や、人為的な介入を増やしすぎた余り、逆に、そうした行為とは全く正反対の方向に進もうとする人達に道を開くことになったわけである。消費者達の中にも、隠された真実に気が始めた人達がいる。香りづけのために人工的に加味された酵母のお陰で、ワインにスマイレの香りや味わいがもたらされたとして、それは果たして素晴らしいというに値するだろうか？ こうした問題こそが、今問われるべきなのである！

「本物のワイン」復活の運動を更にスピードアップして進めていくためには、テクノロジーの名の下に実際に行われていることについて、ビンの裏ラベルにそれを明記させるよう、法的に義務付けてしまうことである。例えば、こんな風に……「このワインは、逆浸透圧法によって濃縮され、スマイレの花の香りを持った酵母菌 X によって香りづけされています」。もちろん、実際にこんなことが実現するとは思えない。業界では、ワインに関わる幾つもの利害が複雑に絡み合っているのだから。とはいえ、AOC が認定してきた味わいを正当に受け継ぎ、それを保証するグループを創ることは可能だった。このグループは4年前に創設されたが、世界でもこれ以上ない厳しい憲章の下にワインの質を保証

し、現在 12 カ国、155 の栽培家をメンバーとしている⁶。既に彼らの活動は、世界中で広く歓迎されているが、その詳細については、ビオディナミのウェブサイト⁷を参照して頂きたい。

一口に「本物のワイン」と言っても、これを実現するためには、先ずは正確な定義づけを行わなければならない。そしてそのために作られたのが、畑で絶対にやってはならないこと、セラーで絶対にやってはならないこと、その全てを明記した、ワインの質に関する厳しい憲章である。現在存在する憲章の中で、これほど厳しいものは世界にも他に例をみない。この規則は一般の消費者に対して、良いこと尽くめの安易な約束事（多くの場合、簡単に破られるの現実である）ではなく、葡萄栽培家一人ひとりの、葡萄の木に対する、ワイン造りに対する、そしてお客様に対する厳しくも正しい取り組みの姿勢を示したものである。

さて次に、こうして造られたワインが、質の面でも、またその特徴の面でも、ある一定のレベルに達していることが必要となる。このグループの目的は、「グラスを片手に」、栽培される場所によって、そしてその年、その年の気候条件によって、同じセパージュからでも表情の異なるワインが出来上がること、「人工的な化粧」を施されていない本来の微妙なニュアンスこそが、ワインに本当の魅力をもたらすのだということを明らかにすることである。ワインは単にビオディナミ農法で造られたというだけでは不十分なのであり、実際に飲んで美味しく、そして、正しく選ばれたセパージュのきちんとした仕事によって、栽培された土地の個性が上手く表現されていなければならないのである。

とはいえ、同じ「本物のワイン」を目指す道すがらにあると言っても、いつ有機栽培、或いはビオディナミ農法に転換したか、その時期によって、取り組みのレベルも異なれば、これまで得られた結果にも差があるのが現実である。この点が問題として取り上げられることもあるが、しかし、事実はそのほど重要ではない。ビオ、或いはビオディナミという新しい市場に興味を持ちつつも、実際にそこに身を投じる覚悟のできていない栽培家の中には、「うちでは95%が有機、若しくはビオディナミでやっています」といった言い方をしているものがある。しかし、少し考えてみれば、この説明が実際にはあり得ないことはすぐ

⁶ フランス語の原文と数が異なるのは、ご本人からデータを頂き、最新のものに訂正したためである

⁷ <http://www.biodynamy.com/>

に分かるはずだ。かの有名なニュージーランドのバイオダイナミ実践者、ジェームズ・ミルトンも言っているように、女性が 95%妊娠しているなんてことはあり得ない。妊娠しているか、いないか、0%か、100%かのどちらかなのである。

また中には、こんなことを言う栽培家もいる。「化学薬剤も使ってはいますが、それは葡萄を病虫害から守るためで、あくまでも最小限に止めています」と。しかし実際は、この化学薬剤の使用こそが、病虫害による被害を増す原因なのであり、こういうことを言う栽培家は、最も肝心なところを理解していないことになる。また所謂「リュット・レゾネ」と呼ばれる農法を、これこそ正に本当の進歩だとして語る人間もいるが、実際はここでも相当量の化学薬剤が使われている。勿論、リュット・レゾネとはいえ、これを決断した栽培家の努力は賞賛されるべきだと思うし、実践には費用もかかる。にもかかわらず、この農法では、葡萄の木が十分にその力を発揮することは決してできないのである。楽器を調律しようとしたは良いが、上手くできないのと同じ状態なのである。調律ができていなければ、美しい旋律を奏でることはできない。もし、葡萄栽培家が本気で努力をするつもりならば、先ずは1ヘクタールか、若しくはその半分でもいい、完全な有機栽培、若しくはバイオダイナミ（こちらの方が結果は早く出る）に転換してみることである。2年か3年後には、質の面で大きな違いを実感することになるはずだ。

しかし裏を返せば、葡萄栽培家からこのような話しが出るということは、従来の農法で広く使われていた化学薬剤がどのような結果を引き起こすのか、事の重大性に多くの人達が気づき始めたからに他ならない。それだけでも大きな進歩である。しかしながら、多くの場合、葡萄の木が健康を維持できないために引き起こされる様々な病気を如何に回避するか、この点に限られた知識を得て満足してしまっている。現在の農業学校の教育では、決して上手く答えてくれはしないのだから！ 有機栽培に関する教育も、現在のところ、化学薬剤の代わりにどんな天然成分のものを使えば良いかを教えるだけに留まっている。相変わらず私たちは、生命というものを機械的に理解するだけで、悲しいかな、それぞれが共生し合いながら繋がっている広大な宇宙のシステムの中で、この命というものを捉え直そうとはしていないのだ。

では、この数十年間に引き起こされた近代農業による甚大な被害を、どうすれば速やかに元の健康な状態に回復させることができるだろうか？ その人体

に与える影響は、科学者達の目にも年を追うごとに深刻な様相を呈してきている。大量生産を可能にした近代化学農業は、地上から飢饉をなくすことを可能にする、などといった言い訳も、もはや通用しはしない。実際はその逆だったのである。貧困にあえぐ国々は、膨らみ続ける化学薬品の請求書を前に、その支払い能力を失い、再び餓えにあえぐ状態に陥ってしまった。勿論、健全な方法で、そして安価に、世界の人々に食糧を供給することもできた。しかし、これには、政治的な後押しは期待できない。何故なら、生命界を統べる法は、どの政党にも属することがないのだから。

では葡萄栽培においては、どうしたら瀕死の土地に命を復活させることができるだろうか？ 深刻な病気に悩まされることもなく、植物由来の、天然素材の健全で、優しい肥料だけで栽培を可能にする、そんな丈夫な土壌を取り戻すにはどうしたら良いのだろうか？ 私は今、「健全で」という表現を使ったが、というのは、植物由来のもの、つまりオーガニックと言われるものの中にも、毒性を持ったもの、つまり使用しない方がいいものが存在するからである。更にまた、一体どうしたら、土地本来の味わいをワインに、紅茶に、コーヒーに、チョコレートに、そして野菜に復活させることができるだろうか？ ここで発した全ての問いに答えてくれるのが、ビオディナミ農法なのである。

5. 命の源への回帰：有形の科学

生命への新しい宇宙観へと踏み出す前に、「ものの形」についての理解を深めるために、今しばらく、セラーについての話しを続けたいと思う。そう、私が話しをしたいのは、「ものの形」、そしてそれに関わる全てについてである！ 私たちは、ワインを入れる樽が、使われる木の種類によって異なる味わいを出すことは良く知っている。ところが、その最も基本的な性質である「形」の持つ意味については何も知らない！ ご存知の通り、樽は、360℃の穹状をしている。この形は、古の昔、人間が生命の背景にあるものを今よりずっと正しく理解していた時代に由来する。

当時は、一つひとつの形が、そしてその土地その土地が、比率や素材などなどの違いによって、異なるエネルギー効果を生むのだということを人々は理解していたのである。実は、私たちが家を建てる時、その場所や形について深く

考えなくなったのは、つい最近のことなのだ。家は私たちの眠りを保証する場所でもある。眠りについていてるとき、普段は私たちを外界から守っている「個」、つまり「私」という自己認識が、一時的とはいえ肉体を離れ、私たちは無防備な状態になっている。ということはつまり、就寝中、私たちの肉体は、その土地や建物が生み出すエネルギー作用に、それが良いものであれ、悪いものであれ、露わにもさらされてしまうということになるのである。時にある建物の中で上手く寝付けられないという経験をすることがあるが、それは果たして、体に悪影響をもたらす力に屈することのないよう、自らを守ろうとする自己防衛作用が働いているからに他ならない。

そしてこれは、ワインについても同じなのである。命ある様々な生命体からそれぞれに異なる力を、エネルギーを受け取ることなくして、ワインがワインとしてこの世に生まれ出ずることはできないのである。かつては、こうしたものごとの捉え方をないがしろにするものなど決していなかった。一体、生命の力とは何なのか？ 何からできているのか？ この力、エネルギーに対する新しい理解を更に深めることは、農業にとっても、ビオディナミをより良く理解するためにも、また良いワインが生まれるためにも、そして広くは私たち自身の健康で快適な生活のためにも、極めて重要なことなのである。現在既に科学的根拠は出揃っており、その影響の大きさが十分に認識されなければならないときに来ている。

5-1. 引力

古の昔のことになるが、ローマ人たちは、これから家を建てようと思っているところで、一年間、羊を放牧するのを慣わしとしていた。一年の放牧が終わった後、その羊たちを屠殺、肝臓の状態を注意深く観察し、それを元に、家を建てるか建てないかを判断した。果たしてこの習慣が何を意味するのか、これからももう少し具体的に考えてみよう。

地球上にあるもの全ては、地球の力と太陽の力、即ち、私たちの気持ちやエネルギーを鎮め、和らげる働きを持つ力と、逆に高揚させ活発にさせる働きを持つ力との拮抗作用の中で存在している。このことは既に前章までで理解してきた。これをもう少し科学的に言い直してみよう。地球上には、至るところに、「吸収」点と呼ばれるところと、「放出」点と呼ばれるところが存在する。これは引力地図を見てもらえばすぐに分かる。引力の強さ、つまり引力の増幅度

は、場所によって同じではないのである。引力は、赤道から極（北極、南極）に向かうにつれて強さを増すが、この二つの極で地球は赤道方向に僅かに押しつぶされたような形になっている。更に同一点では、もちろん、高度が高くなるに従って引力は小さくなるし、逆に地殻の断層の中（つまり高度の低いところ）では非常に強い。

加えて、引力は、地球から月、太陽に至る距離が変化するのに従って、実は毎日少しずつ変化してもいる。例えば、その非常に大まかな特徴から見ても、海は決して平坦ではない。同じ海でも、場所によって高いところ、低いところと、100メートル以上もの高低差があるのである。この現象はどうして起こるのか、海が場所によって異なる大きさの引力の影響を受けているからに他ならない。

更に私たちが地上で感じるこの二つの力の作用に加えて、土壌の性質、地殻の褶曲状態、その向き、圧縮度、地質学的性質などのファクターも関わってくる。植物や私たちの健康が拠りどころとする生命の掟を正しく理解しようとするとき、そこでは多くのことが意味を持つのである。バイオダイナミを実践していく中で、時間を重ねると共に、このような理解を身につけることも可能になるのだ。とはいえ、地球に様々な影響を及ぼすのは引力だけではない。地球は複数のエネルギー経路に覆われており、例えば、地電流、磁力、放射線—プラハの街がそうだが—といった自然エネルギーが相互に干渉し合い、人体を流れる静脈のように脈々と活動している。

食文化、或いは食の芸術や味覚というものに関心を持つと、料理やワインの中に見出されるその多様で微妙な奥深さに、道徳的な義務感のようなものすら覚える。これほどまでに多様な香り、味わい、色合い、臭い、形を生み出すことを可能にしたこの体系の中に隠された秘密を解き明かさなければならないと。そして実際、これを理解することによって、葡萄栽培にもこれまでとは違った形で取り組むことができるようになるだろう。もちろんこの道を選ぶことは、最新のテクノロジーが生み出した人工的なものを使って食品に香りづけをしたりすることより、遥かに労多きものとなる。しかし、人工的な方法では、本来葡萄に与えられるべき豊かさをそっくり引き出すことはできない。では、そのシステムとは一体どのようなものなのか？ どのように機能しているのだろうか？

5-2. 地電流

地電流という言葉は正しく理解されることが少ないが、砕いて言えば、成極（エネルギーが集中して極ができること）の結果として生まれるポテンシャル（潜在エネルギー）の大きさが、場所によって違ってくるといふ現象である。そしてこの成極こそが、実は物質の中に生命を誕生させる現象に他ならない。地電流なくして物質は存在しないのだ。

もちろん、ここで言う電流はあくまでも非常に僅かなものであるが、とはいえ、地球上のあらゆる所に存在し、生命にとって不可欠なものなのである。細胞レベルで見ても、電気なくして生きていくことは不可能である。仮に木の天辺から根っこに向けて金属線を貫通させたとすると、両端でのポテンシャルの違いを破壊してしまうことになり、最悪の場合、その木は即座に枯れてしまうかもしれない。この地電流システムは、地上に生きる全ての生命体で活発に働いており、地球と太陽系との関係に依じて常に変化し続け、更に地球に少なからぬ影響を与える太陽そのものの活動に依じて変化している。エネルギーレベルで見ると、全てが、同じシステムの中での「交換」（エネルギーのやり取り）なのである。地電流は、地下の（そして大気中でも）至るところに存在する。世界大戦の最中には、この電気を通信に利用しようということさえ考えられていたくらいである。

ところが、高圧電流や発電所、TGV、そして私たちの日々の生活のなかで生じる「逃避電流」（実際に使われる前に送電の過程で失われてしまう電流）が、地上の生命にとってなくてはならないこの地電流網を、著しく汚染、若しくは狂わせてしまっている。しかも、このことがどれほど重篤な悪影響を人体に及ぼすか、その弊害を認識しているものは、ほとんどいないのである。そう、地球という偉大なる自然の中では、全てが見事に組織されている。そしてそのことを深く理解するためには、この組織網を司っているシステムを改めて見つめ直す必要があるのだ。物理学者ならば知らぬはずのない、この地電流によるシステムを。

5-3. 磁力

磁力もまた、地上の生き物にとってなくてはならない基本的なエネルギーの一つである。磁石の針を動かすのがこの磁力であり、地球の北から入って南から

抜ける。また磁力は、ある一定の条件の下で、物質を変化させることができる。つまり、磁気的な成極を行うことが可能とされ、この性質を利用して「磁気記憶装置」が生まれた。磁力はまた、地上の生命のバランスにとって極めて重要なエネルギー場の一部でもあり、土壌の性質、磁場を生じさせる金属の性質、その形状などなどに応じて、地電流同様—この地電流とも磁力は密接に結びついているのだが—、地球上の至るところで変化する。引力の場合と同様、この磁力についても、地球全土を網羅する詳細な分布地図が作られており、実際に購入することもできる（同様にまた、地震電流の地図も作られており、これも極めて大きな重要性を持っている）。

更に、やはり引力と同様に、発散地点、吸収地点があり、加えて逆転地点なるものまで存在する。この逆転地点では、地上の一般的な南北と反対の南北が存在することになる。地球の磁場は、太陽の磁場と密接に結びついているが、この太陽の磁場が、そもそも 11 年周期で逆転を繰り返しているのである。これについては、未だ解き明かされていない多くの謎が残っている。

もう一つ、26,000 年周期というのがあるが、これはヒンズー教で、ブラマの吹き込み（求心力）と吐き出し（遠心力）の名で呼ばれると同時に、プラトン周期（25,920 年、即ち 2,160 年の 12 倍）に相当するものでもある。プラトン周期についてはシュタイナーがその意味を解説してくれているが、一言で言えば、太陽が春分の日、黄道 12 宮の星座を前に昇り、そこから丁度 360 度、ぐるっと一回転するのに必要な年月のことである。（黒点周期に応じて活発化する）太陽フレア、つまり太陽表面での激しい爆発現象は、地球に磁気嵐を引き起こす。このことは飛行機を操縦するものの間では良く知られており、例えば、バミューダのトライアングル海域と呼ばれる一帯では、磁石が全く働かなくなり、南北の方角を知る手掛かりがなくなってしまう。また、心臓疾患を抱える人達は、この臓器がどれほど磁気嵐の影響を受けやすいか、日々実感されているはずである。人体を流れる磁場を上げ、同時に電界を一定に保つと、心臓は収縮し、その逆を行うと、心臓は拡張してしまう。

かつてミッテラン政権下で大臣を務めたあのミシェル・ロカールの父にあたるイヴ・ロカールは、物理学者であると同時に、数学者でもあり、エコール・ノルマル⁸で教鞭を執るほどの地位にあった人だが、彼もまた磁力に大きな興味

⁸ グラン・ゼコールの一つで人文系アカデミズムの最高府

を抱いた一人であり、人体に及ぼす磁場の影響についての著作を残している（参考文献の章を参照のこと）。これらの事実は全て、この世の森羅万象がどれほど太陽系と深く結びついているか、マクロコスモス（巨視的宇宙）とマイクロコスモス（微視的宇宙）がどれほど頻りに干渉し合いながら存在しているかを示すものに他ならない。

地球の磁場に影響を及ぼしているのは、太陽系だけでない。太陽系を包摂する銀河系の中心もまた、重大な役割を果たしているらしいと言われている。この電磁界は、言うなれば、地球の神経系統にも匹敵する存在なのである。電磁界なくして如何なる化学反応も起り得ないし、実際、電気的な負荷の移動が起ることによって始めて、化学反応は可能になる⁹。人体を形作る様々な構成物質を「結びつけたり」、「引き離したり」しているのもまた、電磁場に他ならない。DNA と、その右巻き、左巻き（つまり、時計の針と同じ方向か、その逆かということだが）の二重螺旋構造は、この電磁場に向けられたアンテナでもある。20 世紀初めに既に、ジョルジュ・ラコヴスキーがこのことを語っていたが、物理学者が実際にそれを確認したのは、ずっと後になってからのことだった。更に面白いのは、人はその人にしかない固有の電磁場を持っており、それがエネルギーレベルでも、また個性のレベルでも、その人自身の全体像を織り成す重要な要素となっているのである。そしてこの電磁場のことを、私たちは「オーラ」と呼んでいるのだ。

キルリアン効果と呼ばれる現象があり、これについては幾つかの著作も発表されているが、この現象により、オーラをイメージとして捉えることも可能である。しかしながら肝心なのは、この電磁場を通すことによって始めて、生命体は生きるエネルギーを受容し、また発現させることが可能なのだということ、理解することである。言い換えれば、電磁場は、地球上の生命にとって、ある種のベクター（方向性を持った媒介、砕いて言えば、運び屋）のようなものだという事である。再度ラコヴスキーの理論を引用すると―彼はこの分野におけるパイオニアであり、現在では多くの物理学者からも認められているが、地球上の生き物は全て、太陽からもたらされるエネルギー、或いは宇宙からもたらされるエネルギーと言っても良いかもしれない、こうした絶え間なく降りそそぐエネルギーに対する共鳴体のようなものとして生きているのである。しかも、生命体は単なる受容体ではない。エネルギーの発信者でもある。だから

⁹ ある一定の条件下で、本来安定していた物質の間に電子の移動が起ることによって化学反応は成立する。酸化や還元もそうである

こそ、地球上の動植物の種が一つ、また一つと姿を消していくことは、地球という惑星全体の質が貧しくなっていくということに他ならないのであり、例えて言えば、一部のチャンネルの電波しか受信することのできなくなった壊れたテレビのような状態、ということになる。更に言い換えれば、地球にもたらされる通信網が減っていくということでもあるが、それは地球が、そして他の惑星もまた、受容体であると同時に、送信者でもあるからに他ならない。今まで話してきたことは全て科学的に証明されている。唯一果されていないのは、こうした科学的成果を統合していくという作業である。

ここまで話してくると、場所によって、「エネルギーレベルが特異なところ」、通常では考えられないほど強いところがあるという現実も容易に理解できるのではないだろうか。何より面白いのは、こうした高いエネルギーを持つ場所にこそ、稀代のスケールを誇る重要な建築物（寺院とか、大聖堂、ピラミッドなど）が作られているということである。更に時代を遡れば、巨石群が見つかるのもこのような場所であり、同様に強大なエネルギーが満ち溢れている。これらの現象は、現在、「ゲオ・バイオロジー（地質生物学）」という名前と呼ばれるようになったが、正に、地質学的観点で捉えた生物学、生命科学ということになる。しかし同時にまた、この「ゲオ・バイオロジー」は、「聖なる地理学」という名で呼ばれることもあり、それは、これら大建築物が建てられているエネルギーポイントが、地球にとって鍼灸の「ツボ」のような役割を果たしているからである。

この「ツボ」の部分に、シャルトルやモン・サンミッシェルのような瞑想や祈りの場を作ったり、或いは大学のような学術、芸術の場、或いはまた、古代の人々がそうしたように劇場を建設したりするということは、人間が自らの探求、注意の集中、若しくは様々な宗教的儀式といったものを通して—その形態は、しばしば場所によって大きく異なるが—複雑なこのエネルギーシステムと干渉し合い、作用し合うことを可能にするのである。そしてこのエネルギーシステムこそ、地球上の全ての生命活動と深く密接に関わっているのである。地球の「ツボ」をこのように活用することによって、地球が人間にもたらしてくれるものとほぼ同様のものを、人間は地球に対して与えることができることになる。

更に、葡萄栽培とは何なのか、葡萄は一体どんな仕事を成し遂げているのか、AOCは本来どんな意味を持っているのか、という問題を深く理解するためには、

この組織されたエネルギー体系全てを正しく捉えなおすことが不可欠なのである。AOCは、その味わいにしろ、個性にしろ、これまで語ってきた様々な要因の目に見える形での結果、到達点にしか過ぎない。実際は、個性豊かな味わいとして私たちの五感にその具体的な姿を現す前に、エネルギーレベルで、これら複数の要因が複雑に絡み合っていたのである。

完成された形ある一つの存在となるには、原子や細胞が何百万、何十億万という膨大な数の変異、変転を絶え間なく繰り返していかなくてはならないのであり、親和力、或いは不調和力の拮抗の中で、植物、動物、或いは人間として生まれ出ずるために、作業は秩序正しく粛々と行われていくのである。一個の胚が一つの生命体として完成されていく様子を発生学的に見ても、視覚的には捉えることのできない、しかし斯くも活潑なエネルギー体系の及ぼす作用に、心を動かされずにはいられない。そして実はこの発生の過程にこそ、病気の治療に有効な素晴らしい秘密が隠されているのである。

どの臓器も、細胞が進化していく途中で「出合った」ある種の記憶を持ち続けている。これは、言い換えれば、お隣さんや、子供時代の友人について、忘れることのできない思い出がいつまでも残っているようなものである。医学の中には—シュタイナーの唱えた人智学もその一つだが—、この不思議な関係を上手く利用する術を心得ているものがあるが、それは取りも直さず、生命の誕生を司る掟の中にこそ、森羅万象の本質への答えが横たわっているからなのである。無限に小さな単位にまでこだわりながらも形あるもののレベルでしか物事を理解しようとせず、生命が誕生した背景に目を向けようとしないのは、芸術作品の分析を顕微鏡レベルで行って満足してしまうのと同じくらい奇妙なことなのである。

ケルト人の残した文化を見ると、時に相反する極性を持ったエネルギーが互いに干渉し合うさまを、どれほど彼らがしっかりと感じとり、またその中で生きていたかが理解できる。その様子は、ダブリンで見ることのできる《Book of Kells》(ケルの書)の中に描かれており、その素晴らしさは、単なる芸術の枠を超えてしまっている。実際に描かれているのは、物質界に生命をもたらす諸々のエネルギーであり、その各々が絡み合っているさまが再現されているが、これは正に生命のダイナミズムであり、エネルギーの骨組みなのである。

ルドルフ・クツーリの著した本、《Le Dessin de formes》(形状描写)は、こ

れより更に先に行くもので、ある形から別の形へと変化を遂げる様子を体感することができる。同時にまたこの本を紐解くことによって、物質形成へと向かう求心力と、逆に遠ざかっていく遠心力とが絶え間なく干渉し合っている様子も理解可能となる。実際、全ての形は、この二つの力の結果として生じているのである。

かくして、これまで見てきた幾つかのエネルギーの流れの交わるところに一古の人々はこのエネルギーに対して非常に敏感だった—、私たちは大聖堂や要塞、僧院、そして時にはワインセラーなどをも建設してきたのであり、この特殊なエネルギーの持つ様々な効果・効能を活用すると同時に、エネルギーそのものの「質を高めてきた」のである。

5-4. 地球のエネルギー（地力）の質を高める：建設者の叡智

しかし一体どうすれば、このエネルギーの質を高めることが可能になるのだろうか？ この問いは、最終的には科学全般に関わる問題となる。巨視的宇宙観に基づくエネルギー界が、自ら秩序を与え、言い換えれば自ら形作っている物質界において、その存在感を増すためにはどのような手助けをしてやれば良いのか？ ある場に存在する生命エネルギーを、それまで以上に強めてやるためには、どのようにすれば良いのか？ この問いこそ、正に、現代の建築界が知識の紆余曲折の中に埋もれ、忘れてしまったものに他ならない。古人（いにしえびと）の“宇宙への”アプローチの仕方の中には、直感に満ちた素晴らしい叡智が存在するのであり、その正しさを、今後、科学的に証明していく必要がある。作業は既に始まっており、中には長い時間をかけて、この古代の叡智を取り戻し、その素晴らしさを評価しようとするものも出てきている。

5-5. 原型エネルギーとの絆を持つ

「原型エネルギーとの絆」については、少なくとも基本的なところだけでも、具体的にしっかりと理解しておく必要がある。というのも、バイオダイナミを実践する中で、これとは別の方法で強化していくことになる幾つかの質の高いエネルギーが存在するが、これらについて正しい理解をするために、この絆が大きな手掛かりとなるからである。生命は、その本質を突き詰めれば、エネルギーによって成り立っているのであり、この点についても、これまでの説明により、ずっと分かりやすくなったはずである。

では古の昔、人はどのようにして、かくも多様で、また時に心を和ませてくれたりもする様々なエネルギーの集まる所と接触を持つことができたのだろうか？ どのようにして、エネルギーが自分たちのもとに降りてくるのを促したり、或いは、特定の場所に集まるよう、操ることができたのだろうか？ これらの問いは、実はバイオダイナミを实践する葡萄栽培家が、オペラシオン、つまり畑の土壌や気候といった独自性をより明確にワインの中に発現させるにはどうしたら良いか、と問うのと非常に近いものがある。つまり、このような問いかけをしながら理解を深めていくことによって、農業に従事するものも、自らに課せられた労働の素晴らしさを再度見出すことができるのである。

建築では、全てが円から始まる。中でも、一つの円がもう一つの円を生みながら広がっていく同心円（凧いだ水面に石を投げ込んだときのことを思い浮かべて頂ければ、より分かりやすいかと思う）。この円は、同じ一つの中心点、つまりある一点を基点として次々に外に向かって広がっていくものである。

ところで、同心円を見ていると、やがて次のような問いに突き当たる。真ん中の点は一体何なんだろう？ しかし残念ながら、こうした類の問いは、しばしば無視されるか、さもなくば知的関心からも見放され、子供達の素直な好奇心を台無しにしてしまう。しかし、ユークリッドは、点について次のような素晴らしい定義を行った。「点とは部分が何もないもののことである。」そう、彼の定義の奥深さ、そしてその広がりをも何としても理解しなくてはならない。点は「未だ」表面積を持たないのである。空間を所有していないと言った方が良いかもしれない。更に言い換えれば、私たちを取り巻くこの物質界、物理的な世界に生れ落ちたばかりの象徴、若しくは「兆し」と言っても良いだろう。つまり、点は、物質を構成する分子の一つひとつの裏側に潜んでいるエネルギー界から、この物質界へと移行していく際の通過点なのである。力やエネルギーといったものが、それらとは違った法則に従って動いている物質界へと移行するために、どうしても通らなければならない道筋でもある。点はまた、逆回転する二つの円、或いはレムニスケートと呼ばれる連珠形が、数字の8を描くようにして交わる部分でもある。

このようにしてみえていくと、物理学者が無を使って何を言わんとしているのが非常に理解しやすくなる。無とは言っても、実際は何もないのではなく、多くのもので満ちているのだが……。これは、無限大を意味する「横に寝た8の

数字」(∞)の隠された意味でもあるのだ！ 即ち、活発な動きとエネルギーに溢れ、見事に秩序立てられた世界を意味しているのであり、地球と生命の力やダイナミックさとを結びつけているものに他ならない。点とは、これら様々なエネルギーが物理的レベルに辿り着いた、まさに「そのとき」を表しているのである。

この点はしっかりと理解してもらいたい。というのも、生きもののルーツが地球に由来するものではないことを、もはや学校では教えてくれないからである。つまり、生命の由来は大宇宙にあるのであり、太陽、或いは無数の星々の作る天体系にあるのであって、これら無くしては、如何なる生命も屍と化すほかないのである。エネルギーの流れについて正しい知識を持つということが、今の私たちの時代には、ドグマや、無理解、或いは営利目的などによって科学の世界においても妨げられ、収益率の非常に高い化学薬品に頼る風潮を生み出してしまっている。秩序を作っているシステムそのものについて予め理解することなく、無秩序の原因を取り除くことはできない。

植物や動物、或いは人間を襲う病は多々あるが、原因はただ一つ。それまできちんと組織化されていた秩序が壊れてしまうということなのである！ 一貫性を生み出しているシステムそのものを正しく理解しなければ、無秩序の原因を知ることはできない。にもかかわらず、フランスでも、いや、特にフランスでと言った方がいいかもしれない、時代に先んじた炯眼な医者が多くが、物質界の限界を超えようとしたばかりに、医学界から追放されてしまった。ヒポクラテスの言葉が持つ意味の深さも、医学界のシンボルとして今なお使われているケリュケイオンの二重螺旋の杖¹⁰の意味も、もはや理解されていない。

残念ながら、農業の世界でも事情は同じである。優秀な農業エンジニアとして活躍するクロード・ブルギニョンですら、真実を語ろうとしたが故に、これまで所属していた INRA から厳しい処分を受けることとなった。ジャン・ピエール・ベルランも然り。彼もまた INRA に所属する農業エンジニアであるが、遺伝子組み換えの背後に潜む危険の大きさを語ろうとしたがために、今では常へのけ者扱いである。遺伝子を操作するということは、エネルギー界の限界を超えることであり、言葉を換えれば、地球上の生命の「鋳型」、エネルギー、或いは調整役に手を加えるということにもなるのである。

¹⁰ 二枚の小翼と二匹の蛇の飾りがあり、平和、雄弁術、医学、商業の象徴

命あるもの全てを司る生命の掟に対して組織されたあの恐ろしい経済界からの圧力がなければ、数々の過ちも繰り返されずに済んだかもしれないし、(化学薬剤に投資された)天文学的額のお金も使われずに済んだかもしれない。幸いなことに、少しずつではあるが、物理学者や、天文学者、医者、それにCNRS(国立科学研究所)の研究者の中にすら、地球に生命を育てているエネルギー体系への正しい理解に基づいた新しい叡智が根付き始めている。この新しい叡智が、途中で歪曲されることなく、そのまま世界中に広がっていけば、私たちは、医学や、農業、教育、そしてこの3つの分野の結果としての社会全体において、膨大な量の様々な問題から解放されることになるだろう。

ユークリッドの命題にもう一度立ち返ってみよう。「点」については既に理解されたことと思うが、ここから今度は「線」とは何かという問題へと発展していく。実は、「線」は「点」の連なりなのである。そして一本の「線」が複数になると、今度は空間の始まりとしての平面が生まれる。実はこの「線」についても、ユークリッドは興味深いことを語っている。即ち「線は幅を持たない長さである」と。この言葉は、もう一つの極性、即ち「非一空間」の働きを強調するものとして捉えることもできる。「非一空間」については、これまでの説明で、何を言わんとするのか少しずつ理解できるようになったのではないかと思う。そう、「線」とは「点」の連なりなのである。しかし、この「線」はまだ幅を持たない。こうして捉えていくことで、私たちは物質界がどのようにして出来上がっているのかという問題に、控えめな最初の一步を踏み入れることになるのだ!

古の時代の人たちは、私たちとは随分違った感性を持っていたものである。そしてその受容の仕方の、何と奥深いことか。さて次に、「線」から半径が生まれ、円、そして様々なものの形が派生してくることになるが、中でも、今日すっかり忘れ去られてしまった、プラトン立体と呼ばれる5つの正多面体からなる多角形は注目に値する。この多角形とは、4つの正三角形からなる四面体、6つの正方形からなる正六面体、8つの面を持つ正八面体、そして正十二面体、正二十面体であるが、シュタイナーはヘンリー・スピンダーに命じて、これらの立体についての研究を行わせた。プラトン立体は、更に立方体を二つ重ねることによって八角形、五角形を二つ重ねることによって十角形などなど、より複雑な形状を生み出すこともできるようになっている。

ではどうして、この多面体が重要な意味を持つのだろうか? 実は三次元空間に

生きるもの全てが、このプラトン立体の組み合わせによってできているのである。歴史学者たちの研究によると、人はこの事実をプラトンが取り上げるずっと以前から知っていたらしい。高価な科学機器が、私たち人間の直感的な感性を奪ってしまう遙か昔からである。つまり私たちを取り巻く命あるものの世界には、形を生む幾何学的な秩序が、此処、彼処に存在するのである。実際三角形、正方形、五角形、六角形、更にそれらが重なりあったり、混ざり合ったりしたものなど、様々な形がこの世には存在している。そしてこれらが交差しあうところに、地球のエネルギーが晶出し、或いは凝集し、原子が私たちの感覚に捉えられる物質として表出してくるのである。言い換えれば、この凝集点、晶出点においてこそ、求心エネルギーがその作用を働かせるということになる。

プラトン立体の端と端とを結び付けている「リズム」に応じて、単純な形が出来上がったり、星型の複雑なものが出来上がったりする。これらのプラトン立体は、それぞれの立体間に存在する原子の結びつきのレベルで、言い換えれば細胞分裂、或いは地球に生命が誕生しようとする中で、常に活発に作用している。この世には、五角形、六角形、正方形などなどの形をした編み目模様が、限りなく微小なレベルにおいても存在するのである。

プラトン立方体は、全て円と深い関係を持つが、それは何故かと言えば、立体を極限まで突きつめていくと、最終的には円、若しくは球になってしまうからである！かくして立方体は、言うなれば潜在的に、形を持つときに一度壊れてしまった単位を取り戻すが、一方で全体性との特別な結びつきをも持ち続けるのである¹¹。更に、この独特の幾何学的形状のお陰で、地球上の命あるものがバランスを取り続ける上で無くてはならない、貴重で、特別なエネルギーを、一つひとつの立方体がそれぞれ独自の方法、独自のスタイルで持つことにもなっている。立方体の持つエネルギーは、それぞれが独自の効果を発揮しつつ、私たちの周りを常に取り巻いているが、それを目にすることはないのである！

プラトン立方体の一つひとつが、実は対応する惑星の原型エネルギーを持っている。立方体は土星のエネルギーを、十二面体は火星、二十面体は金星、八面体は水星といった具合である。その複雑な仕組みについては、或いは、地球の

¹¹ 物質は形を持つことで個（ユニット、単位）を確立し、マクロコスモスから切り離される。しかし、私たちが生命を維持できるのは、エネルギー界（宇宙の総体）との繋がりがあからに他ならない。つまり私たち「生」は、意識しないながらもマクロコスモスとの絆を維持しつつ、ミクロコスモス界に存在することを意味するのである

生命の秩序を組織する強力なそのエネルギーについては、果ては発生学の世界で多くの例を認めることのできるその形状の変異・変転については、参考文献に名を記した文献を読んで頂きたいと思う。これらの立方体こそが、地球に生きる命あるものにとって、そのエネルギーの鍵を握るものであり、幾何学的に集約され、統合されたものなのである。また言い換えれば、生命の誕生に働きかけるエネルギーを「呼び出す合図」なのであり、絆であり、そしてまたアンテナでもあるのだ。かくして、アグリッパやレオナルド・ダ・ヴィンチなどの巨匠達は、自らの著作や芸術作品の中で、このエネルギーと人とがどのように関わっているかを表現した。

古の知識人たちは、人間の肉体が、実は惑星や天体のエネルギーの産物に他ならないということを、直線や角度と体の部分部分がどのように対応するかを示しながら解説している。角度や面の一つひとつ、或いは比率の違いが、それぞれ別のエネルギーと対応し、関係を持っているのである。そしてこれらの多様なエネルギーが、その総和として、人間の肉体という見事な「建造物」を作り上げているのである。

実際少し注意して見回すと、私たちの周りには、六角形、五角形、正方形、三角形のエネルギーの生み出した産物が数多く見られる。例えば、葉の形であったり、花の形であったり、或いは鉱物、果物を切ったときの形などなどがそうである。私たちは、常にこのエネルギー体系に取り囲まれて生きているのだが、ただ今となっては、もはやそれを認識することができずにいる。しかし、今こそもう一度、正しく、より具体的にこのシステムについて理解をする必要がある。私たちの周りで、或いは私たちの体の中で、そう、私たちの肉体を構成する原子の一つひとつ、細胞の一つひとつ、そして分子の一つひとつが上手く機能するにあたって、このエネルギー体系が常に働いているのである。気温や、気圧、光度、電磁力なども、エネルギーどうしの関係に影響を及ぼすが、この大きなエネルギー体系の中では地球はあくまでもその一部、マイクロコスモス（微視的宇宙）に過ぎない。そしてそのマイクロコスモスは、全体としてのマクロコスモス（巨視的宇宙）の収縮に過ぎないのである。

こうしたエネルギーに対する叡智は、ほぼ全ての古代文明の中に見とめることができる。実は、物質など本当は存在しない。それはエネルギーが重力によって濃縮され、電磁力によって収縮状態の中に閉じ込められた状態のことなのである。これをもう少し詩的に言えば、冬に着る厚手の衣類のようなものと言っ

ても良いかもしれない。夏に比べて重力が増している冬に必要な装い、それが物質の姿なのである。ところが現代では、遺伝子こそが、エネルギーの従順な召使いに過ぎない遺伝子こそが、生命を育むこのエネルギー体系の源であるということになっている！ ここでもまた、そしてより営利的な意図と共に、様々なアンバランス（不均衡）の兆候を巧みにはぐらかしつつ、その最も根本的な原因を無視しようとしているのである。

「形」の持つ面白さ、意味の深さは植物にだけ見出されるのではない。楽器にも、その背景に隠された重要な叡智を見出すことがある。例えばヴァイオリン。その形は、最も適した比率で作られることにより、ある特定の原型エネルギーと「調和、調律」するようにできている。そしてその効果により、本質的には振動体でしかないこの世界において、完璧な共鳴ケースとして機能するのである。つまるところ、「音」が「形」を生むと言ってもいいだろう。一枚の紙の上に撒かれた蹉跎の粉が、磁石によって様々な形を与えられるところを想像してもらえば分かりやすいかと思う。いずれも古代文明では良く知られていたことである。

ところで、実は、逆もまた真なり、「形」も「音」を生むのである。事実、様々な楽器が音を生み出している。大宇宙においてと同様、地球上では全てが作用と反作用なのである。先ほどの楽器の話しをより科学的に言えば、楽器の形が最適比率で作られているとき、放出される音波が最も一貫したものになるということである。形には音波を変える力があるのだ。金属でも同様、銅製のトランペットと銀製のトランペットでは音色が全く異なる。音楽家には良く知られたことである。

これまで見てきた「形」に対する新しいアプローチの仕方を、今度は更に拡大して、私たちを取り巻くもっと身近なものへと移していこう。例えば家具、天蓋のついたベッドの中には、完璧な眠りを「保証する」ための正当な方法で作られたものがあるし、お守りとも言われる印章の多くが、その多様な幾何学的模様によって、それぞれ異なるエネルギーと絆を持つよう作られていたのだった。形あるもの全ての背景に、実はエネルギー科学と呼ばれるものが存在するのである。

「形」の意味、更にはそれが私たちの体の中に密かに共鳴し、引き起こすものが何なのかということについては、実は広告業界では研究されており、消費者

の購買意欲をかき立てるのに利用されている。しかし私がこの本を通じて行いたいと思っているのは、葡萄栽培家や農業に携わるもの、そしてより広い意味では私たちの文化全体が、学校で教えられなくなってしまった様々な力、フォーースと意識的な絆を築くことができるよう、手助けしてやるということである。この絆が弱まってしまったことによる影響は深刻で、今日では、目に見える、そして触れることのできる物質のこののみが語られ、その背景にある特別なエネルギーについては目を向けられることがなくなってしまった。しかし、「形」について深く学ぼうとするならば、補完的に物事を捉えるよう努めなくてはならないのであって、言い換えれば、「もの」とその周りあるものの両方を見なくてはならないのである。表徴や形が直接何らかの作用を引き起こすわけではない。しかし、それらが呼び覚ますマトリックス、事物の根源がエネルギーの働きをもたらすのである。このことは、ゴシック様式の印章を見てもらえば良く理解されると思う。複数の印章が、全体として一つのイメージになるものの一部分を、それぞれ表象している。

とはいえ、注意しなくてはならないこともある。それは、過去を単純に繰り返してはならない、時間の中に留まってしまっはいけないということである。大宇宙の中では全てが動き、変化している。そして地球で活発に働いているエネルギーも、同じように変化・進展を続けているのである。例を挙げれば、ピラミッドが如何に素晴らしい建築物であるとはいえ、現代の人間はもはやそれに適してはいないということである。私たちは過去を生きた人々とは同じではないのだから。

プラトン立体を理解するための手掛かりともいえる短い一節を終えるにあたって、一つだけ心に留めておいて頂きたいことがある。それは、地球の太陽系における位置である。地球は、一年が（つまり公転周期が）地球より長い外惑星（火星、木星、土星など）と、一年が地球より短い内惑星（金星と水星）の間に位置している。プラトン立体も、そのエネルギーが最大限に発揮されるためには、ロシアの入れ子人形のように、順序良く配置されていなくてはならない。そうして始めて、調和の取れた、潜在性に富んだエネルギーの源となるのであり、人間を様々な痛みや苦しみから救ってくれる力となり得るのである。しかも、このときの救いは、最も根底からの救いとなるはずである。

古代に作られた大建造物は地球上の至るところに見られるが、どれも偉大なる叡智の痕跡を留めている。そしてこの叡智は、理解しようと努力しさえすれば、

必ずや大きな感動を私たちに与えてくれる。20世紀初頭にシュタイナーによって建設され、一度焼失した後コンクリートで再建されたゲーテナムと名付けられた建物¹²があるが、これもまた、円と五角形、対立エネルギー、そしてこれら全てを調和させる強いエネルギーを持った中線を基にしてできている。忘れてならないのは、力の対立が強ければ強いほど、逆にその力が調和に向かったとき、そこから生まれる救済効果は高いものになるということである。

ルドルフ・シュタイナーがこの建造物にもたらした重要な要素とは、形のメタモルフォーズ、つまり変容、言い換えれば、ある形から別の形への移行という概念であり、これは他でもない、芸術と科学とを結びつけようとしてのことであった。この建物は、言うなれば「建築発生物学」のようなものであり、言い換えれば、その場に生み出された命を持った有機建築物なのであり、訪ねてくる人に内面的な活動をもたらすものなのである。まず私たちは、これから訪ねようとする建物の形と、実際にそれを感じることによって、結びつきを持たなければならない。そして、「形になろう」と努める。形に「なる」ことによって、次の部屋へと移動しながら、その変容を共に生きることができるのである。

この様子は、種の成長と少し似ているかもしれない。種子もまた、幾つもの変容を繰り返しながら、肉体的に完成された植物となっていく。シュタイナーが示そうとしたのは、建築における重要な変異・変容だったのである。

これまでの説明で、古代の聖なる場所が全て、その細部に至るまで、極めて正確な幾何学の法則に対応していることがお分かり頂けたかと思う。何一つとして、偶然に出来上がったものはないのだ。私たちは、エネルギーと反エネルギー、浮力と反浮力の絶え間ない拮抗作用の中で生きているのであって、この関係は、引力と揚力が常に戦っている太陽系、そして大宇宙全体に共通のものでもある。古の建造物に使われている柱は、つまるところ、この対立する二つの力の交換の場なのであって、別の言い方をすれば、この場でこそ、地球と宇宙とが互いに結び合うのであり、或いは、一方から他方へと変容し合うのである。

この叡智は、既にドルメンやメンヒルの中で生かされているし、ゴシック建築の中にも極めてはっきりと認めることができる。例えば、教会の中央へと進むのに従って柱頭の先端にどのような彫刻が飾られているかを、注意深く観察し

¹² ドイツの作家、哲学者であるゲーテに因んで名付けられた建物。ドイツのパーゼル（或いはスイスのパール）近郊にあり、その独特の形状で知られている

てみるだけでも、このことは非常に良く理解できる。あの彫刻は、良く言われているような、単なる象徴的な装飾などではない。そうではなくて、今お話したようなエネルギーの変容を具体的に示したものである。今日一体誰が、このような技を成し遂げることができるだろう？

ここまで説明してきたことは、数や比率、そしてその背景にある惑星や天体の法則に基づいた底なしに深い叡智のほんの一端に過ぎないのだが、古の時代に建てられた聖なる建造物が、巨視的宇宙（マクロコスミック）のエネルギーを如何に正しく理解し、コントロールし、濃縮し、そして限られた特定の空間内に呼び寄せることができたかということを見せてくれたはずである。この時代、「relier（結び付ける）」から派生したと言われる「religion（宗教）」という言葉は、人を『「特殊なエネルギー浴」をさせてくれると言われているところに移す』という意味を持っていた。このエネルギー浴により、特別な作用を受けた結果、人はさほど一人であること、個としての自分を感じずに済んだということである。こうした特別な場所は、ビルマの寺院であれ、ラオスの寺院であれ、果てはエジプト、インドのものであれ、或いは、フランスのシャルトルや、ドイツ・ナンブルグの大聖堂、ブルターニュ地方のケルト文化の影響を受けた教会であれ、全て、それぞれが独自のエネルギーを持ち、質的に全く異なる雰囲気を作り出している。訪問者がここで実際に感じるのは、まさしく本物もエネルギー科学なのである。同じ効果を、方法は多少異なるものの、聖歌隊の歌声の中にもみとめることができる。音もまたヴァイブレーション、振動、響きであり、それが一つのものとしてまとまっていくのである。

このような建築学的叡智によって満たされた空間は、エネルギーレベルでも非常に豊かで、機能性だけを追及して作られている今日の物理的な空間とは大きく異なっている。奥深い叡智に欠けた単なる知識では、人々を救えるようなエネルギーの力を借りることは決してできない。それどころか、国の社会保険制度に赤字をもたらすようなものは、遅かれ早かれここに立ち返らざるを得なくなるはずである。

5-6. 倍音の法則

物質界の裏側で活発に働いているエネルギーの実態については、共鳴と倍音に関わる法則について説明することで話を終わりにしたいと思う。この二つの効果、共鳴と倍音こそが、独特の補強効果を持ったエネルギーのベクター、

つまり媒体なのであり、エネルギーが自らの枠組みを越えて、ある特定の場所に到達できるよう働きかけるものなのである。現代風に言えば、ある場所から他の場所への移動を可能にする「高速道路」とでもいったところだろうか。またそのお陰で、私たち人間も、(他の物質から切り離された)「個」としての重さ、隷属感から多少なりとも解放されることができるのである。音楽の中には、私たちの心を鎮めてくれるものもあるし、健康や植物の成長にも効果を発揮することが科学的に認められていることはご存知のことと思う。この場合、ものを形作るレベルと共鳴させれば良いだけなのである。

では共鳴と倍音について、より具体的に理解していくことにしよう。全く同じか、若しくは同等比率の音叉を二つ用意し、片方だけを鳴らしてみる。例えもう片方が数十メートル離れたところに置かれていても、やがてはこちらも全く同じ音で響きだす。たった一つの音叉が鳴り出すと、千、十万、千万もの音叉が時を経ずして響きだすのである。この背景には、強大な力を持つ科学の法則が存在しており、万が一悪用されれば、極めて危険な結果を招くことすら考えられる。そして、私たちの生きているこの理性を見失った社会では、それは決して考えられないことではない。

エネルギーを正しく扱うために求められるのは、まさしく良識なのであり、というのも、その扱い方一つによって、生か死か、両極端な結果を引き起こすことが可能だからである。原爆の悲惨な結末がそれを如実に示している。今日、エネルギー科学の分野には、防衛上の極秘事項に含まれる技術もあり、既に一国の天候や雨量、雲のでき具合をコントロールすることも可能だと言われている。この兵器は、複数の国が所有していると言われるが、つい最近では、警官が郊外で電波銃を持ち歩いているイラストを目にすることがあった。また市役所では、その地域を覆っている電波網の地図を見せてくれるよう頼むこともできる。これは主に 30m から 100m の長波に関するものだが、この種の電波は、ほとんど軍用に使われていることが多い。テレビ用に使われているものを除けば、どの周波数が、誰によって使われているか、私たちにわざわざ知らせてくれるなどということは決してない。この問題について論議することそのものが、政治的圧力により公式に禁じられているのである。

簡単に言えば、理解して欲しいことはただ一つ、音によって生み出される倍音の力を借りることで、他の振動源に耳を傾けるような場を作ることができるということである。言い換えれば、原型エネルギーでさえも、その生まれたとこ

るとは別の場所で共鳴させることができることになる。そのためには、角度、平面、特殊な比率などなど、この強力な、そして天空、天体へと広がるエネルギー放出の場に見合った要点を再現してやる必要がある。

逆に、例えばシャルトルで行われたように、その場のマイクロ波を記録し、復元するといったことでは効果はない。そんなことをしたところで、コピーを、つまり複製を作るだけに過ぎず、生きものを救う治療効果を期待することはできない。こういったことは、かつては良く知られていたことであり、ただ、その伝え方が今とは違っただけである。例えば長さの単位である「メートル」だが、これは長い間、地球の子午線の四分の一の千万分の一の長さで決められていた。ところがこの子午線の長さは決して一定ではないため、一世紀ほど前に、極半径を基にしたものに変更されることとなった。その時始めて、エジプトのクデと呼ばれる単位¹³が極半径の千万分の一に対応していることが分かったのである！ クデとか、プース¹⁴とか、それぞれの国で見られる、長い間秘密にされてきた「聖なる」長さが、どうして強い効果を生む比率と対応しているのか、皆さんには既にお分かりのことと思う。彼らはエネルギーの使い方を知っていたのである。

5-7. 使い方

さて、弦楽器では指で掴みながら弦を振動させるが、同じように、この比率を「振動させる」には、その振動する力を「動かし」、エネルギー的に共鳴させる何かを建物に「与えて」やらなければならない。それには一つ、若しくは複数の力が必要となるのだが、ここで始めて、先ほど説明したように、建物を造るために古代の人々が選んだ場所の特殊性や「異常さ」（電磁場、水の通過などなど）といったことが問題となってくる。人自身、鉱物や植物、動物界の上に立つものとして、様々なエネルギーを仲介するためのキーフォース（鍵となる力）の一つなのである。偉大なる土地は、偉大なる個性、時代に先んじた人間を呼び寄せる。これは葡萄栽培でも同じである。一般に知られている、いないは別として、この道の優れた人々が、進むべき方向を維持するために踏ん張っているのだ。にもかかわらず、素晴らしい葡萄畑が、無理解と無知によって、無残にも荒廃していく姿には、深い悲しみを覚えずにはいられない。

¹³ 肘から中指までの長さで、約 50 センチメートル

¹⁴ 長さの慣用単位、12 分の 1 ピエ、約 27.07 ミリに相当する

人間の声や、思考も、今では忘れられてしまっているが、実はやはり振動、ヴァイブレーションなのであり、行動や振舞い—こちらについては、近年オイリュトミー¹⁵と同様、高次の建造物に共鳴を引き起こす力を持っている。言うなれば、オーケストラの「乱れた音を調整する」第一ヴァイオリンのような役割を人間は持っているのである。確かシュタイナーが以前、語っていたと思うが、ギリシア建築の中では、エネルギーは自ら活発に働いている。

しかし一方、ゴシック建築の中では、エネルギーが「一つになり」、つまり「潜在的な力を持つ」ためには、人間の存在が不可欠なのだそうである。このとき、その場所は、一つ、若しくは複数の「母なる力」に応えて共鳴しているのであり、しかも現代の言葉でその力を受け取っているのである。さて、物質界に話しを移す前に、もう一度言うておこう、全てのものは、エネルギーでできているのであり、私たち人間でも計測することのできる様々な周波や波動を通して、情報を運んでいるのである。最も重要なのはこの点であり、過去に作られた建造物はそのことを承知した上で、利用していたに過ぎない。今日、その背後に大きな危険が存在していることも含め、この事実を理解する人の数が増えつつある。植物や動物、人間の成長は、詰まるところ非常に多くの共通点を持っている。ここでは、地球とその周りを取り巻く大気の中に存在する秩序だったエネルギーシステムからできた目には見えない建造物の働きによって、全てが生み出されているのである。

現在、地球上の百ヶ所ほどの地点で、天体や惑星を源とするエネルギーを感じることができるが、そのエネルギーの流れについて長い長い説明をここまで行ってきた。何故かという、バイオダイナミを实践する農業も、やり方こそ異なれ、これと非常に似ているからなのである。バイオダイナミは、それを实践する場所が、生きとし生けるものの掟、即ちマクロコスミック（巨視的宇宙）の法則を素直に受け取れるよう、手助けしてやる農法だからである。大宇宙の法則なくしては、地球は屍も同然になってしまうのだ。

5-8. 水

さて、この共鳴が、生きた組織の中でも起こるようにするためには、或いは生命の振動するエネルギーが同じく生きた組織の中に伝えられるようにするた

¹⁵ シュタイナーが創作した音楽や言葉を用いて行う身体表現) という科学的なアプローチが行われている

めには、水が重要な要素となる。「水なくして生命は存在しない」とは良く言われることだが、同様に「人間はその 85%が水でできている」という言葉も良く耳にする。しかしもしできることなら、共鳴体としての水の特別な役割、その機能こそを正しく理解して欲しいものである。生命体の体内における水分子の結びつきそのものが、実は、生命体が置かれる場所の電磁場を始めとするエネルギーの働きによって変化するのである。更に突きつめて言えば、ラコヴスキーが自身の著書、「生命の起源」の中で語っていたように、細胞は、発信体であると同時に受容体であるような組織として捉えることもできる。

因みに、ラコヴスキーのこの本は、科学が、まだ経済の道具として利用されることのなかった時代に、学院のアールソンヴァールから献辞を贈られている。20 世紀初頭のことである。ベンヴェニストが「水の記憶」と呼んだのも、詰まるところ、このことではなかったのだろうか。水は、物質界において、振動する生命の、或いはそれなくしては私たちが生きていくことすらできない地球と宇宙のリズムの中継をするものなのである。このことを正しく理解すれば、貯水塔の上に携帯電話のアンテナを設置することが無害だと主張するような科学者の愚かな無責任さも理解できるはずである。実際には、このアンテナは、私たちの体のバランスにとって非常に有害なエネルギー（900 から 1,800 ギガヘルツ）で、絶え間なく水に振動を与え続けているのである。

このようなことを行えば、かつて奇跡を起こすと言われ、今日までその一部が残っているような水源や泉に全く逆の効果を及ぼすことになってしまうし、その説明は簡単につく。水が地下を伝わる時の早さ、通過する場所に特有の地電流や磁力、そして地質の違い—それだけではなく、地形や、その形状とも密接に関わっている—などに応じて、また負荷として持っているエネルギーにも比例して、水の中には、私たちの臓器一つひとつに流れている体液と非常に良く似た「スペクトル周波数」を持つものがある。

だからこそ、昔から病気を治す力があると言われた水、現代の言葉で言えば肝臓や、腎臓、心臓などなどにそれぞれ「効果のある」水が存在したのである。こうした水は、弱ったり、疲れた臓器に、必要としている命のリズムを復活させていたのだ。言い換えれば、衰弱してしまった臓器と、母なる力、原型エネルギーとの間にあった絆を、もう一度結び直す働きをしていたのである。この世ではあらゆるものが振動体なのだから、これは当然過ぎるほど当然なことだった。ヴァイブレーション、つまり波動なくしてこの世に生命は存在しない。

残念ながら、この最も肝心なことが現代では十分に取り上げられてはいないのである。しかも人は、日々、波動を台無しにし続けている。地球の周りを取り巻いていたり、貫通したりする周波数や波動が変化するという事は、命あるものの発現の仕方を換え、引いては、人そのものを変えることへとつながる。もちろん、人の健康を疲弊させてしまうことにもなるのだ。にもかかわらず、この問題はタブーとされ、公に取り上げられることは決してない。何故なのか。エネルギーレベルでの汚染に関係していると思われる健康被害を救済しようとすれば、国家財政はまさに、破綻してしまうところまできているからである。国家が国民一人ひとりの総体として存在するものであることを考えれば、つまり、私たちの生活そのものが破綻することにもなるのだ！ だからこそ、あの「悪玉と言われる」CO₂に罪を被せ、物質レベルだけでの汚染を糾弾することで満足するしかないのである！

つまり以上のようなわけで、教会の中には、太陽の動きに従って、春分、秋分、或いは夏至や冬至といった特定の日になると、全てを熟知した建築家によって正しく配置された扉が開き、人にとって、つまり人間の健康にとって非常に効果の高いある種のエネルギーが顕在化するのである。ここで得られるエネルギーは、不足しているものを補い、調和をもたらすような、そんな力に満ちたものである。中世の終わりまでは、このような現象が、巡礼をする際に、例えばシャルトルの大聖堂のようなところでは良く見られたものだった。しかしその後、少しずつこうした知識は人々から忘れ去られ、もはや期待される効果を持たなくなった儀式、祭典のみが残ったのである。古代文明の有していた天文学に関する知識は、非常にレベルの高いものだったし、彼らの多くは、実際に、エネルギーや音の持つ効力を体で感じていたのである。現在ではほとんどいなくなってしまうが、年配の魔女の中には、自分の意識と強い結びつきを持つある特定の音響を使って、地下の水の流れを変えることさえできるものがいた。この力は、正に天性のものだが、そんな力を持った人間も今ではほとんど見かけることがなくなった。

5-9. 扉の位置を選ぶ

ヨーロッパでは Templar 騎士団によって作られた小さな教会を見かけることがあるが、ここでは、一年に一回、太陽が小さな「穴」を通るように作られて

いる。イタリア、モンテシエーピのロトンダ¹⁶などがそうである。この小窓から射し込む光が、ある一点に集まり、エネルギーを顕在化させるのである。光もまた波長であり、反射波光と屈折波光の2種類があることは良くご存知のことと思う。全てが波動の世界に属しているのだ。宗教を問わず、聖なる場所と呼ばれる場所では、同様のエネルギーに向かう扉やその集約、ある一定の軸との平行関係、或いはステンドグラスに使われる特別な色の選択一色もまたそれぞれが異なる波長を持っている一、などといった共通の規則が見られる。彫像の配置に関しても、また同様にこのエネルギー交換の一端を担わされていることが多く、それが地面を向いていたり、天空を向いていたり、或いは他の一点を指している腕の動きによって強調され、建物を造った人間がどのような絆を生み出そうとしていたかを教えてくれるのである。場合によっては、全く共鳴しない建物になっていたり、星座の位置が変えられていたり¹⁷（春分の歳差）、もっと簡単に、地下に手が加えられていたりする（地電流、地下水の流れなど）。

ただ良いことばかりではない。（エネルギーレベルが）高次の場所には、時に、私たち命あるものに害をもたらすようなポイントも存在するのだ。エジプトの寺院でも見かけることがあるし、ヨーロッパでは、棺用の「死者の石」と呼ばれる場所がそうである。ここで見られるエネルギーは、生まれ変わりをもたらす力ではなく、霊肉分離（遠心分離力、対立極性）をもたらす力なのである。にもかかわらず、それとは知らず、最近では平気で椅子などを置いてしまっている！　ここまで極端ではないにしても、私たちのセラー（酒蔵）の中にも、ワインが独特の美味しさを持って熟成していくのを妨げる場所が存在する。中には、その悪しき力を抑えることのできる人もいるが、そうでないものにとっては、その場に足を踏み入れるのは大変危険なことである。ポジティブな力とネガティブな力、そして偽りの力が、ここでは混沌としているからである。

こうして学んでくると、古代の偉大なる建築家達が、また文学や他の科学に携わるものたちが、もちろん農業も含めてだが、どれほど物質とは対極にあるものに対して深い理解を示していたかということが分かるはずである。物質の対極にあるもの、即ち物質界に「形」を与えているもの、つまり宇宙全体を支配するエネルギーなくして、地球に生命など誕生することはなかったはずなのである。この時代には、数の法則と呼ばれるものによって、科学の様々な分野がお互い結びついていた。そして、この法則こそが、物質界への扉を開くために

¹⁶ ドーム状の屋根を持つ円形の建物

¹⁷ 春分の位置が1年間に約50秒3逆行する現象

一というのも、分割するのは数に他ならないのだから一、毎回独特の違ったやり方で、全体（即ち、マクロコスモス）を分かち合っていたのである¹⁸。「波長」は全て、数である。化学もまた、完全に数の法則に支配されている。そしてエネルギーも、原子も、全てが波長でできている！ この点については、反論の余地などないはずだ。非常に古い寺院や教会の入り口に、時に「数学者でないもの、入るべからず」という文章が書かれていることがあるが、一見謎解きのようにも思われるこの文章の真意は、実はそういうことだったのである。

全てが数と比率の法則の中に存在する。今ではあらゆる食品や医薬品についているバーコードだが、実はこれがどれほど有害なものなのか、ここまでの説明で少しはお判り頂けたのではないかと思う。物質を結晶化させてみると、更に具体的に明らかになる。バーコードをつけることによって、食品は、6を3回繰り返すというリズムを持つことになるのだが、このリズムは、実は私たちが本来必要としているものの対極に位置するものなのである。どうしてこのリズムが選ばれることになったのだろうか？ 同様の幾何学の掟については、アダムとワイシャーも共著で本を書いており、二人はその中で、ルドルフ・シュタイナーが4次元について示唆したことを、植物界に応用して話しを展開している。このテーマについては、ギ・チウーの名前も忘れてはならないだろう。彼は各地でセミナーを開催しながら、謙虚に、しかし炯眼にも、現代科学と象徴主義とを結びつけてみせた。錬金術、これもまた同様である。地電流や重力といった地球を支配する法則から逃れ、過去や未来も含めた、私たちの惑星の進化を支配している天空・宇宙の法則へと飛翔すること、これこそが真の意味での錬金術だったのである。

5-10. 形とその特殊なエネルギー

ここまで随分長い説明を繰り返してきたが、地球に命を育むものの実態について、即ち言葉を換えれば植物の、或いは葡萄が行っている作業、その役割、何が葡萄の生長を助け、何が妨げるのかについて、より良く、そしてより深く理解するためには、どうしてもこの長い説明が必要だった。一人ひとりの人間が、本物の進歩と、見せかけのそれとの違いを、自らきちんと把握しなくてはなら

¹⁸ この点についてジョリー氏は面白い例を引いてくれた。パンを誰かと二人で食べるとする。一つ（全体、総体）を二つに分けることで、物質レベルでは量は半分になるが、エネルギーは形とは異なる形で共有されることになる。必ずしも半分になるわけではない。これを応用して黄金比率のような数の芸術ができあがったとのことである

ないのであり、それは取りも直さず、偽物ほど、巧みに秩序だった組織を通して、立派な外見を装いつつ、私たちの前に姿を現すことが多いからである！

情緒的だったり、信じるとか信じないといったレベルから、エネルギー界へ、つまりバイオダイナミの世界へと、今こそ歩を進めなくてはならない。そのバイオダイナミについて、いよいよこれから詳しい説明をしていきたいと思うが、信頼するに足る科学を実践する新世代の科学者たちによって創られた、生まれたてのニューサイエンスの世界への道を開くためには、まさしく、このバイオダイナミこそが必要なのである。本物のエネルギー科学と呼べるものが、今まさに誕生しようとしている。

これら全てが、ある特定の形や、比率、そしてその二つが密接に関わりあっているエネルギーに対して私たちが何を求めることができるのか、それを理解するのに多に役立つはずである。一言で言えば、形や、素材といったものは、分子の結びつきに様々な作用を及ぼすのである。だからこそ、かつては、それぞれの形がある特定の働きや機能を持っていた。一つ例を挙げれば、古くから使われている陶器の紅茶のポットがそうである。この形はそのままワインのカラフとしても使われているが、それは取りも直さず、形が味に作用するからなのである。味に作用するとは、言い換えれば、食べ物が「開いたり」「閉じたり」（右巻きか、左巻きかの違いで結局は同じことだが）することを意味する。同じことが食べ物の調理についても言える。かつては銅製の鍋の打ち出しの仕方についてもある技術があって、そのやり方如何によって、中で調理する食べ物の質をどれほど引き出すことができるか、そこに大きな差が生じたということである。デカルト的な発想しかできない人々にとっては、まるで信じられないことかもしれない。

しかし現代の科学で検証してみても、銅の打ち出しの仕方を変えることで、分子と分子の結び目が、正方形から五角形へと変化し、従って調理される食べ物への影響も異なってくるのが明らかになった。ここで再び、プラトン立体とその働きが関わっているのに気付かれたらう！ もちろん、これらの立体全てが味に何らかの作用を及ぼす。ここにきてようやく、私たちの科学も、日々の生活にひっそりと影響を与え続けている質的世界との関係に気が付き始めたというわけである。かくして、ある癌の研究グループが（2007年5月のル・モンド紙に掲載）、「細胞の癌化のプロセスには、DNAの単純な変異だけではなく、そのDNAを取り巻く環境の条件が大きく関わっている。細胞の癌化は、DNA

と RNA が、遺伝情報全体をコントロールしている規則を守らなくなったときに発生する」という発表を行うに至った。科学がその根本から、素晴らしい進歩をしたと言える。様々な添加物や、化学薬品をこれからも永く使っていきたいと考えているものたちにとって、この発表は大きなパニックをもたらすものだったはずである。

かの有名なパスツール自身も、水を保存するのに、どの形の容器が最も適しているか様々な実験を行っている。ある形のものでは劣化はほとんど起らなかったが、別の形では非常に早く変質してしまった。形状によって、呼び込まれた力、エネルギーに違いがあったのである。調理に使われる容器の形、そして素材がどのような意味を持っているか、このパスツールの行った実験からもお分かり頂けるはずである。

ワインについても、セラーとか、樽とか、或いはアンフォラ（酒壺）について語るときには、まず何よりも先に、その形状、垂直状態と水平状態との関係、比率、それぞれの角度の関係に注目しなくてはならないのであって、外見の多様な美しさや素材といったもののみには拘ってはならないのである。例えば鉱物の切断面や、もっと分かりやすいところでは、六角形のエネルギーを受けてできた雪の結晶—プラトン立体であれば当然の結果だが—を観察すると、かつて7つの基本形、言い換えると7つの惑星型に分類されていた、異なるエネルギーの働きを目にすることができる。そしてそのそれぞれのエネルギーが、かくも多様な「もの形」、自然の創造物を生み出していたのである。そしてこれらの基本形と呼ばれるものは、人間が人工的に結晶を合成してしまった段階で、即ち、巨視的宇宙（マクロコスモス）から、言い換えると生命の母体から身を引き離してしまった段階で、姿を消してしまうのである。

このことはしっかりと記憶に留めておいてもらいたい。というのも、病気を治療する際も同様、合成された化学薬品と、天然由来の薬とでは、含まれているエネルギーが全く違うからである。形状クロマトグラフィーという機器を使って観てみると、そこには大きな違いがあることが明らかになる。同じことが音楽、或いは音楽療法についても言える。人に心地よさを与えたり、或いは病を治療するためには、ある形と素材から発せられた本物のヴァイブレーション、波動が必要だからである。合成映像の場合も然り。写されたイメージからは、もはや本物の光の波動など決して発せられることはないのだから！

雪の結晶の華麗で緻密な美しさを見ていると、それを生み出した「エネルギーの型」と呼ばれるものに興味を持たざるを得ない。エネルギーの型とは、言い換えれば、様々な反エネルギー、即ち造型エネルギー—二つは同じものである—からの素晴らしい指令なのであり、それが、物質としての形が与えられる（即ち、この世に命をもって生まれ出ずる）際に、華麗な美しさと際立った正確さをもって、様々なところで対立し合っているのである。

アジア人の中には、風景を眺めると言って、「無」の世界を見る人々がいるそうだが、その理由もここにある。彼らは風景そのものではなく、それを生み出したエネルギーを堪能しようとしているのである。ここまでの説明で、形の概念と、それと密接に結びついているエネルギーとのつながりがご理解頂けたらどうか。

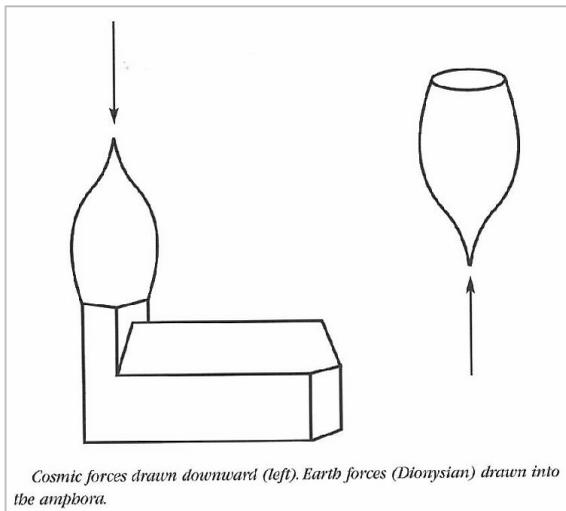
理想を言えば、私たちがワインについて学ぶときと同様、どうしたらある場所に特有のエネルギーを味わうことができるかということ、子供達に教えるべきだと思う。重力に逆らう力がどういった効果を持つのか（私たち自身、つま先から頭に至る一つの「建造物」であることを忘れてはならない）、或いは、私たちの気持ちを鎮めてくれる力がどのようなものなのか、ということを実際に感じてみようとするのである。その上で、生活している場所の形の違いによって、或いは食べ物の違いによって、私たちの創造性や、心理状態がどのように反応するのか、更には私たちの気分や気質—この二つも似たようなものである—にどのような影響を与えるのかを感覚的に理解するようにしてみる。フランス語では、「気分、気質、体液」は同じ単語を使うが、これも決して偶然そうなのではない。さて、もうお分かり頂けたことと思うが、私たちは、太陽の力、エネルギーが支配する場所を選んで、生活したり、睡眠をとったり—寝ているときは、自分を守る力が一時的に消えてしまっている—しなくてはならない。もちろん例外はあって、例えばシト一派の僧院などは、意図的に「地球の」エネルギーと強く結びついた場所を選んで作られている。そうすることによって、人が、自分の思考や意思、集中力によって、自分の外にある太陽エネルギーの一部となり、自身の内部にそのエネルギーを生み出すことができるようにするのである。しかし、その実現には、絶え間ない努力が要求されることは言うまでもない。

そうしたわけで私たちは、一つひとつの形が、「造形の波動」と呼ばれるものによって—それは毎回違った波形を持っている—、日々私たちの周りに創りだ

しているエネルギーをもう一度見つけたすよう努めなければならないのであって、そのエネルギーがそれぞれに固有の質的な効果を生み出していることを理解しなくてはならない。形にはそれぞれ特有のエネルギーがあり、古代の人々は、生命の法則と絶えず競合している自分たちの住まいの地理的な位置に応じて、ワインも含め、日々食するものにそのエネルギーを適応させていた。

どの形がどの産物に適しているのか？ どのような材質を使わなければならないのか？ それらはどのようなエネルギー効果を持っているのか？ 人智の背後でどのようなつながりを持っているのか？ 正しい「形」を手に入れるためには、こうした問いかけに答えられる十分な知識が必要なのであり、教会の鐘の響きもまた然りである。調理に銅製の器具を使った方が良いというのは、銅という物質がその背景に金星という惑星を持ち、その支配星の影響でどんなにささやかな熱の変化も敏感に感じとることができるからなのである。こうした「形」に対する考え方は、建築の分野でも家を作るときに考慮されていたことであり、その痕跡は今でも目にするところがある。

例えば、家の下を太陽の運動とは逆方向、つまり西から東へと水が流れていたとする。これは、命あるものには非常に悪い影響をもたらすものだが、そのような場合、一部屋だけにでも、地下にアーチ型天井—これも「形」の一つである—を作ってやる。そうするとエネルギーの流れが矯正され、上階に健康な生命が育まれるようになるのである。キリスト教の大聖堂は全て、地下に複数の



水の流れを有しているが、実はそれらが丁度交差するところの真上に祭壇が奉られ、更にはその上にはもちろん、アーチ状のドームが作られているのである。この水の流れから発せられるネガティブな作用（つまりマイナス効果）は、上に作られたアーチ型天井によって反射され、結果として二つのマイナス要素がぶつかりあう

ことで、ポジティブ（つまりプラス効果）に変換されるのである。大聖堂や教会の下を流れている水を浄化し治水工事してしまうということは、そのエネルギー機能を破壊することにつながる。

これまで話してきたことを、今度は葡萄栽培に置きかえて考えてみよう。目には見えないが、しかし確かに実際に存在している様々なエネルギー、これらは全て葡萄にも多種多様な作用を及ぼしているのである。居心地の良い場所に永く居過ぎると、重篤な病に陥ることがある。葡萄も同じである。もし、セラーが葡萄の熟成に「不適切な」場所であれば、最終的にはワインの味を台無しにしてしまう添加物や化学薬品に頼らざるを得なくなる。何故と言え、命あるものを統べる法則が、無知、無理解の中で日々大きくなる過剰な地のエネルギーによって、歪められ、損なわれてしまうからである。この現象は、場合によっては僅か数平方メートルしかないような狭い範囲でも起り得ることで、その場合、葡萄の発酵を助けるために、上澄み果汁を隣の樽から足してやったり、澱引きを繰り返したりして、ようやく本来の素直な味わい取り戻すことができるのである。

しかし逆に、古の人々の叡智と技術を駆使して作られた古いセラーでは、例え果汁の質がアンバランスであったとしても、それを「帳消しにしたり」、若しくはそこに調和を取り戻させたりという効果が期待できる。しかも、誰も、それがセラーそのものの力だとは気付かない。現代でも、これと同じような力を持った人がおり、その効力を正しく認識した上で、ワインの質を改良することができるし、また別の力を持った人達は、知らないうちに私たちが傷つけてしまった「場のエネルギー」を治療し、その力を取り戻させることができる。このテーマについては、生命の法則にこだわる栽培家ならば、まだまだ多くの逸話を知っているはずである。

6. 波動汚染

近年、高額な投資をして作られた素晴らしいセラー（ワイン用酒蔵）を目にするようになった。しかし、エネルギーレベルで見ると、こうした贅沢も実は馬鹿げたことでしかない。電波による汚染ということに限っても、つまり電気コードや、例え消えていても電球に触れるだけで—コンクリートも含めて—、1

秒間に 50 回、60 回という振動を受けることになる電気周波数のもたらす汚染だが、家屋や建物に激しいエネルギーの揺さぶりをかけるような、そんな深刻な状況に私たちは陥っているのである！

電磁場のうち、電気に関する部分は、(電線を通したり、電柱を建てる)土地の正しい使い方によって比較的簡単に問題を解決することができるが(とはいえ、このままであれば数年のうちに事態は更に悪化するだろう)、一方、磁力に関しては、扱い難い性格のものだけに、一度間違いを犯すと、もはや制御するのは非常に難しくなってしまう。かつてセラーの中では、低電流(25 ボルト)か直流電流しか使わなかったものだ。哀れなのは酵母菌である。この危惧的な状況に勇敢に立ち向かっていかななくてはならないのだから。そして結局、こうした現状の全てが、テクノロジーの名の下に生み出される化学薬剤に依存する体制を助長しているのである。

ワイン愛好家の皆さんにも、カーヴに眠る愛するワインのために、この問題については是非、深く考えてもらいたいものである。特に、ワイン用の冷蔵庫には要注意。中には 50/60 ヘルツで磁気を発し続けるものがある！ 更に電気感知器を買うときも注意して選んで欲しい。消費者の懸念を晴らすために、意図的に数値が実際より低く出るよう、感度を抑えてあるものがあるからだ。またセラーに金属が多く使われているのも良くない。電波が飽和状態になっている現在の状況では、生きている本物のワインにとって好ましくないリズムが、金属と共鳴することで生み出されてしまうからである。本来、年月と共にゆっくりと進んでいく熟成が、大きく変わってしまう可能性もある……。

6-1. 大気中におけるエネルギーの混乱

そう、現在の状況は、以前に比べて遥かに複雑な様相を呈している。それは取りも直さず人間が、様々な波長や周波数で、地球や、自分たちを取り巻く環境を覆い尽くしてしまったからに他ならない。しかも、私たちはこの波長や周波数が、地球に命を育ててくれた素晴らしい生命体系にどのような影響を与えるかなど、全く省みることが無かったのである！

太陽系からの情報は、トラックや労働者によって地球に運ばれてくるのではないのだ。様々な波長や波動として、それぞれ、異なる働きと機能を持って地上に届けられる。便利さのために作られる様々な波動で大気を飽和状態に陥れて

しまうということは、かつてケプラーが「球体の音楽」と呼んだもの、即ち、この地球に命を育ててきた調和のとれたエネルギー体系を大きく変えてしまうことにつながるのである。この体系なくして、地球は屍も同然。それを理解しなければ、結局は、気候変動を引き起こすことにもなり、人類、そしてやがては、それも予想より遥かに早い時期に、極性の変動ということへつながっていくだろう！

実際、極の移動は、地球が疲弊したときに起こるのである。これが現実のこととなれば、どんなに甚大な被害もたらされることか、容易に想像できるはずである！ 科学者たちは、既にこれまで 100 回から 300 回の一予測数値にはバラつきがある一磁気的な極転移が起こっていたはずだと見積もっている。実際に極転移が起こると、地球に生命を育てている秩序全体が（気候、海流、種の適応状態などなど）一度白紙の状態に戻され、全く別の形になってしまうのである。現在、地球生物学では、地電流の移動や滑動作用を観測しているが、この現象は特に、エネルギー汚染のひどい大都市部で顕著だということである。

もう一つ理解しなくてはならないことは、地震というものは、これまで言われてきたように、単純に二つのプレートがぶつかり合うことによって起こるのではないということ。人の微笑みも、上下二つの唇の単純な重なり合いで生まれるのではない！ それと同じ原理である。私たちが最も興味を惹かれるのは、微笑むために唇を重ね緊張させようとしている人が誰かということなのであり、言い換えれば、ある時、ある特定の場所に地震を引き起こすメカニズムそのものなのである。この点の研究が更に進歩するためには、巨視的宇宙観と宇宙全体を支配するエネルギー体系への知識が必要不可欠である！ 今こそ、現在の、この状態を野放しにしていたらどうなるのか、また、地球を形作っている「生命体系」が自らこの波動汚染の問題を解決する力を持っているのだということ、理解しなくてはならないのだ。中には笑う人がいるかもしれない。しかし今を逃すと手遅れになってしまうことは間違いない。

現在でもなお、非常に多くの人々が、生命は物質から生まれるというドグマに囚われてしまっている。しかし事実は逆である。地球とその引力のエネルギーが、自らの活動領域に入ってくるものを高密度化しているだけなのである。これほど単純なことではない。土が植物を作るのではなく、植物が、目に見えないエネルギーの密度を高めながら、土と堆肥を作り上げていくのである。こうしたエネルギー界のことや、エネルギー界を作っている数え切れないほどの波動、

周波数について正しく理解していないと、近い将来、私たちは非常に危険な状況に陥ることになるだろう。幾つもの裁判が起こされ、アスベストやウイルス感染した血液製剤などの問題が、悲劇的な結末をもたらすことになるはずである。

命あるものの生物としての活動によって作り出されるのは、互いに干渉し合い、影響し合う数多くの作用である。地球の周りを取り巻く周波数や波動が変われば、生命を育てているエネルギーの発現の仕方も違ってくる。癌という病を見れば一目瞭然である。例えば人の耳元で、一秒間に9億から18億回もの電波振動を与えたとしよう。それが脳細胞一細胞独自のリズムを持っているはずだ。一の性質や、その受容性に何の影響も与えないということがあり得るだろうか？ この実験は、実際に行われているのだが、最終結果が出されないまま保留にされており、再実験を行うための予算は、再現性がないということを証明するための新しい手順の実験を行うために使われてしまっている。つまり、実験結果が出ないことで、一時的とはいえ、この恐ろしい現実を私たちは知らずに済むわけである。経済優先の法則によって、毎年少しずつ私たちの生活は蝕まれ、既にもはや後戻りは許されないというところまで来てしまっているのだ。語るに辛いところだが、私たちの進んでいる道が、実は袋小路だということが段々明らかになっている。つまりこれが、私たちの生きている時代の姿なのである。保険会社も、電波や波動による被害を補償してくれるところはない。ご存知だったでしょうか？ 利益を生むことには敏感なはずの彼らに、どうして新しい保険を作らないのか聞いてみたいものだ！

前章で詳しく述べたことだが、互いに密接に影響し合っている「形」と「エネルギー」について正しく理解すると、ワインの樽についての理解も多いに深めることができる。ワイン樽はどこをとっても弧を描いているような筒状の形をしている。この樽の中に入ってみる。大人であれば600リットルの大樽の方がより快適かもしれない。そうすると、何とも幸せな気分を味わうことができる。ディオニソスは決して馬鹿ではなかった！ 人間ほど知性に惑わされることのない動物は、この樽の力をより敏感に感じることができる。例えば犬。それまでのねぐらを捨てて、さっさと樽の中に潜り込むと、迷わず終の棲家にしてしまう。鳥たちも、四角い巣は作らない！ 卵は丸いし、蜂の巣の穴も四角いものなど存在しない。動物の世界を観察し、彼らの作る形に注意してみると、実はプラトン立体の効果が多いに活用されていることが分かる。蜂の巣は五角形、ヒトデは六角形、原始的な生きものの中には三角形をしたものが多く見ら

れる。動植物それぞれの種が、ある特定の形とつながりを持っており、それが結局は、ある特定のエネルギーの影響を受けるということにつながっているのである。だからこそ、医薬品の中にも、動物由来のものが多く存在するわけである。

ではワインには、一体どんな形が適しているのだろうか？ ワインが生まれるとき、一体どのようなエネルギーを最も必要とするのだろうか？ 「生命の階級」と呼ばれるものの中で、ワインはどこに位置づけられるのだろうか？ これらの問いかけに対しては、各自が自分の納得のいく答えを見つけて欲しい。私たちは欲しいもの全てを手に入れることはできないが、努力する気持ちさえあれば、知りたいこと全てを学ぶことはできる！

その時はまず、今までとは違った方法で学ぶことである。昔の人がやっていたように、一般的な視点、全体的な視野を持って取り掛かり、その後で科学の分野とか別の分野とかいった具合に、より専門的な研究へと進むのである。細かく分岐する前に、全ての問題はお互いに関わり合っているのだから。例えば、54度という急な傾斜の屋根を持つ古い家があるが、この角度は5つの先端を持つ星型のそれと一致し、更に、この五角形は5つに先の別れた葡萄の葉へとつながってくる！ つまりどれもプラトン立体と関わっているのである。こうして色んなもの形状を見てくると、アンフォラを逆さにしたような形をした教会の屋根が、どのようなエネルギーを呼び集めことができるのか、理解できるようになるはずである。このアンフォラは、前章でも触れたが、樽とはまた違った意味でワインにとって居心地の良い空間を作ってくれるフォルムなのである！ しかしアンフォラは、その形に与えられた役割を全うするためには、本来、土の中に埋められる必要がある。つまり、地球の電磁場の中に浸っていなければ効果を発揮し難いのである。

では、どのようにすれば、他の方法でエネルギーを受け取ることができるのだろうか？ グルジアの人達は、今でもその方法を知っている。地下の世界にエネルギーを求めるか、それとも地上の世界に求めるかでは、関わってくる法則は全く異なる。従ってワインに対する影響も同じではない。この知恵をもう一度活用して、何を、どのように、どこに、そしてどんな素材を使って作るべきなのかを正しく選択しなければならないのだ。人の創造性は、何にも先んじて、まず地球と人間とを統べる法則を理解することから生まれなければならないのであって、それなくして創造は、野蛮で、意味のない、且つ冷淡で、結果的

に人に対して非常にネガティブな、場合によっては危険ですらあるような作用しかもたらさないものになってしまう。

更にもう一つ十分に理解しなくてはならないのは、天体としての太陽のことであり、その性質、動き、地球の様々な場所に及ぼす影響である。例えば、夏至や冬至といった一年でも特別な日に、太陽がどの地点から昇り、どこに沈むのかといったことはきちんと把握しておく必要がある。何故なら夏至は、太陽の力が引力の法則に勝利を収める日なのであり、冬至はその逆だからである。家の基礎の形も、2、3世紀前まではこうした知恵を元に決められていた。つまり、緯度の高さに応じて異なっていたのである。南に行けば行くほど、つまり緯度が低くなればなるほど、その形は横長の平たい長方形になり（端の線は赤道と直角に交わるように決められる）、逆に北に行けば行くほど、つまり緯度が高くなればなるほど、南北に縦長の長方形となっていたのである。フランス北部地方では、ほとんど真四角になっている。

どうしてこのような話しをするかという、ワインの樽についても、同様の、緯度によって異なる形の持つエネルギーに関する知恵が活かされているからである。具体的に言うと、例えばポルト地方では、ブルゴーニュ地方で使われている樽より、遥かに縦長のものが使われている。つまりワインも、場所によって異なるエネルギーの状態と調和しながら、育まれていたのである。こうしたエネルギーに関する知恵は、かつてはただ単に頭で理解されるだけでなく、人々によって実感されるものだった。つまり、改めて説明する必要などないものだったのである。

エネルギーを最も効果的に取り込むように作られた容器の形状ということについては、ワインに限らず、牛乳、食用油、水などにも使われており、中に入れられる産物が、最も良い形でエネルギーと調和できるように工夫されていた。保存状態を改善する効果もあったはずである（同じ知恵は、古代の衣装にもみとめることができる）。

食物を永く保存できるか否かは、エネルギーとの整合性に大きく左右され、そのエネルギーは、それを呼び込むための容器の形と素材に深い関わりを持つのである。

私たちが物質界と結びつけ、同時にまた、この世に生命をもたらすエネルギー界から引き離してしまっているのは、詰まるところ私たちの知覚神経の働きに

過ぎない。私たちの教育システムでは、一世紀ほど前から、脳の司る世界を統べる法則のみしか、教えることがなくなってしまっている。しかし以前は逆だった。重要なのはエネルギーの世界を統べる法則だったのである。今日早急に行わなくてはならないのは、(物質界とエネルギー界に関わる) これら二つの知恵を結びつけ、科学の大部分が陥っているドグマに支配された袋小路から抜け出すことである。これまで物質については、労を厭わぬ作業によって数多くの立派な発見がなされてきたが、今度はそれをもっと広い視野の中で、言い換えると物質という様態が、実はこの世界のほんの一部でしかないという新しい立ち位置に立って、捉え直していかななくてはならないのである。

そのためにはまず、人間の五感が、私たちが周りから引き離す働きをしているということを自覚しなくてはならない。何故なら、周りの世界と自分自身とを物理的に区別する「個」の意識を呼び覚ますために、知覚体系は存在しているからである。個の物理的レベルでは極めて当たり前のことでも、エネルギーレベルではそうではないということはあるし、それは、ここでは様々なインパルスが、「個」という枠組みを越えて周囲のもの全てと互いに干渉し合っているからである。このことを理解するためには、幼い子供を良く観察してみることである。小さい子は、まだ完全に地球を統べる法則に身を委ねきっていないので、物質界の背後にあるエネルギー界の姿を見抜く力を持っている。彼らの澄んだ目が、そのことを如実に語っている。くどいようだが、私たちの知覚体系そのものが、「個」というものを形作る一方で、エネルギー界への扉を見えなくしてしまっているのである。子供が「個」という地球の法則(引力、地電流など)に従うようになったとき、その子は、「個」としての意識を充分には持たないまま、自分のことを名前ではなく、「私」と呼ぶようになるのだ。それまで「ピエールはこのオジサン嫌い！」と言っていたのが、「僕はこのオジサン嫌い！」と言うようになるのである。大体三歳位になると、子供は生来の炯眼さを、つまり物質的なもの以外を感じとる力を失ってしまう。

動物には、厳密な意味での「個」の自覚はない。彼らは種としての掟に支配されているのであり、人間と違って、種の中における各々の「個」としての意識は持っていない。だからこそ、同じ種の動物は互いに非常に良く似ているのである。こうした事実からも、動物は、人間ほど、この地球を包み込んでいる生きたエネルギー体系から引き離されることなく生きているということが分かる。彼らは、意識することなく、日々生きることについての情報を、このエネルギー界から汲み取っているのである。だからこそ、彼らはこの世界を台無し

にするなどということとはできない。ビーバーが、誰に教わるということなく、数学の法則に則ったダムを木切れで作ることができるのも、鳥達が、ときに驚くほど見事な形の、しかもバランスのとれた巣を作ることができるのも、全てエネルギー界からの情報のお陰なのである。同じ力によって、動物達は危険を察知することもできるし、何キロも離れたところから、水の在り処を知ることができる。という訳で彼らは、自分の種が必要としている造形のエネルギーとの絆を常に持ち続けているのだが、一方で「私」という個の認識、言い換えれば自由というもの、そのエネルギーから羽ばたく力を、まだ手にしてはいない。動物が、生物学的に人間より低い階層におかれるのはそういうことなのである。

最後にもう一つ付け加えると、動物に人口香料で香りづけされた食べ物を与えたり、つまり、彼らの本能的な感覚を人為的に麻痺させたり、本来食べさせてはいけない「化学合成食品」を与えたりすると、造形エネルギーとの絆が失われ、彼らの体は弱ってしまう。それによって（治療や、薬といった形で）更に新しい経済効果が生み出されるわけだが、こうした現状が、実は私たちを取り巻く医療の全体像なのである。

7. 全体性

既に同様のことを第一章のディオニソス神話に触れたところで語ったが、エジプトでもイシスについて語るところで、地球の持つ引力についての言及が見られる。彼女は、タイフオンによって八つ裂きにされた夫、オシリスを探して、涙にくれながら、地球の果てまで歩き回ったことになっている。しかしここで言うタイフオンは、実は地球の引力を象徴しているのである。つまり、物質として受肉した存在ということであり、地球の引力の法則によって、エネルギーとしての状態から完全に離脱してしまったものを意味している。イシスはパズルの一つひとつのピースをつなぎ合わせるように、夫のバラバラにされた遺体を探し回るのだが、オシリスという名の美しい姿をしていたのは、エネルギーレベルでのことだったのである。イシスの神話はこのように解釈することができる。もちろんこのパズルは、やり遂げるのが恐ろしく難しい代物である。とはいえ、本物のグラン・ヴァンを作るためには、農業においても、葡萄栽培においても、このエネルギーレベルでの探求を行わなければならないのである。

さて、いよいよ私たちの葡萄畑のために、或いは農場のために、本当に必要な問題について考えていくことにしよう。葡萄や作物が自らの持てる力を最大限発揮できるようにするためには、一体、何が必要なのだろうか？ 一体どんな動物が必要なのだろうか？ 周りの環境は？ エッセンスは？ ビオディナミのタイプは？ セパージュは？ 地形は？ 或いは畑の向きは？ などなど。言い換えれば、こうした基準を通して実際に作用しているエネルギーはどのようなものなのか、という問いである。情報にアクセスすることのできるジャーナリストの中で、一体どれほどの人間が、重要なメッセージを正しく消費者に伝えることの必要性を意識しているだろうか？ 彼らが手にしているのは自由だけなのか？ ここでメディアのコントロールという問題に突き当たる。

この分野には誰、別の分野には誰といった形でジャーナリストを選ぶ、言うなれば「選ばれた当人の理解の仕方」によって情報の発信の仕方が全く異なるという問題である。新聞社にしてみれば、ある分野に関わる責任を特定のジャーナリストに丸投げすることで、リベラルな会社という体裁を整えることなどいとも簡単なことである。例えそのジャーナリストが、担当分野について知識を深めたり、別の角度から捉え直したりということができない、或いはそうするだけの創造性に欠ける人間だったとしてもである。広告予算は、多くの新聞社にとって極めて重要な運営資金である。幸い、この業界にも、葡萄栽培や、他の業界と同様、個人的な利益のために平気で自らの良識を叩き売るなどをもって他だと考えている人もいるのだが……。

地球には生命を育んでいる充実したエネルギーシステムがあるのだということに気が付くと、現在、葡萄栽培や農業において最も危険なこととは、言うまでもなく遺伝子操作に他ならないということは容易に理解できる。彼らは（自らの正当性を主張するために）、遺伝子操作とは「悪い遺伝子」を「良い遺伝子」に置き換える技術である、という非常に単純化された説明を行っている。ここでは、エネルギーシステムが、どうしてある場合はいつもと違ったやり方で作用し、別の場合はそうではないのかということを追及しようとはしない。彼らは、「良いこと」という名目の下に、悪い遺伝子を取り除いてしまえばそれで充分だと考えているのである。遺伝子操作を行ったために白血病になってしまった犬のこと、言い換えれば、「秩序の破壊」によってまた新たな秩序の破壊が引き起こされるといった現実については、彼らの思考が及ぶことはないのだ！ それどころか、遺伝子操作によって人為的に白血病を作り出そうかと

いうところまで来ているのである。

現代の科学は物質のみを対象に据えているが、そこで獲得された知識がより広い視野の下でもう一度見直されるということがなければ、本当の意味での科学の進歩は有り得ない。逆にもしこの「見直し」がなされなければ、恐ろしく危険なものにすらなり得るのである！　ところが今のところ、極めて限られた視点の下でしか物事を捉えようとはしていない。例え痛みを伴おうとも、私たちはこの新しい視点、視野での物事の捉え方を学ばなければならないし、地球の命の法則のより俯瞰的な定義と結びついている補完性というものを理解することによってのみ、私たちは科学の恐るべき逸脱を食い止めることができるのである。現代では未だ偉大なる進歩だと信じられている物質的知識の限界を明らかにするために、今後、これら数々の科学の逸脱については、多くの本で取り上げられることになるだろう。そしてそれを理解することによって始めて、農業においても継続的な進歩が生まれるのであり、物質界とその周りを取り囲むエネルギー界との絆も生まれるのである。

農業については、既に道は開かれており、それがまさしく、バイオダイナミと呼ばれるものである。結果は、日に日にはっきりとワインの中にもみとめられてきており、更に新たな取り組みが生まれようとしている。それは取りも直さず、バイオダイナミを実践することで、否定しようのない、誰の目にも明らかな結果がもたらされているからで、しかも（化学薬剤のような）副作用も全くない。全てのパラメーター（基準となる要因）を考慮に入れば、つまり、食物の質的な欠陥によって引き起こされる健康被害に支出される膨大な社会保障費などを考慮すると、バイオダイナミは極めて収益性の高い農法なのである。そして逆にこの収益性の高さ故に、経済的な側面からバイオダイナミを敵視する人達がいる。化学薬剤のお陰で生きている人達、或いは化学薬剤を利用して生きている人達が、最初にこの農法のことを何と言ったか。何かのセクトだと言って非難したのである。もちろん、裁判によってきっぱりとこの点は否定されたし、勇気あるジャーナリスト達もそのために戦ってくれた。

ではその次に彼らは何と言ってきたか。バイオダイナミは「金持ちのための」農法だというのである。しかし実際は、多くの小規模栽培家によって実践されており、しかも開発途上国でも盛んなのである！　そしてその次には、畑で実際に使うものが非常に僅かな量だということから、秘教的だと言って非難してきた。もしバイオダイナミが秘教的なものに映るとすれば、それは実際にもたら

される効果を、物質的な面からだけで説明しようとするものではないからである。

しかしこれは携帯電話やレーダーも同じこと。目に見えない電波のお陰で、飛行機は何千キロも先にある目標を見つげることができる。INRA のメンバーの中にも一幸い全員ではないが一、人類や地球に対してこれほど多くの負の財産を背負い込ませ続けているにもかかわらず、未だにバイオダイナミのことを「反啓蒙主義」と言って憚らない人間がいる。彼らは、彼らの有する道具や技術ではこのエネルギー現象を捉えることができない、つまり数値として計ることができないのだということが理解できず、質的な面では確かに結果が出ているにもかかわらず、単純にそのようなものは存在しないということで片付けてしまおうとしているのである。

バイオダイナミの効果、効能に関わるものは全て、法則となる。ここで言う法則とは、林檎が落ちるのを見て閃いたと言われるニュートンの法則ではなく一ニュートンは引力とは逆の原理についても唱えていたので、彼の業績を林檎の逸話だけに限ってしまうのは非常に残念である一、太陽の法則なのであり、物質界のみに適応した機器によっては捉えることのできないものである。ここでは、同僚から時に白い目で見られることもあった勇氣ある物理学者たちに感謝の意を表したい。彼らは、物質界の背後に、私たちの全く知らない別の世界があるのだということを見つけたのである。彼らは繰り返し、強調した。『『無』は無にあらざ。私たちの知覚できないもので満ち溢れているのである』と。科学は再び大きな一歩を踏み出したのである。

いずれにしろ、私たち葡萄栽培家や、あなた方ワイン愛好家にとって、何より肝心なのは結果である。今日、私の知る限り、従来の農法で葡萄栽培を行っているもので、化学薬剤や最新技術の力を借りることなく、これからの農法、つまりバイオダイナミを正しく実践して作られたワインより質の高いもの、その土地の独自性をより良く表現したものを作るのに成功したものはいないはずである。前章までで波動について述べた。エネルギー界についても、生命の背後にあるものについても、原型エネルギーについても説明した。これらの言葉は、その意味を正しく理解されないうちは、少し野蛮な印象を受けるかもしれない。しかし、では、これらの言葉で説明されるバイオダイナミとは、一体全体何なのか？ 私たち実践者は、具体的に何を葡萄畑で行っているのか？ 他の農法とは何が違うのか？ いよいよ次章で、このテーマについて見ていきたいと思う。

8. 葡萄栽培におけるバイオダイナミ

「バイオ」とは生命を意味する。ダイナミ、或いはダイナミズムとは、生命の伸長、増大、若しくは刺激、躍動のことである。どうすれば生命にダイナミズム、即ち躍動力を与えることができるだろうか？ 実はそれは、本来非常に簡単なことなのである。部分的とはいえ、ずっと以前から自然には幾つものプロセスが存在している。例えば、これは誰もが知っていることだが、水源から汲み取られたばかりの水は、瓶詰めされてしまった後に比べて、生物学的に、つまりそのダイナミズム、地中を流れていたとき身につけていた躍動性という点において、ずっと活発である。また雨水は、水道水に比べて遥かに植物の成長には効果的だが、それは大気中を通過するときに動的なエネルギーを受け取るからなのである。

バイオダイナミは、1924年、ルドルフ・シュタイナーによって始められた。彼は当時、ドイツのコベルヴィッツにあるカイザーリング伯爵夫妻の館に滞在していたが、ここで、植物の健康、味、そして栄養学的な質を改善するための具体的な指示を与えようと決意した。彼は、植物が自らの持てる力を最大限発揮するためにどうしても必要な「命のプロセス」を改善するために、非常に特殊な天然成分のみを由来とするプレパレーションと呼ばれるものを考案したのである。そして先ずその手始めとして、薬用成分を含む植物を選んでいった。

では、その植物とは何だったのだろうか？ カモミュー、ノコギリ草、イラクサ、樫の木の新皮、タンポポ、そしてカノコ草である。更に、これらの花のうちあるものには、相性の良い動物の臓器を選び、植物と動物の両者がシナジー効果（相乗効果）によってそれぞれの効果、効能を倍増できるよう、ある一定の期間、その臓器の中に植物を入れておくようにと助言した。

これら全てが、非常に詳細な条件の下に、主に冬の間に地中に埋められ—一つだけ例外として夏に埋めなくてはならないものがある—、春の訪れと共に掘り上げられる。

8-1. プレパレーション

このプレパレーションについては、私たちのことを誹謗中傷する輩から魔女との密約とでも思われては困るので、可能な限り明瞭に説明しよう。葡萄栽培で

実践されるバイオダイナミが、世界中で質の劇的な改善という大成功を収めているのを目にして、彼らの敵意は日に日に辛らつきを増しているのである。

具体的な例の一つを見てみよう。(ヨーロッパの人間ならば)誰でも知っていることだが、カモミューユは、消化作用と、それも特に腸と特別な関係、言うなればこの臓器への特別な効果を持っている。他方、生物の階層では、動物の方が、植物よりも上の階、つまりより進化した階層に属している。自ら動くことのできない植物は、地球、太陽、そして気候条件の作り出す周囲の生態環境に、100%依存しているが、一方、より進化した動物は、外界からの自立を獲得するために幾つもの臓器、器官を体の内部に組みこむことができた。結果として、彼らは自分の好きなところで飲み、食い、眠ることができるようになったのである！ 必要なものの内部化という現象は、細胞の発生の段階でも似たような動きをみとめることができる。所謂、「陥入」と呼ばれるもので、細胞壁の一部が内部に落ち込むことで、胚の分化が始まる過程である。伸張によってのみ細胞が分化していく植物には、この現象は見られない。植物の中にも、特に蘭科のものにおいて顕著だが、例えば昆虫を思わせるような性質や、動きを持つことで、より進化した階層に上ろうとする企てを試みるものがある。今述べたようなことをより良く理解するためには、薬用植物について詳細に書かれたペリカンの著書をじっくりと読んで頂きたい。植物より上階に位置する動物は、下階にある植物の成長に素晴らしい効果を与えてくれる。動物の糞尿を使った堆肥が植物の成長には最高であるという事実に、異論を唱えるものはいないはずだ。では、堆肥とは一体何なのか？ 言うなれば、動物の消化器官を通った植物素材の肥料なのである。だからこそ、乳牛の餌として肉を与えるようになどと言うのは、植物性プロテインと動物性プロテインの違いも分からない、社会に対して無責任な愚か者の仕業であり、食べた乳牛の方まで狂牛になってしまうのである！

堆肥とは、本来、動物の新陳代謝のエネルギーをたっぷり吸い込んだ植物素材の肥料でなければならない。医学の分野でも、時に動物由来の医薬品が求められることは良く知られており、その効果は認められている。非常に単純化して説明を試みたが、それでも動物の臓器と植物が、ルドルフ・シュタイナーの指示通りのプレパレーションを行われることにより、如何に高いシナジー効果を生むのかということは理解できたのではないかと思う。非常に「単純化された」と言ったが、実際、プレパレーションに使われる植物、動物、そしてその臓器の選別については、原型エネルギーや、生命の背後にあるものなどについて

て、膨大な研鑽を積まなければ理解し得ない奥深さがある。目に見えない力が、一つひとつのプレパレーションの中で発揮されることによって、始めて求める効果が得られるのである。

さて、カモミーユが腸の中に詰め込まれると、この植物が本来持っている特性は強化され、更に質の高いものとなる。ではどの動物の腸を使うのか、今度はそれを選ばなくてはならない。その選び方はというと、消化器官が最も発達している動物、最も長く反芻を繰り返す動物は何かということである。ヨーロッパでは、もちろん牝牛である。事実、この動物は、多くの古代文明において神聖化され、キリスト教でも神の使いとされてきた！ ということで、牝牛の腸を使い、そこにカモミーユをたっぷり詰め込むと、冬の訪れと共に地中に埋め込む。春が来たらこれを掘り起こし、堆肥一山、或いは牛糞小一山の中に、ほんの少量を混ぜ込み、続いて水に溶かしながらディナミゼーションと呼ばれる作業を行う。こうして出来上がったカモミーユのプレパレーションを、ある特定の時期を選んで畑に撒くのである。

以上が基本的なプレパレーションの作り方である。植物が動物の臓器の中に閉じ込められることで、ある特定のプロセスが強化され、活性化されるのである。植物の中には一例えばイラクサや、カノコ草のように、動物の臓器の力を借りることなく単体で十分な効力を発揮するものもあるが、その他のものは、それぞれ異なる臓器の中にしばらく置かれることで、より大きな作用をもたらすようになる。ノコギリ草と相性の良い臓器は鹿の膀胱だが、鹿はその角のお陰で、鋭敏な感覚を獲得し、敏感さを象徴する動物として多くの文献に登場する。タンポポには牝牛の腸間膜が用いられるが、腸を包んでいるこの薄い膜は、ケイ酸質に富むといわれる。樫の木の樹皮は、家畜の頭骨の中に入れられるが一頭蓋骨は容器として使われる一、この樹皮に含まれる植物性カルシウムが（含有率 77%）、頭蓋骨に含まれる動物性カルシウムとシナジー効果を発揮するのである。

ここまで非常に簡単に説明してきたが、もちろん、実際には更に突っ込んだ説明の仕方もあるのである。ただ、ここではとりあえず必要のないものは省いて、基本的な話だけに留めておきたいと思う。プレパレーションの中に取り込まれる一つひとつの動物、そしてその臓器の特徴、特性については、生命の背景にあるものまで考慮に入れるとなると非常に複雑なものになってくる。プレパレーションについては、まだまだ沢山の疑問、質問があると思うが、ここでそ

の全てに答えることはできない。例えば、どうして地中に埋めるのは冬、若しくは夏でなければならないのか、また場合によっては深く、或いは地表近くにと、埋め方が異なるのか？ 埋める場所の土壌について、乾いた土地が良いのか、湿った土地が良いのか、或いはまた肥沃なところが良いのか、それとも泥質のところが良いのか？ どうして肉牛でなくて牝牛なのか、また豚でなくて鹿なのか？ などなど。しかし全て、偶然そうなのではなく、ある特定の効果、効能を得るために、重要な意味があって選ばれているのである。

ビオディナミのプレパレーションを利用して、私たちは、自然が無償で与えてくれるシナジー効果を農業に活かそうとしているのだが、その力をより良い形で使うためには、自然の恩恵への感謝を忘れてはならない。プレパレーションの一つひとつが、植物が必要としている特定のエネルギーを受け取るための「歓迎の場」なのであり、「善玉細菌の集まる場」なのである。

この本の目的はただ一つ、どうしてビオディナミが、味や長く続く美味しさに具体的な効果を及ぼすことができるのかを、ワインに魅せられた人達に分かってもらいたいということなのである。

8-2. 牝牛の角

もう一つ、どうしても話しておかなければならない重要な器官がある。ビオディナミに敵意を抱くものたちは嘲笑ったりもするのだが、それは牝牛の角である。これを私たちは二つのプレパレーションのために使う。

この器官は、牝牛にとっても多くの豊かさをもたらすものである。鹿の角がアンテナのような働きをするのとは逆に、牝牛の角は、中が空洞になっている。シュタイナーによると、牝牛の角の第一の役割は、常に外に逃げ出そうとしながらも、角と蹄のお陰でそれを果てせずにいるエネルギーの流れを、体の内部にとどめておくということなのだそうだ。

角は、内部に対しては、反射鏡の働きをし、外部に向けては、上昇のエネルギーに満ちた太陽の力と動物を結びつける絆としての役割を果たす。これはまさしく、古代エジプトの神話にある女神ハトホルが象徴しているものでもある一拙著、《Le Vin du ciel a la Terre》を参照のこと。この女神は、頭が牝牛で、しかも二つの角の間には、太陽を象徴する円盤を持っている。重たい大きな頭を牝牛が軽々と、そして高々と掲げられているのは、この太陽の力のお陰なのである。牝牛の角は、プレパレーションのあるプロセスに特別な効果をも

たらしめてくれるが、ワインのより良い味を求め続ける葡萄栽培家にとって特に興味深いのは、まさにこの点である。もちろん農業学校では、牝牛の角は切るようにと、今でも教えているし、大多数の酪農家が、その役割を深く考えることなく、言われたとおりにしているはずである。ではバイオダイナミでは、牝牛の角はどんな役目を果たしてくれるのだろうか？

古代の人々にとって、角は常に豊かさの源だった。事実、古代の織物には、角は豊饒の象徴として描かれ、金貨や宝石類が角から溢れ出ている様子がモチーフにもなっていた。ところが現代では、シンボルとしての角の意味、与えられた力の意味について理解しようとするものはほとんどいない。デンマークでは、銀を嵌め込まれた角が、ワイングラス、或いは水を飲むコップとして今でも売られている。過ぎ去った時代の最後の名残である。フランスでも、仲間全員が食事のテーブルについたこと知らせるのに、「水が角に満たされた」という表現を使っていた。そう、牝牛の角は、切られた後も数年間は波動を受信し続けると言われているが、その波動で、中に入れられた水を振動させていたのである。彼らは、その健康への高い効果、効能を十分に理解した上で、その水を入れて飲んでいた。グルジアに行くと、今日でも、お祭りや祝い事の日に飲むワインのために、銀を嵌め込まれた牝牛の角や、粘土を角型に焼いた器が売られているのを目にする。

バイオダイナミのプレパレーションでは、牝牛の角に牛糞を一杯に入れ、冬の間正しく選ばれたある場所にそれを埋める。この手順で準備されるプレパレーションの隣に、同じ牛糞を普通の小さなビンに入れて埋め、次の春に両方とも同時に掘り起こして比較してみる。すると、牝牛の角に入れておいた牛糞の方が、ビンに入れておいたものより、微生物による活動が70倍も高かったのである。この実験結果からも、私たちの周りにある生命活動を正しく理解することによって、植物が何より喜ぶ素晴らしいエネルギーを活性化できることが分かる。全体としては、1ヘクタール当たり、1つ乃至2つ分の角の中身、重さにして100グラムから150グラムの牛糞を使えば充分である。1ヘクタールもの広い土地に、どうしてそんな僅かな量で効果が得られるのか？ 理屈は簡単である。ここでも詳細には踏み込まないが、牛糞を主体としたこの素材を、1時間かけて60リットルから70リットルの温めのお湯の中でダイナミゼーションをするからである。

では、このダイナミゼーションとは一体どんな作業なのだろうか？ それは難

しいことでも何でも無い。手作業で行うとすれば、ほうき状の棒で作る渦であり、スパイラル（螺旋）であり、力強さに溢れた渦巻きだが、同様のものをディナミザーと呼ばれる機械を使って作ることもできる。一分ほど、こうして攪拌し続けると、渦の中心が容器の底まで達するので、今度は急激に回転の向きを逆にして作業を続ける。この繰り返しである。急激に反回転を始めるとき、そこには私たちがカオスと呼ぶものが現れる。これが非常に重要なので、ここで説明をしておこう。

前章までで、数字の「8」が実は1つの円でできており、それにねじれを加えることで8の形出来上がっているのということを話した。この「ねじれ」が8の字の下半分にエネルギーの反転を引き起こす。上半分が右から左へと回転していたのに対し、下半分では左から右へと回転する。この回転方向の転換は、上の円と下の円が交わるその一点で起こる。この交差点こそが、極めて重要なカオスと呼ばれる点なのだが、ここはエネルギー界にも属さない、かといって物質界にも属さない、そんな特殊な一点なのである。この「二つの世界の交わる場所」がカオスである。カオスを通るからこそ、赤ん坊はこの世に生まれ落ちるときに泣き声をあげ、死の世界へと旅立つとき人は理性を失うのである。二つのエネルギーの交差点における突然の方向転換こそが、バイオディナミが利用しようとする下降エネルギーをもたらすのだが、機械のディナミザーの中には、その十分な力を持たないものもあるので注意したい。カオスにおける無秩序こそが、新しい法則、つまり地球の法則に統べられている秩序を呼び出すのである。

この状況は、以前話したラビリンス（迷宮）になぞらえて考えることもできるだろう。中に入ると、余りにも沢山の曲りくねった道があるため、最初はすっかり途方にくれてしまう。しかし、完全に「方向を見失ってしまう」ことによって、私たちは地球を統べるエネルギーから解放され、上階のエネルギーにたっぷり浸ることができるのであり、迷宮を作った古人は、その力呼び覚ます方法を心得ていたのである。同様のことは、私たちの日常生活の中にも見出すことができる。何かの悲劇に見舞われたとき、私たちは自分でもどうしようもない無茶苦茶な状態、カオスに陥るが、結果的にはそのひどい状態が、新たな突破口を、180度の方向転換を、そして新しい何かの誕生をもたらしてくれる。それが生きることの意味であり、過ちもまた然りなのである。

もう一度ディナミゼーションの話しに戻ろう。この作業を更に簡単に言ってし

まうと、プレパレーションの溶液を激しく攪拌することによって、牝牛の角の持っていた特別な力を水の中に引き出すプロセスなのであり、私たちはこうして得られたエネルギーを伴った水を畑に撒くということなのである。事実、物質界で目に見えるものとして存在する生命、その背後に隠れているエネルギーは、しばしば螺旋、つまりスパイラルの形を伴って私たちの下に降りてくる。

例えばバラの蕾、これも見事なスパイラルを描きながら花開いていく。ひまわりの花の中心にある種の並び方もそうだし、植物の中には、バラのように、莖の周りできる新芽のつき方も螺旋を描くものがある。動物の毛や、人の髪の毛のうなじも然り、巨石文化のメンヒルの中にも、螺旋が彫刻されたものがある……など、例を挙げれば枚挙にいとまがない。最後の例からも明らかな通り、古代の人々は、この力、そしてそれがどうやって私たちの下にやってくるかを十分に理解していたのである。他にも、巻貝や台風、そして宇宙など、渦巻き状の形を持っているものは非常に多い。少し注意して見てみれば、私たちの周りには沢山のスパイラルが存在するのだ。CNRS（フランス国立科学研究所）でも、現在、螺旋に関する研究が行われているそうである。テオドール・シュウエンクの著書、《le Chaos sensible》の中には、様々な螺旋がイラストで紹介されている。一体、これは何を表しているのだろうか？ 簡単に言ってしまうと、微視的宇宙（マイクロコスモス）になった巨視的宇宙（マクロコスモス）であり、中心点へと集約される外円であり、一点（スパイラルの中心点）へと凝集していく、つまり物質へと形をとっていく目に見えない力なのである。北半球の場合、時計と同じ方向に螺旋が回転すると受肉、つまり物質化が起り、逆に時計と反対方向に螺旋が回転すると遊離、つまり非物質化が生じることになっている。

実際、ワイン愛好家の多くが、こうした宇宙の原理を知らないまま、より豊かな香りを引き出すために、グラスに入ったワインを右から左へと回しているのではないか。では南半球ではどうなるのだろうか？ ワインをより開かせるためには、恐らく北半球とは逆の方向に（時計の針と反対、つまり閉められたものを緩める方向へ）と回さなければならないはずである。

8-3. ビオディナミのプレパレーションの使い方とその特性

「牝牛の角に入れられた牛糞」のプレパレーションは、「傾いた太陽が、地球の中心に向かって大気を引き下ろすようにして植物に露を置くとき」、つまり夕

刻の頃、畑に撒く。

どうしてこうしなくてはならないのか。それは、プレパレーションの一滴一滴が命のベクター、つまり命を運ぶものだからである。この溶液は、先ず土中の細菌類に働きかけるが、その細菌が、次に、前章でも話したミコリザ¹⁹の発達を促すのである。覚えていらっしゃると思うが、土中の細菌が多くなればなるほど、葡萄の根も、その土地の持っている地質学的な豊かさをたっぷりと吸収することができる。だからこそ、私たちは畑に命のプロセスをもたらすのであり、その一連のプロセスが、牝牛の角に入れられ、冬の間地中に埋められることによって「活性化された」微小生物を土中に増やす、ということから始まるのである。同様に、牝牛の角は、中の牛糞に住みついている微小生物を育てるための苗床のような役割も果たしている。実はバイオダイナミのプレパレーションの一つひとつが、それぞれ異なる（命の）情報を持ったベクターなのである。こうして準備が整った後、私たちは、ダイナミゼーションのやり方によって少しずつ異なるプロセスを実際に畑に施す。すると、土の中で命の連鎖が始まるのだが、このプロセスは、プレパレーションを撒かれる畑が良い「受け手」であれば、言い換えると、エネルギーを受け取る環境が整っていれば、急速に進行していく。

逆に言うと、このプロセスが成功するためには、畑の方が、あの恐るべき毒の数々から守られていなければならないわけだが、現実には今でも、除草剤とか、土壌改良剤などなどという名前で、栽培家によって多くの毒が使われ、しかも（禁止されるどころか）業界ではその使用が薦められたりもしている。作物の質的な向上を求めるとき、一方で命のプロセスを施しながら、もう一方では死のプロセスを施すなどということは不可能である。例え、毒性が幾分か緩和された化学薬剤を使おうが、毒性のある薬剤の量を減らそうが、それは同じである。人間が合成して作った薬剤は、エネルギー体系がその持てる力を完璧に発揮しようとするとき、「不協和音」を奏でるものであり、阻止するものであり、障害でしかない。しかも現在に至ってもなお、私たちの科学は、このエネルギー体系のことを十分に理解できずにいる。だからこそ、確かな結果を得るためには、こちらにするのか、もう一方にするのか、農業の方法を一つ選択する必要があるものであり、相反する二つを混ぜても意味がないのである。

19 菌根、菌の菌糸と高等植物の根が結合して共生しているもの

角に作物や畑を肥沃にする特性が備わっていることは、遙か昔から知られていることであり、砕いて破片にしたり、粉にしたりして、今日でも農協などで売られている。しかし最近では、無理解にも狂牛病の影響を懸念され、販売される前に特別な処理を行わなければならなくなった。そのため、効果が以前に比べて遥かに弱くなったと言われている。面白いことにフランスでは、人によって作られたのでない、天然由来の製品が大きな効果を持っていると、一常にその方が良いからという名目で一尤もらしい口実を見つけては、折角のその特質を弱めてしまおうとする。つい最近も、これまで既に長く使われてきたホメオパシーの薬剤が、社会保険の枠から外されてしまうという出来事があった。同じ薬は、外国では認可されているのである。

詰まるところ、牝牛の角を使ったバイオダイナミのプレパレーションと、単に角を削っただけのものとの違いは、バイオダイナミでは、これをあくまでも容器として牛糞を入れるのに使い、従来のやり方では、これを直接畑に撒くところである。角の中に入れられる牛糞は、冬の間、この角と畑の両方からエネルギーと力強い躍動力（ダイナミズム）をたっぷりと受け取る。こうして使われる角は、3年から4年間、その活性を持ち続けると言われている。

牝牛の角は、もう一つ別のプレパレーションにも使われる。牛糞の中に詰める代わりに、今度は、非常に粒子の細かいクォーツ、つまりシリカ（二酸化珪素）を入れるのである。私たちの惑星である地球は、元々この物質を豊富に持っているが、一見活性などあるようには思われないこの物質が、実は自然のバランスを取る上で非常に重要な役割を果たしているのである。シリカは、絆、中継ぎとして、或いは太陽系から発せられるエネルギーを受信するアンテナとして働く。もし地球が、太陽だけでなく、太陽系全体から完全に切り離されてしまったらどうなるか、科学者の中に正確に答えられるものなどいないはずである。

さて、角を使った二つ目のプレパレーションを作るためには、角の中にクォーツを一杯に入れ、これを今度は夏に地中に埋める。その後角から取り出すのだが、こうしてできたシリカパウダーは、ある特定のエネルギー、波動、或いは情報をたっぷりと取り込んでいる。「情報」という言葉を使うと、何か恐ろしいもののように思う人もいるかもしれないが、ご存知の通り、現在ではクォーツ、つまり二酸化珪素は、情報を運ぶベクターとして IT 業界では広く使われており、また時計や、その他の機器を動かす「充電素材」としても利用されている。バイオダイナミでも、クォーツは同様の働きをするが、ここでは、エネ

ルギーを「充填」したり、或いは「その情報」与えたりするのは、あくまでも自然なのである。自然こそが、牝牛の角と土の力を借りてその働きを司るのである。牛糞の場合と違って、クオーツは夏に土中に埋めるが、それはこのプレパレーションが、植物の葉と光合成を対象にその効果を発揮するからである。非常に分かりやすいのではないだろうか？

このプレパレーションは、極めて少量しか使う必要がなく、1ヘクタール当たり僅か数グラムで充分である。波動について語るとき、重さは問題にはならないはずだ。大量に使っても全く意味がないのである。ピオディナミという農法は、物質的な重さのレベルにあるのではない。既に理解されたと思うが、私たちの実践している農法は、エネルギーのレベルにある。実際、携帯電話でも、パリまで2gですとか、ニューヨークまでは100gですとか、電波の重さで通話料金を払うということはないはずである。皆さんが観ているテレビも、映像を運ぶ電波には重さはない。にもかかわらず、離れたところに画像を送るという働きは確かに行われているのである。ラジオも然り。スイッチをひねれば、一定の電波に周波数を合わせることで、聞きたいと思う番組を受信することができる。どれも皆、当たり前のことと思われているが、それは私たちが電波を使った生活に慣れているからに他ならない。しかし実は、地球に命のエネルギーが下りてくるといふ現象も、同様の法則に則っているのであって、春の訪れと共に物質としての姿を取り、私たちの目で捉えられるようにならないと、人はそれを実感することができないだけである。ということは、生命とは何かという問題を理解しようとするとき、その源を植物の体内にのみ見出そうとするのは、非常に愚かなことということになる。テレビの司会者が、まさかテレビの受信機の中にいるとは誰も考えないはずで、それと同じなのである。植物や種は、壮大なエネルギー体系との絆であり、そのエネルギーの受信機なのであって、目には見えないこの世界を上手く利用するためには、まずはこの事実を十分に理解しなくてはならない。

遺伝子もまた、ここから発せられる命令に従順に従う媒体でしかないのだ。そして、ピオディナミのプレパレーションも、エネルギー界との中継ぎとしての役割を果たす。植物が受け取るエネルギーや、ある特定のプロセスに働きかけ、それらを活性化するのだが、人が畑や、大気中にもたらしたエネルギーレベルでの汚染や、無秩序のために、地球に届くエネルギーは以前ほど良い状態ではなくなってきている。今日に至るまで、人は大気層をゴミ箱同様にしか考えてこなかった。人間には形あるもの、目に見えるものしか重要ではなかったので

ある。ところが新しく開発された兵器の中には、このエネルギーレベルを十分に理解した上で作られたものがあるという。今日でも、高いもの、低いものに限らず、周波数を厳しく規制する法律は存在せず、私たちは電波が生命に与える影響など省みようもしない。今のところ、経済に深刻な逆効果しか及ぼさないとされるような決断に対して、政府は真面目に予算を割こうなどとは考えていないし、例えそのような決断が下されたとしても、絶大な影響力を誇るといわれるロビースト達が、経済にとって「悪い」決断が実行されないよう、研究結果をひっくり返してしまうような策略を用いるに違いないのだ。私たちの政府など、彼らにとっては子供をだますよりも簡単なのである。これからの若い世代のことを考えると、こんな苦言も敢えて呈さざるを得ない。

詰まるところ、バイオダイナミのプレパレーションは、エネルギー界のある特定のプロセスに働きかけるものなのであり、時にエネルギーの受信機のような働きをし、時にはヴェクター（運び屋）のような働きもする。バイオダイナミによる農業の素晴らしいところは、この私たちの目には見えない、しかし現実に存在するエネルギー体系において、重要な情報の運び手となることができることであるが、この体系が働かなければ、地球に生命が育くまれたり、植物に命が宿ったりすることもないのである。バイオダイナミは、その働きを刺激し、正しい方向へと導く。しかも、命が命として、つまり物質として結実する前の段階に作用するのである。あと数十年もすれば、こうしたことは全て、ごく当たり前のこととして理解されるようになるはずである。

さて、以上のようなわけで、一つの情報が、牝牛の角と、夏の畑の力を借りて、クオーツによってエネルギー界へともたらされる。こうしてエネルギーをたっぷり吸収したクオーツを、今度は、ほんの数グラム、水の中に溶かし、それを1時間かけてダイナミゼーションする。出来上がったプレパレーションは早朝に撒くが、畑に直にはではなく、植物の葉に向けて噴霧する。クオーツを直接畑に撒くと、好ましくない影響が出てしまうからである。ではどうして早朝なのかというと、この時間は丁度、太陽が中空に向けて昇り始めるときであり、日が長くなり始める春と同様の効果を期待できるからである。上昇する太陽は植物の樹液を大気中に向けて引っ張り上げ、より上階の世界と結びつけてくれるのである。ではこのプレパレーションには何を期待できるのか？ クオーツには、大気の光度を増す働きがある。今風の表現を借りると、「光の情報を発信する」ことができるのであり、即ち、光合成を活発にすることが可能になるのである。また、もし時期を上手く選べば、味を作るエネルギーとの結びつき

を強めることも可能になる。このプレパレーションは非常に強い力を持っているのである。更に、葡萄の木が水分を多く取り過ぎてしまったようなときには、その排出を助ける役割を果たしてくれるし、結果的には隠花性植物に多く発生する様々な病虫害から守ってくれるのである。これ以上は踏み込まないが、一つだけ気をつけなければならないのは、このプレパレーションの使用には十分な注意を払わなくてはならないということである。というのも、現在の大気の状態は、ルドルフ・シュタイナーがカイザーリング伯爵夫妻のところで栽培家を対象に講義をした時代とは、大きく異なっているからである！

以上の説明で、ビオディナミの基本、そしてそれがどう作用するのか、言い換えれば、どのようにしてビオディナミが葡萄の木を、自然によって古の昔に作られ、しかもビオディナミしか活性化させることのできないプロセスと結びつけるのか、理解して頂けたのではないかと思う。多くの人々が携帯電話を使うことで日々大気を周波数で汚染してしまっているが、ビオディナミでは決して、自分たちの便利さだけのために、そのようなことをすることはしない。私たちは、自然が地球に命を育み、その活動を活発なものとするために作ったもの以外、利用しようとは考えていないのである。

要約すると、植物をベースにしたプレパレーションを、堆肥や数キロの牛糞の中にほんの少量だけ混ぜ込むだけで、植物が物質界で自らの持てる力を最大限発揮するために必要なプロセスに、仲介役として大きな効果をもたらしてくれる。そのプロセスとは、カリウム、カルシウム、鉄、二酸化珪素、リンなど栄養素に関わるプロセスだったり、果実形成のプロセスであったりするのだが、特に果実形成に関しては、このプロセスにスイッチが入ることによって、葉や茎の成長が止まり、その分の栄養が実の形成に運ばれるという大事なプロセスである。これ以上詳細には踏み込まないが、プレパレーションの影響は絶大なのである。プレパレーションの働きについては、こう理解してもらっても良い。

つまり、プレパレーションは、動物の体内で臓器が果たす役割を山積みされた堆肥の中で行うのであり、臓器と同様、プレパレーション一つひとつが特定の働きを担っている、と。具体的には、特定の異なる微小生物の活動を通して、土壌や植物のある特定の機能を強化するのである。プレパレーションを堆肥の中に入れた場合、秋に畑に撒き、できれば土の中に混ぜ込むようにする。また少量の牛糞の中に入れた場合は、ディナミゼーションをして、その後畑に撒くようにする。秋はこうした作業をするのに最も適した時期である。というのも、

この時期、太陽は南半球で中空に向かって上昇し始めるが、逆に北半球では地中に向かって引っ張る力が大きくなっていく。その結果、畑の土は、生命を育むのに必要な衝撃の力、インパルスを受け取り、閉じ込めることが可能になるのである。更に季節が進んで冬になると、寒波が訪れ、土は凍ってしまう。凍った土は、氷の結晶の力により、より遠くの世界の波動を感じることができるようになる。冬の間、畑は活発に働いているようには見えないが、実は休んでいるというよりは、研ぎ澄まされた感覚を使って自らを豊かに磨いているのである。この一見眠っているような時期こそが、実は大変貴重なのであって、それは物質界を越えたところで様々なことが行われているからである。

冬の間、物質界との絆が一部切れたようになる植物の生命は、エネルギーの形でのみ存在する。シュタイナーも言っているように、この時期、私たちは、自分の思い、想念によってのみ、ドメヌや葡萄から発せられるメッセージを聞き取ることができるのであり、それによって畑や作物に調和をもたらすことができるようになる。かつては、百姓たちは皆、畑を見回ったり、交代で近隣の間を行き来したりして、それを実践していたのである。言葉以外のものにも耳を傾け、想い、知性を働かす以外の方法で物事を理解しようとしていた。もし人が、この瞑想にも似たメッセージをより深く理解しようとするならば、今後、豊かに開拓される可能性を秘めた未開の世界が、私たちの前に広がることになるのだ。植物と馴染んでいる人のことを「グリーンハンド」²⁰を持っているという言い方をするが、このグリーンハンドのお陰で、私たちは、知らず知らずのうちに、この言葉にならない言葉を聞き取る力を持つようになるのである。このことについてもう一度深く考え直してみることで、人は、意識してまた新たな能力を手に入れることができるに違いない。

8-4. プレパレーションの特殊な働き

これまで牝牛の角を使ったプレパレーションを二つ紹介したが、この二つは他のプレパレーションとは大きく異なる働きを持っている。このうち、牛糞を使ったものは、土から芽を出し成長する際のヴェクター、つまりエネルギーの運び屋としての働きを持つ。土中に息づく生命を、その豊かな微小生物たちの命を介することで、葡萄の根と結びつけてくれるのである。言い換えれば、剪定の後、株元と僅かな芽しか残っていない植物が、幹や茎、葉といった新たな肉

²⁰ 緑の手、フランス語では main verte

体を形成する手助けをするのである。だからこそ、このプレパレーションは、春の初め、新芽が吹き出す直前に撒かなければならないのである。

一方、クオーツ（シリカ）を使ったプレパレーションは、光の力を借りて働く。そのため、いつ撒くのか、使う時期によって作用の仕方が異なる。葡萄も、春と秋では活動の内容が全く違うのである。このプレパレーションは、葡萄が日々生きて、成長していく手助けをするものであり、例えば春、葡萄が活発に成長し、つるや葉を作るために新しい物質を次から次に生み出しているような時期には、上から、つまり光合成を通して、その活動を助けてくれる。そして同じものを夏至の日から数週間後に使うと、この時期、実を充実させるために活発に働いている葡萄のために、今度は大気が運んでくる光を通して、糖分と豊かな味わいもたらしてくれる。この大気を通して運ばれる光と熱こそが、太陽からもたらされるエネルギーを伝えてくれる仲介役であり、植物に味や匂い、香りといったものをもたらしてくれるのである！

ビオディナミという農法がただ単に美味しいワインを作るためだけではなく、それを使うことによって何ができるのかを正しく理解しなくては意味がない、ということが分かって頂けたらどうか？ プレパレーション、畑の場所、葡萄の持つ生命力、セパージュ、土壌の持つ成長を促す力、年間を通しての気候条件などなどについて理解すれば、葡萄栽培家も間違った決断を下さずに済む。そしてこれらのファクターに応じて、牝牛の角を使って作られたプレパレーションを使い分け、葡萄が、茎や葉、実という形を持って物質界に命を開花させる、言い換えれば、拮抗し合っているディオニソスの力の中で活発に働くよう手助けしてやるのである。極端な例を挙げると、やり方によっては、艶やかな葉の生い茂る巨大な葡萄を育てることも可能で、その場合、実を作る力や、味わいは、有り余る生命力、繁茂の力のために、抑えられてしまう。また別の極端な例では、小ぶりで、枝も貧弱ながら、ワインにしたときの味は格別、という葡萄を育てることもできる。葉や枝の繁茂力と、結実作用は、対立関係にあると言ってもいいだろう。これほど極端ではないにしても、上の二つの例は葡萄畑では非常に良く目にする光景である。

8-5. 農業をもっとクリエイティブにするために

少なくとも数世紀前から、ビオディナミは、農業に、限定的な効果しか期待できない物質面ではなく、植物の性質そのものに働きかける初めての農法として

知られてきた。どうすれば葡萄がその持てる力を最大限発揮できるか、ということを実際に考え始めるとき、このビオディナミが、芸術的と言ってもよいほど素晴らしい突破口を示してくれるのである。選択肢は色々ある。私たちは、そのうち何を選択するかによって、現在非常に弱い、限定されたものでしかない葡萄とある特定の働きとの絆を強化してやることのできるものである。その一つにシリカのプロセスがある。しかし、絆を結ぶための扉は、どうして場合によっては大きく開いたり、場合によってはそうでなかったりするのだろうか？

簡単に言ってしまうと、現在の畑の土壌は、かつてのそれとは大きく異なるからである。土地もまた老いていく。現在の土は、これまで多くの巨木を育てて地下に眠る石炭層の厚さを考えれば、これまでどれだけ多くの木々を地球が育ててきたかが分かる。巨大な動物たちを育み、もはや数千年前の土ほど生命を育てる力を有してはいない。更に、そしてこれが最も大きな原因だが、私たちが物質面で進歩と呼んでいるものは、しばしばエネルギー面に悲惨な結果をもたらしている。近年、ようやくこの面での研究が開始されたが、既に前にも触れたとおり一政治的な意味合いを含めるつもりはない。エコロジーが政治的な性質を帯びてはならないから一強力な影響力を持つロビーストによる政治が、可能な限り長く、この問題を沈黙の底に沈めておこうと画策を始めるに違いないのだ！

良い面と言えば一幸い常に悪い面ばかりしかないわけではない。こうして起こった様々な問題が、誠実な葡萄栽培家や農業従事者には、目に見えない、触れることのできない質的な世界への突破口を示してくれることになったし、世界中の消費者も、日増しにこの世界への関心を高めてきている。ビオディナミを実践することにより、同じ畑でも、光のエネルギーを強く反映したワイン、そうでないワイン、地球の力を強く反映したワイン、そうでないワイン、また花の香りの強いワイン、そうでないワインなどなど、違った特質を持つワインを作ることが可能になる。

この 20 年ほど農業より遥かに経済的に恵まれるようになった葡萄栽培家こそが、微妙なニュアンスとしてワインの中にも含まれているものの正体が一体何なのか、更には、牛乳や野菜、果物の中にも AOC を冠するに相応しい味わいの深さがあるのではないかと、いうことを明らかにしていかなければならないと思う。正しく選別され、また地球のエネルギーが与えてくれたその土地特有の味をたっぷりと含んだ食べ物を買ってもらうことによって、消費者達の間を広げ

った情熱と関心の高まりを今後も持ち続けてもらうようにしなくてはならない。誠実に、真っ直ぐに向き合えば、地球は必ずや応えてくれるはずだ。

葡萄栽培家は、その気にさえなれば、独自のクリエイティブな力を発揮してみせることができるし、そのための手助けとなる方法が（ビオディナミには）これまで話してきたプレパレーション以外にもあるのだ。これは秘密にしておいてはいけないことなので、ここで話しておこう。その年の気候条件が難しい場合、煎じ薬を撒くことで葡萄に手を貸してやる。葡萄は生きものである。中には、ほっておいても自分で勝手に大きくなって実をつけてくれると思っている人もいるかもしれないが、実際は決してそのようなことはない。例えば葡萄の実の糖度を高めるというのも、実は大変な仕事なのである。その手助けとして、甘味のあるシノロイドー野バラの実ーの煎じ薬を収穫の数週間前に撒き、糖分の生成を促進させてやるのである。

また、私たちの無責任な行いにより年々厳しくなる太陽光線（紫外線、異常高温など）による被害から葡萄を守るためには、ゲモンと呼ばれる海草、若しくはアロエで作った煎じ薬、或いは粘土をディナミゼーションしたものを使うことができる。こうした作業は、化学薬剤のように葡萄の木を毒することは決してない。煎じ薬が効果を発揮できるのは、葡萄の木自らの反応ー共感、或いは反発ーによるものなのである。

更に、所有している畑と一番相性の良い動物についても考えてみることだ。農産物もまた、全て生きた有機体であり、動物はこの有機体の中で、言うなれば一つの器官、若しくはアンテナのような役割を果たすからである。一つひとつの動物が、肥料として使われることで、またその影響力の大きさにより、ワインの味わいに異なる表情をもたらす。動物もまた物質の4つの様態（熱、光、水、土）の一つに属しており、何に属しているかによって植物の根に働きかけたり、葉、花、或いは実に作用したりするのである。その意味で、ワインの味を良くするには、豚よりも馬の堆肥のほうが良いと言える。こうしたこと全てを考慮に入れ、生命を作り上げているもの全てが調和のとれた中におかれるように、この世に存在する様々なシナジー（相乗効果）に目を向けていかなければならないのである。

8-6. 違った形で働きかけるために理解する

バイオダイナミに関するシュタイナーからのメッセージの中でも特に重要なものの一つに、次のようなものがある。つまり、バイオダイナミは、病気と「闘う」ためではなく、体の「バランスを取る」ために作用するということである。具体的には、病気のベクター（運び屋）の役割を意味のないもの、発現しないものにするのである。農作物についても、同じような考え方をすることが重要である。AOCを有する土地の一部も、一区画の畑や、森、或いは荒地、例え木一本ですら、これを守るために、場合によっては犠牲にする覚悟を持たなくてはならないかもしれない！

生命の一つひとつが、或いは植物、動物の一つひとつが、相性の良いパートナーとなる動物を持っており、その動物が、鳥や昆虫、細菌などなどを媒介として、土壌の生命体系やミコリザと干渉し合いながら、効果をもたらしてくれる。言うまでもなく、土の中に住むこうした微生物なくして、葡萄はその持てる力を最大限発揮することはできない。バイオダイナミによる作業の一つひとつが、単に病気を抑制するだけに留まらず、植物に美しさや、香り、色、そして健康を与えてくれる複雑なエネルギーシステムとの絆を深めてくれるのである。

もし鶏が、一平方メートルの狭い中に10匹も20匹も飼われるということがなかったならば、鳥インフルエンザの脅威など起らなかったのではないだろうか？ それを糾弾する勇気を持っていたのは、たった一人の獣医だけだったのか？ そんなことをして、その人は自分のポストを失うことになりはしないのか？ 動物の健康を扱う分野での教育は、今日、物質主義と知的貧困の頂点を極めてしまっているのではないか？ サイロに詰め込まれた乾燥飼料ばかり食べさせられている若い牝牛たちを見るがいい！ 牛乳の収量を上げるためというが、牛達の多くは肝硬変を患っており、売り物にならないために7歳にならないうちに屠殺しなくてはならない。更に、(狂牛病発生後も)動物性タンパク質が餌として与え続けられている現状にも目を向けなければならない！ BSEの発生を防ぐための一時的処置として、600度の高温で熱処理がされてはいるものの、牛が本来肉食ではないという最も肝心な事実がここでは無視されている。牧畜業者の多くが、動物性タンパク質と植物性タンパク質の区別すらつかないのだ。羊を襲う伝染病、豚の口蹄病……家畜が被害にあっている病気を列挙すれば長い、長いリストができるはずで、しかもそのためにどれだけの経費が掛っていることか。その膨大な額の費用が、(問題の根本的な解

決に向けての) 動機付けとはならないのだろうか? こうした現実の全てが、歴史と共に培われてきた人間の叡智を軽視した、現代の教育システムの大きな失敗を表しているに他ならない。

(消費者であるだけでなく) 納税者でもある私たちは、無責任な高集約生産に決して異議を唱えようとしない獣医師たちと共に、この問題に共犯者として関わっているのではないか、それを証明する多くの事実を既に手にしているのではないかと、自らに問う時期に来ているはずなのだが、現実には遙か遠いところにある。例えば、抗生物質の過剰な処方が現在でも引き続き行われているが、人に対するこうした野蛮な行為の数々についても、それによって引き起こされる重篤な結果を十分に明らかにするところまでは来ていない。私たちが受けた教育は余りに偏狭であり、関係する多くの人々が、意識せずして、治療と称して拷問にも匹敵するような行為をとってしまったている—幸い、常に例外はあるもので、そうでない人もいる—。彼らは、症状の改善に固執する余り、副作用の強い薬とか、ワクチンを用いることを厭わず、病の根本的な問題を解決しようとはしない。一体いつになったら、一平方メートルの中に 15 羽もの鶏を詰め込んではいけなとか、豚一頭に 2 平方メートルは狭過ぎるといったことを、声を大にして語る勇氣ある、良識ある人達が現れるのだろうか! 動物の世界に深く関わる獣医として—しかも人はその動物を食べて生きているのである—、どうして彼らは、飼育の科学的、かつ良識ある基準を設けようとはしないのだろうか? 一体全体どのような歯車が、かくも経費のかかる、そして儲けになる構造の裏側に隠されているのだろうか? やがて、地球に生命を育んでいる全てのシステムが破壊し尽くされたとき、それでもなお、人間が生き残っていたとすれば、それは自分たちのお陰なのだと、平気で彼らは主張するのではないだろうか?

しかし、その同じ彼らが、牛にできた腫瘍(ウジバエ瘤腫)—単に、アブが牛の皮膚を刺しただけなのに—を治療するという名目で、恐ろしい殺虫剤を使い、結果的にはそれが私たちの食する肉の中に取り込まれていくのである! この点について、彼らがどんな言い訳をしているかということ、虫に刺されない方が、商品としての牛の価値が上がる! というのである。同じ問題に関してもう一つ付け加えると、良識的で、オープンな県知事のお陰で、ある地方でビオを実践する農業従事者達は、強力なロビースト達の働きかけで作られた愚かな法律を免れることができた。

獣医学関係者の手元には、最近また新たな「おもちゃ」が届けられることになったが、それは何かというと、動物の体内に埋め込む電子チップである。この周波数を発する機械により、動物たちは自分の波動とは別の、そして、健康をもたらしてくれるエネルギーシステムから彼らを引き離してしまうような、そんな新たな波動と絆を持たされてしまうのである。しかも現在では更にこれが進んで、ミニコンピューターと呼べるようなものすら埋め込まれるようになっていくというのである。進歩の名の下に見え隠れする経済的な野心が、「これで家畜が盗まれることはありませんよ」というキャッチフレーズで畜産関係者を説得しようとする。しかし実際は逆なのだ。このマイクロチップのお陰で、容易に家畜の居場所を特定でき、盗み出すことができる。そしてこうして盗まれた家畜を売りさばく新しい市場が誕生するというわけである。このような逸脱の例は数限りなく、もはや怒りや悲しみすら通り越している。子供の癌患者が年々増加するのに脅威を感じた高名な癌専門医達が、他の著名人と共に発起人となって、「パリアピール」と呼ばれる署名を公共医療機関に対して提出したが、その中には、どのようにすれば様々な行き過ぎを食い止めることができるか、正しく、そして有効な方法が示されている。

葡萄栽培にしろ、農業にしろ、或いは畜産にしろ、問題は同じである。正すべきは原因なのか、それとも結果なのか？ 健康とは一体何なのか？ 間違った実践方法によって引き起こされたただ一つの結果のみを直そうとしたところで、本質的な進歩、つまり健康な食品の生産はあり得ない。10億万本ものワクチンが売れたと言われている鳥インフルエンザだが、実はこのウイルスは遙か以前から存在していたものなのだ。鳥は何世紀も前からこのウイルスを持っていたのに、にもかかわらず死ぬことは滅多になかった。人間の養鶏の仕方がおかしくなってから始めて、危険度が増したに過ぎないのだ。裁判でも起こして真実を証明しないと、信じてもらえないのだろうか？

ワインの話しから逸れてしまったことをお許し願いたい。しかし、この恐ろしい悲劇が指数関数的な速さで拡大し続けていくのに歯止めをかけるには、何より、消費者に向けて警告を発することが必要なのである。それは市民としての義務ですらある。こうした逸脱の数々は全て利益目的で行われているのであり、だからこそ、消費者に全ての責任が掛っているのである。形式的な問題以上に、本質的なことを知っておくことが、消費者には必要である。逆に消費者がこれまでのものの買い方を改めるならば、企業側の販売戦略も、狡猾な手口も、あつという間に崩れ去るはずだ。消費者だけではない、これは私たちビオ（有機

農業)を実践するものにも関わってくる問題であり、疲弊した雌鳥たち(1平方メートル当たり6羽も詰め込まれている)に卵を産ませるなどといった農法は思い切って変えなくてはならない。

この本を締めくくる最終章では、これまで何度か簡単に触れてはきたが、私たち生きとし生けるものに命と健康をもたらしてくれる体系、つまり太陽を中心としたシステムについて話をしていきたいと思う。地球にとって太陽系とは何なのか? どうして地球は太陽系の一員なのか? その太陽がなくなってしまったらどうなるのか?

9. 太陽と恒星が作る宇宙体系 それらが地球に及ぼす影響

私たちの毎日の生活の中では、太陽との繋がりを意識することはあっても、地球やその他の惑星が所属している太陽系全体について考えるということは余りないのではないだろうか。太陽については、もしこれがなくなってしまったらということを考えれば、私たち生命は即座に苛酷な運命を辿らざるを得ないだろうということ意識するが、その存在を揺るぎないものと信じて疑わなければ、たちまち、その有難みも重要性も忘れてしまう。太陽以外では、月に関心を持つ人は多く、満月や、紅い月が昇ったりすると、思わず足を止めてその美しさに眺め入ってしまったりする。月にはそうした不思議な魅力がある。しかし逆に言うと、太陽と月、この二つだけで大半の人の宇宙への関心は尽きてしまうのである。

実際はというと、太陽系、天体系ということの問題にするならば、これを構成する星々全てが互いに干渉し合い、影響を及ぼし合っているということ为先ず理解しなければならないのであって、それは、命あるものの体内で一つひとつの臓器が、それぞれ固有の機能、独自の働き方をしながら、自らが構成する生命体全体を支えているのと同じなのである。つまり、惑星を含む太陽系の構成要素一つひとつが、シナジー効果(相乗効果)を生みながら地球に様々な作用を及ぼしているのであって、逆に地球も、その反作用として太陽系、天体系に何がしかの影響を及ぼしているのである。北欧の科学者グループの研究によると、地球で核爆発が起こる度に、100日ほど後になって太陽にはっきりとした反応が現れるそうである。こうした研究こそ、将来に向けて更に深めていかなくてはならないであり、それが現在既に実施されているというのは心強い限り

である。

デカルト的な思考に慣れてしまっている私たちが納得するためには、まず、遙か離れたところにある太陽や星がどのようにして地球に影響を及ぼすことができるのか、どのような方法でそれが可能なのかを考えなくてはならないだろう。大抵の人が最初は、地球から何百万キロも遠くにある天体が、はっきりとそれと分かる形で、私たちのこの物理的・物質的環境や私たち自身に何らかの影響を与えるなどということは不可能だと思うだろう。そこが私たちの弱点なのであり、人間の感覚が自ら作りあげる限界という罠に、私たち自身が陥っているからに他ならない。この本の中でも、命を育てているエネルギーがいわゆる物質と呼ばれるものではないこと、複雑で秩序だったエネルギー界に属しているということについて繰り返し述べ、読者の関心を高めてきた。更にそのエネルギー界は、波動と様々な種類の波長によってできており、これについては今正に科学者たちによって研究が進められているところである。火星や土星の衛星に置かれたロボットに地球から指示を出して動かすことができるのも、同じエネルギー界を通して電波を送っているからに他ならない。

同様に、太陽がこの大切な地球に作用を及ぼすのも、様々な波長によってである。そして、私たち人間と太陽とを結び付けているのも、エネルギーレベルを通してではなかっただろうか？ それなのに何故、太陽系の他の惑星やもっと遠くにある天体系が、地球に何らかの作用を及ぼしているという可能性を否定してしまうのだろうか？ 重ねて言うが、私たちの感覚器官は、この世に存在しているもの、私たちの周りにあるもののごく一部しか捉えることができないのである。

もう一つ忘れてならないのは、ある種のエネルギーの働きがあるからこそ、原子が凝集し、物質としての形ができ、私たちの五感で知覚できる状態になるのだという事実である。形ある物質になったとはいえ、その全体が波動でできていることに変わりなく、ただ、私たち人間には、絶え間なく振動している様子を感じることができないだけである。かくして細胞も、受け取る情報に応じて凝集し、(必要な器官、臓器へと) 分化していく。発生学における細胞の変異の様子を、こうした観点で観察し、研究してみるのには、非常に興味深いことである。この点についてはシュタイナーも本を一冊書いており、医術の参考にするのに度々引き合いに出していた。彼は特に、一見無関係に見える臓器と臓器の間にある隠された関係を明らかにしようとしていたということだが、こうし

たアプローチこそ、明日の医学に相応しいものではないだろうか。

地球はその至るところ、人目に触れないようなどんな片隅でも、常に、どこから届くのか分からない命のエネルギーを、波動を、そして宇宙の波長を浴びている。既にその存在は知られているが、しかしそれがどういう意味を持っているのかは分かっていない。国際的に財政支援を受けたプロジェクトでも一確かバークレー大学でも活発に行っているようだが一、高感度のアンテナやパラボラを建設して、この宇宙の言語を解読しようと、そこに何らかの一貫性を見出そうと試みている。折角このような試みを企てながら、私たちが犯している過ちはというと、この波動を地球まで送り届けているエネルギー体系について理解することなく、地球の尺度でのみ、これを解明しようとしている点である！やらなくてはならなかったのは、波長に見られる一貫性の研究なのだが。

9-1. マクロ的宇宙観（巨視的宇宙観）

可能な限り細かく物事を捉えようとするミクロ的視観とは別の方法で生命の神秘に迫ろうとするとき、私たちは、今までとは全く違った理解の仕方をする世界に踏み込むことになる。その新しい理解の仕方を一言に要約するとこのようになる。つまり、「生きとし生けるものは全て、異なるリズムや周波数、波長によって命を与えられている」と。肉体の死は、実はこのリズムが失われてしまった状態に他ならない。そして惑星も、より正確に言うと、惑星という球体も、ということになるが一というのは、惑星の物質的な本体は、単なる活発に作用する要素というよりは球体であることを示すものなのであるから一、それぞれ独自のエネルギー言語によって特徴づけられている。太陽に近づけば近づくほど、公転によって地球や他の惑星が描いている同心円と密接に結びついた波動が、より強く互いに絡み合い、干渉し合うようになるのである。

ここでは、創造の力に溢れたこの見事な太陽・天体系が、地球とどのように関わっているかについて細かく説明するつもりはない。シュタイナーや、エリザベス・ヴリード、ハウシュカ、ウォルター・クロス、コリスコ、フリッツ・ジュリウス等々といった人達が、私たちにも理解できる言葉を使って、既に書物に著し、解説をしてくれている。ただ、その中に書かれたことを理解するのは容易ではなく、スポーツを習得するときと同様、皆、少しずつ時間をかけて消化・吸収している状態である。ここでは、この体系の最も基本的なことを再度強調するに留めておきたい。即ち、生命を形作っているものは、物質としてこ

の世に出現する以前に、最初にエネルギーとしての情報だったということ。この情報を基に、素材が集められ、物質としての形を持つことになったのである。素材は鋳型にはなり得ない。鋳型に収められた中味なのである！ 少しずつではあるが、この点についての理解も深まりつつあり、つい最近も、研究者たちが、人を脅かす疾病一つひとつについて、そのエネルギー分布図を測定する方法を発見し、ある将来性の高い企業で目録作った。これを利用すれば、ほとんどお金のかからない新しい予防法への道が開けることになるはずだ。ある特定の波動域を早期診断することにより、物質レベルで病が病として発現する可能性を予測することができ、疾病の予防へとつながるのである。言い換えれば、病気に特有の波長なり、波動分布図を目印とすることができれば、例えまだ病気として表に出ていなくても、その危険性が高いことを察知することができるわけである。

これだけでは余りにも不完全な説明でしかないが、しかし基本的なところはこの通り、つまり、ある特定の物質的な発現に関わることが分かっているエネルギーレベルでの情報、或いは波動域が存在すれば、その後必ずそれが物質的なレベルで発現するということである。更に単純化して言えば、太陽・天体系の全てが、幾千もの波動分布の集合として成り立っているのであり、これが地球と他の天体との間の情報交換をも可能にしているというわけである。何度も繰り返して言うが、全てが情報なのである。

9-2. 地球を構成する物質の背後に隠された活発なエネルギー

物質的に見ると、地球は、鉱物、植物、動物、そして人間で構成されており、それは私たちの感覚でも認識することができる。しかし、こうした物質的な構成要素は全て、特別な情報を持ったエネルギーによって集められ、密度を持つことになった様々な粒子から作られているのであり、このことを忘れてはならないのである。

一体何が、水素原子 2 個を酸素原子 1 個と結合させ、水の分子を作らせるに至ったのか？ こうした問いを發することこそ、重要なのであり、何故ならば、実際には、水はただ単純に 2 個の水素原子と 1 個の酸素原子だけで出来ているのではないからである。確かに、化学産業界に仕える有能な農業技術者や獣医を育てるために、私たちは学校でそのように教えられてきた。しかしこれでは不十分なのである。水は、この 3 個の原子を持った化合物であるという以上に、

この3個の原子をわざわざ選んで、結合させる力を持ったエネルギーそのものなのである。エネルギーなくして、水は存在しないのだ！

もっと分かりやすい例で説明しよう。おやつを食べるとき、ケーキを食べるのが良いか、それともその原材料一つひとつをばらして食べた方が良いか、皆さんはどちらをお好みだろう？ 料理評論家も、独自の方法で材料の一つひとつを選び、混ぜ合わせ、量を計って、見事な一皿に仕上げた才能ある料理人の名前しか、皆さんには紹介しないではないか？²¹ では何故、物質が物質としての形を持つために働きかける力のこと、バイオダイナミで言う形成のエネルギーのことを認めようとならないのか？ バイオダイナミやホメオパシー、或いは音楽療法などなどで使われているこの力、エネルギーは一体何なのか？ 太古の昔からその効能が知られ、近年私たちの間でも広く知られるようになったこの力は一体何なのか？ 実はこの力は、物質形成のレベルにおいて、素材を共鳴し合い、反響し合う状態におくだけで、それ以上のことは何も行わないし、またその必要もないのである。

9-3. 太陽の二つの側面

では、どのように、この形成のエネルギー、即ち、ものに形を与える力を使えば良いのだろうか？ この点についても、ルドルフ・シュタイナーは、その著書《Le Cours aux agriculteurs》（農業従事者に向けての講義）の中で、そしてその他の著作の中でも—その数は300を越える—触れており、生命の背景にあるものについて繰り返し語っている。地球の生命は、不可視の世界と可視の世界、言い換えると、私たちの目では見ることができないが、ものに形を与えるエネルギーに満ちた世界と、既に形を与えられ私たちの感覚で捉えることができるようになった世界との間を行き来しているに過ぎないのだ。

この循環は、ものに形を与える求心力と、ものから形を奪う遠心力という二つの力が干渉し合うことによって起こる。植物が、種から芽を出し、茎を伸ばし、花を咲かせた後、花粉をつけたとする。この段階になると植物は既に、ほとんど非物質と言っても良い状態になっており、重力による影響からも解放されている。だからこそ、花粉は何千メートルもの高さにまで飛ぶことができるの

²¹ そして正に、このシェフに相当するのが葡萄の木である。葡萄の木だけが、根や葉を通して、その土地特有の豊かさを、その年特有の気候をしっかりと掴み、果実へ、そしてワインへと変えることができるのである。そして、葡萄がこの仕事を成し遂げるのを可能にするのは、バイオダイナミだけである。しかも正しくその本質を理解した上で実践されなければ効果は期待できない。95%のバイオダイナミなど意味がないのである

であり、求心力に支配され、土地としっかりと結びついている根にはこんなことはできない。かくして植物の生命サイクルは、花粉というほとんど非一物質化した状態で終わりを向かえ、それが種子というエネルギーが最大限濃縮された形へと生まれ変わっていくのである。春に融合し合ったエネルギーが、秋を迎えるとともに今度はバラバラに離れていってしまう。

そう、私たちの周りでは、常に求心力と遠心力とが干渉し合っているのだ。香りや味、色合いといったものは、力が逆転したとき、つまり植物の成長のプロセスが止まったとき、始めて物質界へと降りてくることができるものであり、この力の逆転なくして果実の良い実りはあり得ない。そしてバイオダイナミのプレパレーションならば、植物のこのプロセスに手を貸すことができるのである。もちろん、この二つのステップは、必ずしも完全に切り離されているわけではない。時にそれぞれが干渉し合うこともある。とはいえ、無理に成長を促すような育て方をしたところで、優美な味わいを得ることは決してできない。そんなことをすれば、結実という最終ステップの背後に潜むエネルギーの濃縮プロセスが抑制されてしまうからである。だからこそ、葡萄の木も、言うなればバランスが拮抗し合う中で見守ってやらなくてはならないわけで、良いワインを作るためには、成長を抑えるということも時に必要になるのである。成長が弱まれば、そのために使われていた力が今度は結実へと注がれる。

実際、バイオダイナミのプレパレーションの中には、ここに働きかけて効果を発揮するものもある。ここまでの説明でお分かり頂けたと思うが、この二つの拮抗する力のことを考慮せずして、地球の生命の営みを理解することはできない。これと同様、それぞれの惑星には植物の受肉、つまり植物が植物としての命を持つための手助けをする流れがあり、同時にまた、植物が成長を止め、肉体から遊離する、つまり生命が尽き肉体を失うための手助けをする、相反する流れも存在する。地球への太陽の働きかけも、生命のこの二つの相対立する様相、即ち、地球で私たちが春と秋と呼んでいる二つの対照的な局面に何らかの関わりを持っているのだろうか？　ここではこれまで見てきたような様々な制約に縛られることなく、エネルギーはもっと自由に働きかけているが……。何より心に留めて欲しいのは、太陽そのものが二つの力を生み出しているのではなく、あくまでもその調整役として働いているに過ぎないということである。

バイオダイナミには、太陽によって引き起こされるこの二つの相（春と秋）を支えるプレパレーションが二種類ある。一つが植物の体内で物質を活性化させる

もので、これは牝牛の角の中に牛糞を詰めて作られる。もう一つがこうして活性化された物質に形を与えるもので、こちらは牝牛の角の中にシリカを詰めて作られる。その他のプレパレーションは、それぞれノコギリ草、カモミエ、イラクサ、樫の木の皮、タンポポ、カノコ草を使って作られるが、これらは、植物が、地球の周りにある5つの惑星と月、計6つの星が有する原型エネルギーと緊密な関係を持てるように働きかけてくれる。バイオダイナミは、太陽系の星々が、ある特定の時期に、地球上で行おうとする働きにほんのちょっと手を貸してやるに過ぎない。ところがその地球はというと、私たち人間の無理解によって、(太陽や星からもたらされる情報が通過する)大気が、エネルギーのゴミ箱と化してしまっているのである。大気は何よりも先ず、地球が支配する掟と宇宙が支配する掟とが交感し合う場としてあるのであり、これなくして、地球は屍も同然となってしまう。大気は幾つかの層により、整然と秩序だって作られている。エネルギーレベルでこの大気圏を汚染してしまうということは、地球に届けられる生命のエネルギーを弱めるということに他ならず、詰まるところ、人間にもたらされるエネルギーをも弱めてしまうことにもなるのである。

こういう状況だからこそ、今日、バイオダイナミがこれほどまでに重要視されるようになったのであり、エネルギーレベルにおける深刻なアンバランスに対する一つの答えと考えられるようになったのである。バイオダイナミは、弱ってしまった地球とこれらエネルギーの源との絆を、もう一度しっかりと締め直してくれる。だからこそ、バイオダイナミがその対極にある放射能に対してどのような作用を及ぼすかも理解できるのである。バイオダイナミはものに命を与え、一方、放射能は命を放逐してしまう。放射能が自然界に存在するものであるとき、これは物質が年代を経る際必要な変化のプロセスの一部をなし、場合によっては人間にとって有効な作用すらもたらす。例えば、プラハの街は放射能が非常に強いことで知られているが、この街がどれだけ多くの優れた芸術家を輩出したことか！ しかし逆に、人間がこの放射能を人工的に作り出したとき、つまり、地球の力によって十分に濃縮された熱を閉じ込めていた電子(エレクトロン)の帯を科学の力で解き放してしまったとき、こうしてできた放射能は極めて危険なものになってしまうのである。

これが今から200年ほど前のことであれば、当時の人間にとってバイオダイナミなど大して重要な意味は持たなかったはずである。しかし今日、ワインや食物の味、質といった面ではもちろんのこと、地球が失いつつあるバランスを保つために益々必要となる生命のレベルでも、バイオダイナミは不可欠なものとな

りつつある。気候の変動が続き、私たちはその重要性を理解せずにはいられないところまで来ている。実際、気候は、バランスと調和によってのみ成り立っているのだから。異常気象が単に二酸化炭素の排出によるものに過ぎないなどというのは、悲しい作り話に過ぎない。気象の流れ全体を司っているエネルギーシステムそのものが、深刻なダメージを受けているのである。科学者の中で、生命の背景にあるものを理解しているものはごく僅かに過ぎない。

9-4. 「情報を与える」システム

太陽や天体の作る宇宙体系は、ものに形を与える力、即ち引力と、その逆の斥力という糸を使って様々な布地を織り上げる力を地球にもたらしてくれる。季節の移り変わりに応じて、命を与えたり、命を奪ったりするのだ。物質という牢獄に囚われていたエネルギーを解放するということは、純粋な命の力へと通ずる扉を開くことを意味し、この生命力が持てる力を最大限発揮できるようにしてやることでもある。ビオディナミとは若干異なっているが、これこそがまさに、ホメオパシーと呼ばれる治療法の根本である。希釈すればするほど、物質としての存在も薄くなり、その効果は増すというわけである。物質界の通念とは正反対である。この二つの相対立する世界が、私たちの周りでもともに活発に作用し合っており、互いに補完し合っているのである。地球に息づく生命を理解するためには、この両方を理解する必要があり、片方だけを見てもう一方が見えないなどということはあってはならないのである。

かくして、太陽系は、物質としてのレベルに達し、かつ生命力を持った有機体を地球に誕生させるという使命を負った一つの「情報」システムとして捉えなければならないのである。この命のエネルギーが、物質が極度の硬直状態に達し、消滅してしまうようなとき、生命そのものも終わりを向かえる。命のエネルギーが、もはや物質に対して十分な影響力を及ぼすことができなくなるからである。これが、私たちが「死」と呼んでいる状態のことである。しかし「死」は、あくまでも生命のレベル、或いは物質のレベルでのことであり、エネルギーレベルでは、実は死ぬことができない。「形を変える」ということしか有り得ないのである。これこそ、ゲーテの語った「自然は、新たな生命を誕生させるために死を招かれた」という言葉の真意なのである。

太陽系は、ご存知の通り、8つの惑星とそれぞれの衛星とで出来ているが²²、その中であって太陽は、メンバーに刺激や弾みを与えるオーケストラの指揮者のようなものだと言われている。そしてそれぞれの惑星が、植物に対して、その成長や、成熟過程において、ある特定の働きをするべく役割を担っている。それぞれの惑星が、地球に生きる生命の構成要素の一つとなっているのである。どの惑星も、地球と同様、情報の発信者であると同時に受信者でもある。例えば、科学者も把握している通り、木星は、電波を非常に良く吸収する天体であり、その力は場合によっては太陽を越えるとさえ言われている。更に、木星は、その衛星が地球や太陽、或いは木星自身とある特定の角度を作って並んだとき、自分が受け取る以上の電波を発するとされている。

これは、電波をより良い状態で受信するためにアンテナの向きを変えるのと同じことを意味する。私たちが昔は良くそうしたものである。地球の周りにある惑星の動きも、実は同様で、言い換えれば、太陽や惑星の並び方によって、電波の受信、発信に好都合な時期とそうでない時期とがあるということなのである。植物一つひとつの成長過程、或いはある特定の時期に行う活動（花をつけたり、実をつけたり……）、或いはまた地球と惑星との位置関係などに応じて、ワインや野菜の質にプラス、或いはマイナスの影響が及ぼされるということでもある。アンドレ・フォシュリエという科学者が、リヨンカトリック大学の研究所で所長をしていたとき、5万もの多型クロマトグラフィーを作ったが、これを使って彼は、天体障害（月食や日食、天体間の軌道の交差、惑星間の星食などなど）と実験で得られる像の乱れとの間には明らかな相関関係があるということを実証してみせた。

以前にも引用したラコヴスキーだが、彼もまた、ワインの味を人工的に変える技術などなかった時代に、太陽の黒点運動が活発になる年と、グラン・ヴァンと呼ばれる最上級のワインができる年との間に相関関係のあることを明らかにしている。私たちが、北極でオーロラが頻繁に見られる年は、シリアル類の収穫に良い影響があるということを知っているし、このことは、ドイツのタン夫人が自らの著書の中で、そしてあの貴重な農作カレンダーの中で、随分以前から証明してくれていることでもある。月による影響その他について言われて

²² 原文では「太陽系は5つの惑星と地球の衛星である月とで出来ている」となっていたが、日本語訳ではより現実的に上記のようにした。ただし、天王星、海王星は、その他の5つの惑星に比べて遅れて太陽系との関わりを持つようになった。生命の誕生に及ぼす影響も遥かに少ないということである

いることは、太陽系全てについても当てはまるといって良いだろう。地球の衛星である月は、鏡のような効果を持ち、地球と太陽の間の仲介役のような働きをしている。電磁場には月も非常に大きな影響を及ぼしており、そのことはつまり、地球上の生きとし生けるもの全てに何らかの影響を与えているということでもある。実際、畜産の現場でも、満月の夜に交尾をさせるか、新月の夜に交尾をさせるかによって、家畜の雌雄を産み分ける方法が使われているが、この先人たちの知恵は、ビオディナミにおいて現在、信頼に足る方法としてほぼ確立されている。

9-5. 生きた体系

ここでは、生きた体系としての太陽系について説明しておきたい。太陽系は、全ての部品が休みなく同じ動きを繰り返すモーターのようなものとして、この世界を統べているのではない。太陽系の下では、何一つとして同じことを繰り返すものはないのである。惑星の公転周期も、実は僅かながら毎回ズレが出ており、中でも最も不規則な水星の公転周期は、8日以上ズレが観測されている！ 太陽とて例外ではなく、惑星たちの軌道に多少引っ張られるようにして、円の中心からぶれる動きをしている。そして、太陽に対する惑星の公転面も、回転速度と同様、常に微妙に変化を続けているのである。こうした事実全てが、まるで生きもののような太陽系の姿を明らかにしているのではないだろうか。

太陽と、その周りを回る地球や他の惑星たちがみせるこの全体舞踏は一原子の中に囚われて核の周りを回り続ける電子のそれとも似ているが一、実際には独創性に満ちており、その独特の動きが、特徴ある豊かさを私たちにもたらしてくれるのである。葡萄栽培家や農業従事者は既にその恩恵を認め、感謝し、実際に畑の作業の中で活用している。この点については、また後ほど詳しく説明することとしよう。こうした不規則さが、私たちの毎日を、決して同じことの繰り返しではない、少しずつ違ったもの、一度きりのものとしてくれるのであり、私たち自身もまた、昨日でも明日でもない、その日だけの特徴を敏感に感じるができるのである。前に既にお話したが、太陽は毎秒 30 キロという速さで移動しており、私たちの銀河系の一部でも毎秒 200 キロ、銀河系全体となると毎秒 600 キロという速さで移動し続けていることになっている！

もちろん、移動の速さは動かない点を基準にしなければ測ることはできず、これらの数字も、みかけの速さと呼ばれるものである。自分の乗った電車が動き

だしたと思ったら、実は隣の電車が反対方向に走り出していただけだったという経験をしたことは誰にでもあると思うが、この経験によって始めて、相対的な速さというものを実感できるのである！

9-6. 叡智を活かす

こうした人間の叡智を実際に使う場合、必要となる基本的な規則は実にシンプルなものばかりである。それは二つあって、どちらも、この本の文頭で説明した物質の4つの様態に立ち返るものである。まず一つ目の規則として、惑星や天体のインパルス（刺激、働きかけ）は、物質の4つの様態と密接に関わりながら、4つの基本的な方向に向かって生じるということ。即ち、結実（熱のインパルス）、開花（光のインパルス）、葉の成長（水のインパルス）、そして発根（土のインパルス）である。

二つ目の規則は、惑星の位置によって、即ち、地球に対しての、そして太陽の周りを回る際、丁度、惑星の後ろに来る星座に対しての位置関係によって、時に強く、時に弱く、また調和のとれたものだったりそうでなかったり、様々に異なる形で影響が及ぶということ。ここでは角度と面の二つの法則が関わってくる。場合によっては、即ち、月食や日食、月や惑星の軌道と太陽の軌道面との交差、そして月が近地点、遠地点に達したとき（月が地球に最も近づく点と最も遠ざかる点）など、ある特定の時期には、極めて好ましくない影響が見られたりする。

もちろん、地球上至るところが、これらの影響を受けているのであって、それは化学物質を使った農業をしようが、ビオをやっていようが、或いはビオダイナミをやっていようが同じである。とはいえ、化学的農業によって生命因子と呼ばれるもの—例えば土中に住む微小生物のようなもの—の大半を殺してしまったり、エネルギーを受け取るレセプター（受容体）の役割を持つ植物の葉を毒で冒してしまったりすると、植物そのものが、天空から届けられる様々な働きかけを受けとることができなくなってしまうのである……。この状態を人間に例えるならば、コミュニケーションの機能を、一部失ってしまった病人とでも言えるだろうか。化学分野での開発が進めば進むほど、植物は、質の面で非常に豊かな「生命の背景にあるもの」に耳を貸すことが出来なくなる。だからこそ、植物を原料にして作られる食べ物も、人間にとって、波動の質の貧しいものとなってしまったのであり、その様子は、実験によっても—高感度

結晶実験—具体的に見ることができる。因みに、この実験は、原材料のエネルギー組織の観察を可能にするものである。言葉を換えれば、愚かな農業が、命を育てくれる広大な世界から植物を引き離し、その結果、絶えず化学薬品に頼らざるを得ない状況を作り上げているというわけである。地球に生きる全ての生きものは、人間、とりわけその思考のエネルギーを始めとして、しかしそれだけではなく、植物、そして植物とともに生きる特殊な動物相、一般の動物、昆虫、鳥、そして微小生物など、姿、形、特徴も様々ながら、しかし、例えどんなに小さいものであろうと、それら全てが、この世界で果たすべき役割を担っているのであり、それは絆のようなものとして、地球とマクロコスモス（巨視的宇宙）とを一つに結びつけるためなのである。私たち人間を含めた全ての生きものが、この両者の仲介役としての役目を背負っているというわけである。

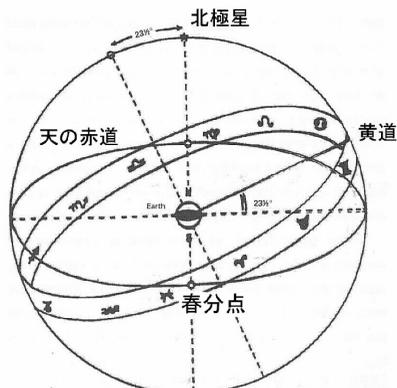
このような理解をして始めて、早急に従来の農業のあり方を考え直さなくてはならないという、その必要性の大きさについて、関係者の理解を深める手助けができるようになるのである。

マクロコスモスとその構成要素について語るとき、ドイツのマリア・タン女史が40年もの歳月をかけて行った緻密で、かつ気迫に溢れた作業に敬意を表さずにはいられない。彼女は、植物界全体に対する、惑星や天体の及ぼすインパルス（刺激、働きかけ）の一つひとつを具体的に測ろうとしたのである。彼女の作った「これからの農業」に関する手引書は、今後の研究に向けて素晴らしい突破口を開くものとなった。例えば、何代にも渡って、最も適した惑星や天体から届けられるエネルギーを受け取れる状態に置かれていた小麦の種は、正しいピオディナミを行う限り、病気に侵されるリスクがほとんどゼロにまで抑えられるのである！ これは大変興味深いことではないだろうか。このとき、小麦は古のエネルギーを身に纏い、これを食する人間をも十分な栄養で満たしてくれるのである。この方法は、もちろん他の植物に対しても有効である。経済重視がもたらした人工的、化学的なものの弊害は消費者の目にも少しずつ明らかになりつつあり、それらが引き起こした重大な悲劇の中から、今ようやく、こうした新しい動きが生まれつつある。

地球や惑星が太陽の周りを回る軌道は、極めて狭い帯域の中に納まってしまう。この同じ帯の背後にあるのが、黄道帯の星座である。では黄道帯とは何か。まず惑星同士の位置関係を考慮し、次に天体が作る星座に対しての惑星の位置を描く、太陽の周りにおける全ての惑星が回転する帯を延長していくと、その延ば

した先にできる帯が、いわゆる黄道帯と呼ばれるものである。

【太陽面に対する惑星と地球の軌道面】
(背景に黄道十二宮を配した)



Sidereal rhythm

出典：マリア・タン著<<Le Calendrier des semis>>

もし、私たちの太陽系が、そしてこの銀河そのものが、驚くべき速さで絶えず宇宙を移動しているということを考えたならば、またもし、突然起こるフレアやその他諸々の太陽の性質を考慮するならば、私たちの一日、一日も二つと同じものがない、その時、その世界に唯一のものだということができるのではないだろうか。ということは、この宇宙の場—ファラデーが1831年に、ラジオ電波の研究をする中で、彼自身、「放電するものと帯電するもの

を結び付ける場」と呼んだもの—を通して地球に届く太陽系からのインパルス（刺激、働きかけ）も全て、絶えず変化を続けているということである。惑星と惑星とが作る角度も、地球と惑星とが作る角度も、それぞれ、エネルギー効果を持っており、それは数の法則によって異なる働きを持つ。これは神聖な高次建造物を作る際に使われる数の法則と似ているが、今回問題となるのは位置であり、角度や面、比率との関係であり、それらが毎分毎分時間とともに変化するのである！

先ほど説明したアンテナの話と、非常に良く似ているかもしれない。何を栽培するかに応じて、植物というアンテナを、最良の形で、惑星や天体の状況へと適応させてやる必要があるのだ。ここまで話しを進めてくると、生命の最も根源的なところで、好都合な時期と不都合な時期とが存在するということを理解して頂けたのではないかと思います。言うなれば、物質が調和のとれた形成へと向かうための「情報」もあれば、同じプロセスを混乱させてしまう「情報」もあるということである。マリア・タン女史はこの点についても100枚ほどの図を残している。ある土地で生命の数が増えることを期待するようなときは、今お話しした天体どうしの位置関係や角度のことを思い出してもらおうと良い。惑星の上昇や下降のサイクルも、異なる現象をもたらす。月のもたらす影響については、実際に起こった結果を注意深く観察することで、これまでも既にかなり知られてきたが、これとて、月だけでなく、周りにある全ての惑星を含めて

捉え直すことが必要であり、この、より大きな天体の位置関係の中で、例えば、それぞれ固有の支配星を持つと言われる樹木の一つひとつに最も適した健康の力を見出していかなくてはならないのである。樹木の種を撒くときは、その樹木の支配星が上昇サイクルにある時を選ぶし、移植するときは下降サイクルに入った時期を選ぶ。土星のように地球から遠く離れたところにある惑星に関しては、場合によっては（サイクルが非常に長い）植樹するのに15年も待たなくてはならないということもあり得るが、そのような弊害がないように、ちゃんと上手い方法が編み出されている。

しかし植物の栽培に際して考慮すべきはこれだけではない。その他様々なファクターを勘案することが必要で、例えば、月や惑星の交差なども重要である。この天文学で言うところの「交差」だが、ある天体が公転などの際、他の天体の軌道面を通過するときのことを言う。ここでは天体の動きと関連した多様なファクター、多様な影響について大まかなイメージを持って頂ければそれで良く、これ以上は踏み込まないことにしよう。更に深く知りたいという方は、この本の終わりに記された参考文献の中から必要な本を選んで読んで頂ければと思う。一つ付け加えるならば、葡萄は、本質的に水星に支配される植物であり、できれば移植はこの惑星が下降期に入ったときに行った方が良い。

私たちを取り巻く太陽・天体系は、エネルギーレベルでの豊かな情報を、毎日、その日限りの非常に貴重なものとして届けてくれるのであり、だからこそ、私たち自身、その中のある特定の効果を助長したいと思うならば、葡萄に対して今日何ができるのか、ということを考えなくてはならないのである。というのも、こうした知識の全てが、実際に私たちが自分の庭や畑で実践することで、確認することのできる素晴らしい結果をもたらしてくれるのだから。例を挙げればきりが無い。命を育むエネルギーが存分にその力を発揮しているところでは、どんな植物も、絆が結ばれている限り、例えどんな些細なものであっても、宇宙から届けられるインパルス（刺激や働きかけ）にしっかりと反応することが出来る。言うなれば、自分の持てる知識と生徒を一体化させる力を持った教師ならば、どんなインパルス（刺激や働きかけ）を生徒たちに与えても正しく反応を返してくれるのと同じである。

少し考えてみさえすれば、これは何も驚くにはあたらない。周りを見回してみれば同様の例は数多くあり、後は同じ道筋を辿れば良いだけである。人によっては、ただ傍に居たり、考えたりするだけで、植物の成長を早めたり、遅くし

たりすることが出来るらしいということは、既に科学的に検証されている。こうした「心の力」は決して無視されるべきものではないし、むしろその逆である。私たちも、多型クロマトグラフィーや結晶実験によって、日食が起こる24時間前には、植物たちの性質が変化することをつきとめたし、また動物の中にも、地震が起こる一日以上前に、それを予知することのできるものがあるとのことである。更に人間について言えば、いわゆる「プラシーボ効果」というものがあって、情報だけ与えて実際には何もしないのに、効果が出るという現象もみられる。こうした力が、嘲笑されることなく、建設的に開発されていくことを、是非、期待したいものである！

実際、科学者たちの中には、この力についての研究を更に深めようと、取り組みを始めたものもあり、エネルギーシステムについてだけでなく、実際の効果を通して研究を進め始めているとのことである。ここから何か新しい発見があったとして、実際にそれを使う人間が良識をもっているかそうでないかによって、偉大な進歩となるか、重大な問題が引き起こされるかの分かれ道となる。

難しいのは、正にこの点なのである。人間は、この知識を利用する準備が出来ているのだろうか？ ビオディナミでは、リスクを冒すことは考えていない。私たちは、今ある絆を強めることで充分だと考えており、妥協策として更に新たな絆を作る必要があるとは思っていない。もっと具体的に言うと、数ヘクトリットルのワインの味を一時的に改善しようとする場合、ほんの少量の水にエネルギーレベルでの情報を与えるだけで充分である。しかもそれだけで、例えそのワインがどのような農法で作られてものであれ、それをなかったことにしてくれるだけの効果があるのである。エネルギーレベルでの逸脱がどれほど大きな経済効果を持ち得るか、これでお分かり頂けるだろう！ プラスはマイナスを惹きつけ、陰は陽を必要とする。しかしその効果は長続きせず、やがてはひっくり返ってしまう。

9-7. 現場での実践

では、具体的に、葡萄の木に対する惑星や天体の特別な影響力を強めるためには、どのような作業を行えば良いのか？

特に面倒なことは何もない。葡萄にとって状況が好ましい場合は、天体からの影響が強まるようにしてやるだけで良いのだ。ではその非常に好ましい状況とは、どういう状況を指すのか？ 熱のインパルス（刺激、働きかけ）をもたら

す黄道帯の星座は3つある。葡萄の木が対象となる場合、このインパルスは、結実のエネルギーということであり、葡萄の木に実をつけさせる働きを持つ。

その3つの星座とは、牡羊座、獅子座、そして射手座である。3つの星座のもたらすインパルス一つひとつの特徴ある性質については、これ以上踏み込んで説明しないが、もし、興味を引かれるようならば、フリッツ・ジュリウスの素晴らしい著作を読むのも良いし、数多くの文献を残したマリア・タン女史、更により明確に書かれたものとして、クラニッシュの作品なども参考になるはずである。ワインの複雑な豊かさを最大限引き出すためには、それが可能な状況のとき、葡萄の木をこれら3つの星座と結びつけている絆を強化してやる、ただそれだけで良い。これが「3分処方」と呼ばれる方法である²³。もちろん、全く別の考え方をすることも可能である。重ねて言うが、ここで話しているのは占星術ではなく、天文学である。つまり、現在の星座の位置に基づいて話をしているのであり、今から2000年前の位置を基にしている占星術のそれとは、ほとんど30度ずれてしまっている（だからといって、占星術という星座が、現代の人間に何の影響も持たないということではない）。

熱のインパルス、即ち結実のエネルギーをもたらすものには、今挙げた3つの星座の他に、別の二つインパルスがあり、水星と土星という惑星が関わっている。一方は地球より短い一年（公転周期）を持ち、もう一方は地球よりずっと長い一年（公転周期、30年）を持つ。太陽を一周するのにかかる時間が大きく違うだけでなく、この二つの惑星は、それぞれ非常に異なる影響を私たちに及ぼしている。水星は、「動き」の中で役割を果たすのが特徴で、樹液の循環や、成長、障害物や病気の回避に作用する。一方、土星は、「味の形成」に重要な役割を果たし、成熟や、濃縮に関わる。私たちがワインの中でも特に好むのは、その木星的な特徴か、若しくは、土星的な特徴である²⁴。クラニッシュの著作の中で、この点についても詳細が解説されているので参考にされたい。

この二つの惑星からのインパルスなくして、瑞々しく味わい深い果物を手に入

²³ 黄道十二宮のうちの3つの星座の作る角度が120度になることを3分といい、一般に吉相のアスペクトとみなされる

²⁴ シュタイナーも語っている通り、味や香り、また果実の熟成も、土星と木星の影響なくしては有り得ない。この二つの惑星が作用するために、果実は長く保存することができるのである。両者の影響を受け取ることのない葉や花ではそうはいかない。2008年は、一年を通して、射手座に木星、獅子座に土星があり、他のマイナス要因がなければ、味の面で、非常に期待の持てる年となりそうである

れることはできない。ではどうやって、いつ、この二つの惑星との絆を強めたら良いのか？ この疑問こそが、葡萄栽培家にとっては鍵となるのではないだろうか？

一つ例をとって説明することにしよう：水星と土星という二つの熱に関わる惑星のうちのどちらかが、同じく熱のインパルスを持つ星座と向き合ったとき、シナジー効果により、両者の影響力は助長され、より強力なものとなる。更に、二つの惑星のうちの一つ、または両方の地球と作る角度が、例えば、120度、若しくは180度になる場合—後者の場合を天文では「衝」（対峙の意）と呼ぶ—、地球は、二つの惑星を結ぶ直線の丁度真中に位置することになり、その影響をより受け易くなる。逆に言えば、惑星からの働きかけが、最大限、地球上で発揮されるということである。他にも好ましい結果をもたらしてくれる星の配置はあるが、ここでは読者の理解を助けるために、その中の幾つかを例として挙げるだけに留めておきたい。

この例に従って作業を行えば、命の声に耳を傾けつつ、バイオダイナミを実践している葡萄畑は、惑星の位置関係のもたらす利益をあらゆる面から享受することが可能になる。しかしながら、私たちの葡萄にとって更に興味深いのは、こうしてもたらされる天体からの好影響の恩恵を受ける可能性を、例えば、畑での正しい耕作や、ダイナミゼーションを行うことによって、更に増幅させることができるということである。具体的には、適した時期に軽い畑の表耕、2回目の耕耘（コウウン）を行うことによって一畑の表面を覆っていたものを取り除き、中の土を外界に向けて開放してやることになる—土中の微小生物が、天体から届くエネルギーにより敏感になるよう助けてやるのである。窓を覆っていた雨戸を開けると、外気をより多く取り込むことができるのと同じである。

同様に、この適期に、プレパレーションのダイナミゼーションを行う。ダイナミゼーションは、幾重もの渦を作ることによりエネルギーを凝縮していくが、この場合は更に、その日の天体配列に特有のエネルギーを高めていくことになる。後は、こうして作られた溶液を葡萄の葉と畑に撒きただけである。葡萄の木は、神経と同じくらい鋭敏な生きものと言われているだけに、こうして増幅された天体からの情報を敏感に察知していく。これまでも繰り返し言ってきたことだが、これらはあくまでも、バイオダイナミの一面にしか過ぎない。

バイオダイナミでは、複数のプレパレーションを年に数回規則的に使用すること

で、先ずは十分に効果を得ることができる。逆に言うと、太陽や宇宙のメカニズムについて何も知らなくても、この農法を実践することは充分可能なのである。とはいえ、最も適した時期を選ぶということは、気象条件その他を考慮するのは別に、バイオダイナミの力を補完する非常に重要なファクターとなる。実際、これを実践することにより、収量、病気に抵抗する力、保存、味わい、香りといった面で、はっきりとした違いが見られるようになる。私たちが行ったことと言えば、植物をその背景にある世界、即ち、原型のエネルギーと呼ばれるものと結びつけてやっただけであり、しかしそれによって、それぞれ固有の特徴が地球上で存分に発揮されることとなったのである。音楽の表現を借りれば、アコースティック、つまり音響を改善するということになるだろうか。

一つひとつの惑星や、星座がそれぞれ非常に独創的な特徴を持っているが、私たち自身がそれらの本質を深く理解しようと努めることにより、葡萄の木にポジティブで創造的な影響をもたらす可能性が開けてくる。そしてそれは取りも直さず、私たちの畑に相当だと思われる宇宙からのインパルスの一つ、また一つと、葡萄が取り込む手助けをしてやることにもなるのである。例えば、太陽が射手座にあって、地上に植物の大半がまだ芽を出していない冬の真只中、求心のエネルギーが世の中を支配しているこの時期は、太陽が牡羊座に移り、同じエネルギーが求心から遠心方向へと変わる春とは全く異なる様相を呈しているはずだ。

また、月の存在も忘れてはならない。月は地球の周りを回りながら、28日間かけて黄道帯を一周する。このとき、黄道帯上にある星座それぞれの、独創的なエネルギーを—もちろんその一部でしかないが—直接の影響とは異なる形で、毎月、地球に届けてくれるのである。こうした間接的な働きかけをどのように活用するか、これを熟慮することこそ、技として、芸術としての農業を理解することにつながるのではないだろうか？ 太陽や惑星の作る天体系を十分に理解した上で簡潔な作業を行うことで、私たち自身が、人間としての資質により、植物の日々の成長に影響を与えることができる。だからこそ、例え少しずつではあっても、生命を育むこれらインパルスと呼ばれるものへの理解を深めていかななくてはならないのである。繰り返して言うが、命は、地球に与えられた恩寵なのである。

今まで話してきたことに加えて、物質的なレベルにおける、周囲の風景も含めた広い意味での栽培環境、生育の良く、適したセパージュの選択、栽培地に適

応した動物などなど、多くのファクターがまとまって、葡萄栽培の全体が構成されるようにならなくてはならない。ファクターの一つひとつが、生命のインパルスを受け取るアンテナのようなものとして葡萄の成長に大きく関わってくるのであり、一つにまとまることで、一枚の楽譜を作り上げる音符のような働きをも持つ。音の数が多ければ多いほど和音が増えるように、私たちの作るワインも音楽的で、豊かな波動に溢れたものとなる。

酸化に負けない力は一酸化と過熟とを混同しないで頂きたい！一、言い換えると、熟成に伴って生じる破壊の力に対抗できるエネルギーは、ビオダイナミで作られたワインの方が一般のものより遥かに強力である。場合によっては、抜栓後、数週間にも渡って、味が深くなり続けるワインもあるほどで、それはデモンストレーションでも既に明らかなはずである。普通のデギュスタシオンは短時間で行われることが多く、本物のワインにとってはその本領を発揮することができない。慌しく味をみようとするれば、「あつというよなもの」や、「こつり厚化粧したもの」ばかりが目をはくことになる！

葡萄栽培におけるビオダイナミについて大急ぎで要約してみたが、私の目的はただ一つ。ワインに魅せられた人達に、ビオダイナミが単なる迷信でも、根拠のない宇宙観でも、ましてや情報伝達の巧妙な戦略などでもなく、私たちの一人ひとりがそれぞれのリズム、それぞれのやり方、またそれぞれの理解の仕方、長い年月をかけて取り組んできた現実なのだということを分かって頂きたいということである。

ビオダイナミによる農業を実践することにより、物質界に止まらない、広大な広がりを持つ命の掟を発見することができる。ビオダイナミでは、例え一歩一歩ではあっても、時間と共に着実に世界各地へと広がっていくに違いない。大衆好みの諂うような人工的な味を地球が生み出したものと誤って信じている消費者に、その土地、そのセパージュ独特の豊かさを存分に発揮した健康的なワインを提供するためには、ビオダイナミこそが残された唯一の方法なのである。万が一、人工的、化学的なものが法的に規制されることなく存在し続けるとしたら、AOCの素晴らしいコンセプトも崩壊してしまうリスクを負うことになるが、少なくとも消費者には、自分たちの買うものが本当にその土地の味を反映したものなのかどうか分かるように、現在のラベルに対抗する何かを作ることが必要だと思う。最低限行うべきは、それではないだろうか？

10. 結論

本物のワインを口にしたとき、これまで味わったことのない味や、他にはない特別な香りに心を動かされたとき、実はあなたは、地球から遙か遠い世界の素晴らしさに感嘆しているのである。

この遥かなる世界、実は、私たちの行う農作業の一つひとつが、尊重し、また支えてもいる地球の掟によって、私たちの五感でも捉えることのできる物質的な性質を持ったものへと変換されている。人間は、その叡智を更に広げ、敬意を払うことを忘れない、芸術的な農業を通してもてる力の全てを地球に返すよう努力すれば、自らの果たすべき役割を存分に果たすことができるはずである。逆にそうすることで、この波動に満ちた世界が私たちにもたらしてくれる豊かな想像性を、今まで以上に受け取ることができるようになるのである。

私たちは、視覚も含めた五感全てで、日々、この豊かさを享受している。何故視覚を問題にするかという、美しいものを眺めるのも私たちにとっては滋養の一つであり、このことは特に子供達のためにもっと考えてやる必要があるのではないだろうか。彼らはしばしば、目を覆うばかりの酷い格好をしており、放っておけばこれが彼らにとっては当たり前になってしまう。存分に発揮された波動界からのエネルギーをしっかりと享受していれば、人は、命を与え、育ててくれている力ともっと調和のとれた関係を持つことができるはずなのである。それが実現されれば、葡萄栽培家は「君は君の飲むものに尽きる」と言うだろうし、農業を行うものは「君は君の食べるものに尽きる」と言うことになるのである。

こうしたこと全てによって始めて、私たちはディオニソス神話の本当の意味を理解できるようになる。彼は先ず、ヘラ（ゼウスの妻）に命令されたタイタン族によって八つ裂きにされるが、ヘラはその彼の肉体から個性の力を生み、その後、人間が自らの個性に命を吹き込むことができるよう、地上の世界へ降りることを命じる。タイタン族がディオニソスの肉体を引き千切るというのは、実は全てのエネルギーを破壊してしまうことを意味し、そこから脱出することによって、私たちは時間の中へ、つまりクロノスの力の支配する世界へと足を踏み入れるのである。そして更にクロノスの世界に入るとは、その父であり、万物の象徴であるウラノスの統べる世界を後にするということでもある。言い換

えれば、マクロコスモス（巨視的宇宙）を離れ、ミクロコスモス（微視的宇宙）に入るといふことにでもある。もちろん、この父と子の別れは幾つもの悲劇をもたらした。更に部分的で、不完全で、危険な発見をももたらし、そこで人間は、自らを世界の長だと思ひ込んで地球の破壊を引き起こしているのである。

しかし、ディオニソス神話には楽観的な部分も沢山あって、彼の魂は女神、パラス・アテナによって救われ、ゼウスのもとに届けられたことになっている。そこから一つの愛が芽生え、「死ぬべき運命を背負った」セメレとゼウスの結婚へと発展する。この二人の間の子供としてディオニソスは生まれ変わるのだが、新しい豊饒のエネルギーが受胎することによって、今度は農業、科学、そして葡萄の栽培を人間に教えることになるのである。

この逸話は、人間が自らの魂の力によって復活したこと、更に、人間が活用することのできる新しいマクロコスモスの知識を手にしたことを意味している。バイオダイナミも、そしてシュタイナーの偉業も、若い世代が渴望しているこの復活に一役買っていることは間違いない。

一刻も早く、彼らの望みをかなえてやらなくては、このままでは道を誤ることにもなりかねない。

ワイン、葡萄、バイオダイナミ

2010年5月

著者：ニコラ・ジョリー

訳者：藤田 和子

発行所：株式会社ファインズ

本書の無断複写複製（コピー）は、特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。